
双視者 ~ Past&Future ~

オリマリオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双視者（Past & Future）

【Nコード】

N5083V

【作者名】

オリマリオ

【あらすじ】

過去を見ることができ、未来を変えたい少年、明日^{あすま}未来^{らいし}琥。未来を予知することができる、過去に決着をつけたい少女、過^{すぎ}行^{ゆき}亜^あ里去^{りさ}。対なる願いと力を持つ二人が運命的にも出会ったとき、止まっていた彼らの時間は動き出す。

過去の過ちを、未来の悲劇を払拭するべく、二人は小さな悲劇を、人類の危機を変えるために歩き出した。

1、進化の始まり

二十五世紀。西暦で言うならば、今年は二四十一年。

四〇〇年近く前から進行していた地球温暖化やそれに関係する環境問題は、少しずつではあるが、解決の兆しが見えていた。

一つは、人工のオゾン生成を行い、それを噴霧したことによるものだ。二つ目は、気温上昇による海面上昇に対し、地球外に放出することだった。大量の水を抱えた専用宇宙船は、別惑星の重力に捕まり、成功に終わった。三つ目は、火力発電を全面停止し、二酸化炭素を始めとする有害物質の排出量を低下させたことにあつた。

地球全体を主として見たとき、あげられるのはこの環境問題の改善にあるだろう。しかし、人類にもまた、少しずつではあるが、変化が訪れ始めていた。

脳回路改造手術によつて、一部の人間は、『超能力』に近い能力を手に入れようとしていた。それと同時に、全ての人間に対して脳内に個人情報埋め込んだデータチップを埋め込むことが義務付けられた。表面上、このデータチップ埋め込みの義務化は個人情報の一括統一が目的とされているが、実際のところは、『超能力』を扱う者とそうでは無い物の区別をつけるための義務という噂が流れたのは、一度や二度ではなかった。

『超能力』を一部の人間しか会得していない大きな理由としては、『超能力』を使った時の体の負荷に耐えられるだけの肉体と精神力を併せ持った者が極端に現代に少ないということにある。技術進歩と世界全体における『平和ボケ』によつて、現代の人間の力は著しく弱まってしまっていた。

「私思うんだよ」

そんな世界での、とある二人の帰り道。セミロングの髪の少女が横から話しかけてくる。

「ラッコみたいに、能力をたくさんの人が持つようになって、互い

に牽制しあえば、それは何百年前の繰り返しじゃないかってね」

隣にいる代々木奈美よよぎ・なみの持論をぶつけられた明日未来琥あすま・らいこは、なんの不自由もなく言い返した。

「俺が持つ能力で国同士が牽制しあうなら、是非とも見てみたいね」
来琥のことを『ラッコ』と呼ぶのは奈美だけである。十年以上の付き合いとなる来琥の幼馴染であるだけに、二人の仲を敬遠する者はいなかった。

そもそも、こうした一部の超能力者が力を上げてきた理由の一つは、『完全撤廃された核兵器に代わる新戦力』のためだ。核兵器は二十世紀には完全撤廃することに成功し、超能力開発が始まったのも、計画そのものは、南北アメリカ大陸を一つとした西端アメリカ連合（通称、WUSUウース）が核兵器を完全撤廃させた二十二世紀末からあったのだ。更に、日本はもとより核兵器を所有していなかったために、WUSUより百年近く、二十二世紀初頭には計画を本筋で進めていた。

各国で超能力開発が行われる中で、日本が他の国に比べてダントツに超能力者の数が多いのは、これによるものである。

「じゃあ、また月曜日ね？」

「おお、またな」

手を振る奈美に、来琥も手をふって応えた。

変化はいつだって突然だ。

世界が変わるのも、一瞬のうちに起こることだ。

奈美から今朝来たメールで、風邪を引いたから休むといった内容のメールを受け取り、一人で登校した月曜日。

各学校（大学、高校、中学、小学の全て）は、最近の治安の悪化を懸念して最低三人以上の警備員を置いている。来琥の通う浜比良はまひら高校も、五人の警備員を平休日問わずおいている。

その警備員が一人残らず倒され、浜比良高校の正面玄関には一人の女性が佇んでいた。その目は、新たな挑戦者を待ち望んでいるか

のような、例えるなら獣が持つそれだ。

「アンタ、下がってなさい」

来琥は後ろからかけられた声が自分に対してのものであると近くするのに数瞬の時を有した。

振り返ったときにいたのは、ツインテールの少女だった。ライトレッド。オゾンの人工生成によって減少した紫外線のおかげで、黒髪という色素を推奨する必要がなくなった現代。髪の色が全面的に許されたからといって、ここまで派手な色で染めるのも珍しいな、と思ったのは後のことであるが。来琥の目の前にあるのは、こちらを圧して、力でこの場から立ち去らせようとする目。手には鞭とかわしき得物が握られている。

来琥が再び前を向いたのは、地を揺らしながら接近してきた先ほどの女性の存在を感じてからだった。

「二度目よ。下がれ」

すでに少女の目は来琥を捉えてはいなかった。一度目は忠告、二度目は警告という意味合いを含んでいるのだろうが、来琥もこの状況をよく把握しきれてはいないのだ。そう簡単に引き返すわけにもいかない。

少女が持っていた鞭を振りぬいた。振られた鞭は、暴風を巻き起こして真空の刃を形成し、女性へと突き進む。しかし、女性の方その刃を放ってくるのが読めたのか、掠らせもせず回避を行う。

女性が少女へと突っ込み、拳を突き出す。少女はその拳をかわして鞭を振りぬくが、女性はそれをかわすとほぼ同時に少女の頬に拳を突き出す。

「あ………おい！」

来琥は声を挙げて少女の安否を確認しようとしたが、それを少女を吹き飛ばした女性が妨げた。

「関係ない者は、早いうちに消えてもらうわ」

女性が拳を振り上げ、それが下ろされる前に、女性は鞭に打たれて地面に叩きつける。

「おい、大丈夫なのか！」

「下がれって言ってるでしょ！！」

「こんなことになって見過ごせるか！！」

来琥は言い返すが、少女もまた、更に言い返す。

「何の力もないくせに！！」

「・・・・・・力なら、ある！！」

「え——？」

来琥は懐に入れておいた縮小カプセルを取り出すと、縮小状態を解除する。膨大な冷氣と共にカプセルは膨張し、やがて蓋が開く。

縮小カプセルは、温度によって体積を変化させる物体の仕組みを利用し、超低温によって物体を縮小させ、開封時に外部の常温を取り入れ、本来の大きさへと変えるものだ。

来琥は開いたカプセルの中から一本の剣を取り出した。剣本来のイメージとは違うものであるのは、その外見から分かる。柄と刃の間には、まるで花のがくの部分のようなものがあり、こちらは専門的に優れているものしか分らないが、刃の部分が全て打たれたものではなく、中心部分で仮溶接されたものであることが分かる。

「それ・・・・・・まさか・・・・・・」

少女が驚愕に満ちた顔で来琥を見つめた。来琥自身、この剣を持つのは数年ぶりといっても語弊はない。だが、構造も扱いも、十分に心得ているし、十二分にその性能が発揮させることができる自信もある。

「詳しい説明は後です。だが、お前も後で説明をもらうぞ」

来琥は横からその剣の存在に心を奪われていた少女に向かって目を合わせずに諭した。少女はその声でようやく我に返ったようで、きつく言い返した。

「あつ、当たり前よ！！」

そう言っただけで少女が鞭を構えなおす。そこで来琥は一つ思い出して少女に問いかけた。

「あの人、殺していいの？」

「やむを得ないなら殺すけど、部外者に殺されれば面倒だから、殺さずいく!!」

そう言う少女は鞭を振りぬいて真空の刃を突き飛ばす。女性がそれをかわすと拳を来琥へと突き出してくる。来琥は拳をかわしながらすれ違い、腹部へと剣を滑り込ませる。

「ぐあはっ……!!」

女性がその痛みに耐えきれずにうめき声と共に一瞬体勢を崩す。少女がその隙を見逃さずに鞭を振りぬき、それによって女性が大きく吹き飛ばされる。地面を何度か転がった女性は立ち上がると、来琥達に背を向けて走り出した。

「あいつ、逃げるぞ!」

「深追いしないで! 地雷が仕掛けられている!」

「じ……地雷?」

地雷はもはや旧世紀の兵器だ。旧世紀の地雷が廃れたのは、レーダーで感知されやすくなってしまったからだ。二十一世紀中ごろにはセンサー障害を起こして位置がばれないようにする粒子を噴霧させる地雷も開発されたが、むしろその一帯が地雷原であるという報告になったために、大した意味がなかったということもあった。その上、地雷はあらかじめ設置しておくものであり、銃や爆弾のようにその場の判断で攻撃させることができない兵器だ。だから、地雷などという古い兵器が使われるはずはないのだが――。

「現代の地雷は落穴式だ。しかもかなり深い」

落穴式。地面に使い切りのドリルを撃ちこんでおき、その周辺に物体の重みを感じると、自動的に地面に対して垂直に掘り進み、深い地面の底へとその物体を埋めていくのだ。そしてそれを助けに来た者もまた、別の穴にかかるというわけだ。

「ふーん……じゃ、話してもらうかな?」

「はっ?」

少女がとぼけたように目を丸くしてみせた。

「お前のこと」

「えっ・・・・・・・・なっ・・・・・・・・！」

先ほどのことを聞こうとしただけなのに、何故目の前の少女は顔を赤くしているのだろう。

「・・・・・・・・この、セクハラがあー！！」

「ど、どこであっ！！」

少女は鞭を振りぬいて来琥の頬を打ち付けた。

来琥はゆっくりと立ち上がった。まだ頬は赤く腫れて痛みを伴っている。

「名前くらい教えてくれたっていいじゃねえか。俺は明日未来琥だ」
「セクハラ野郎に教える名前などない！」

根に持つタイプなのか、先ほどのことを理由に単に頑なに名前を言いたくないのか。

「じゃあいい。手を出すだけでいいから」

そう言つて来琥は自身の右掌を少女へと向ける。少女はかなり躊躇ったが、とうとう諦めて左手をその掌の前にかざした。

来琥はその掌の先から少女の脳内の情報網へと侵入し、その中の記憶データチップから少女の名前を引っ張り出した。

すぎゆき
「過行・・・・・・・・亜里去・・・・・・・・」

「何故名前を・・・・・・・・」

「お前の記憶のデータチップを漁らせてもらった。安心しろ、名前しか見ていない」

来琥のもつ能力。

「俺は人と歴史の過去を見ることができる」

「過去・・・・・・・・」

亜里去が、来琥が見ることのできる時間帯の名を呟くと、来琥は何か考え出した亜里去に構わずに続けた。

「けど、この能力じゃ俺は目的を達成できない。俺は、未来を変えたいんだ」

「私は・・・・・・・・」

来琥の肩を落としたような表情でそう言うと、亜里去がきつと鋭い目で来琥を見て言った。

「未来を見ることが出来る。そして、過去を払拭したいの」

「過去を……」

来琥はこの時、自分とこの亜里去という少女が会おうべくして出会ったのではないかと思った。未来を変えたいと望みながら、過去を見ることしかできない自分。過去を払拭したいと望みながら未来を見ることのできる亜里去。この対なる願いと力を持つ自分たちは、互いに力を生かす必要があるのだろうか。

「それよりも、その剣、刃薔薇でしょ？」

「ああ。お前の鈴嵐と同じ、五神斬の一つだ」

五神斬^{ごしんざん}。国際レベル的にはA級の危険度に該当するほどの武器。表向きには公表されていない。理由は簡単だ。五神斬はその危険度ゆえに、その構造や設計図などが実物から容易に創作することができ、量産されれば、撤廃に成功した核兵器に代わる力として全世界が大量生産を始めるからだ。超能力者ではないものたちに、同等ともいえる力を差し出すのと同じこと。世界にも数えるほどしかない超能力者によって保たれている現代の世界の均衡^{バランス}が、量産兵器によって崩されれば、二十一世紀に起こった第三次世界大戦に引き続いて第四次大戦が起こりかねないのだ。

五神斬の一つ、来琥の持つ暗銃刀^{あんじゅうとう}・刃薔薇^{ハバラ}は、剣としての外見を持ちながら、刃の中に銃口を隠し持つという二重結合武器だ。五神斬は基本的にはこうした二つの武器が一つの武器に集約されたものが普通だ。だが、例外が一つだけある。それが、亜里去が持つ烈風^{れつふう}鞭^{べん}・鈴嵐^{スズラン}だ。

鈴嵐は、元より鞭としての機能しか備えていない。他の五神斬のように、別の武器が取り付けられているわけではないのだ。その代わり、他の武器では実現不可能であった空調操作機構を取り付けることに成功している。この空調操作機構は、周辺に存在する空調、いわば気流を操作することによって風の力を思うがままに操ること

が可能となったのである。つまり、鈴嵐が先ほどのように真空の刃を発生させることができたのもこの空調操作機構によるものであり、その機構の力のほんの一部ということになる。

「五神斬を全てこの世から消し去る。そうすれば、俺が知らされた未来を変えることができる」

「私の目的は一つだけ。殺陣椿^{たてつばき}の所有者に復讐すること」

「殺陣椿……」

殺陣椿。剣と盾の二重結合武器。強固な盾と若干短めの剣が外見の第一印象だが、刃薔薇同様、変形機構を備えたこの武器は、変形することによって盾部分の一切を刀身の方に回し、大剣を作り出すことができる。

「その復讐に、俺も手を貸す」

「人にやつてもらったら、復讐じゃないわよ」

「あくまで手を貸すだけだ。その代わり、お前にも俺の目的達成を手伝ってほしい」

「はあ？　なんで私が」

「ギブアンドテイクだ。互いの目的は少なからず被ってるんだ。協力してくれないか」

来琥の真剣な目つきに、亜里去は思わず目を逸らした。亜里去は目を逸らしたまま、本来に来琥以外には聞こえないくらいの声で言った。

「まあ………あんたがそんなに頼むなら、きよ………協力してやつてもいいわよ」

「じゃ、頼むぞ。亜里去」

この日、誰にも知られることもなく、二人は世界の裏側で戦うことを決意したのであった。

同時に、裏側の世界が誰にも知られることなく動き出したのであった。

2、手がかり

来琥と亜里去が出会った次の日、来琥は亜里去に呼び出された。周囲には誰もいなかった。いや、人気のない場所を選んで呼び出されたのであろう。亜里去は人気のないと分かっているながらも、周辺を警戒していた。

「昨日私が追っていたあの女。名前は木嶋相子^{きじま あいこ}」

「何者だ？」

来琥の当然ともいえる一瞬のうちに出来た質問にも、亜里去は戸惑うことなく答えた。

「殺陣椿の所有者の部下の一人よ。今私が殺陣椿に関してもっている唯一の情報」

実のところ、来琥には「それしか情報がないのか」と非難や罵倒は許されなかった。相手が気の強い亜里去だからだけではなく、来琥自身も、他の五神斬の情報を何一つ掴んではいなかった。つまり、来琥の目的を達成するための情報を掴むまでは、亜里去に協力する体勢を取るしかないということだろう。

「そいつはどこにいる？」

「本当はこっちが追い詰めたけれど、向こうもこっちを追ってきてるから正確な位置情報は掴めてないわ」

亜里去は尚も周囲に気を払いながら話を続けていた。

「で、なんであんたはその・・・私に協力するわけ？」

「は？　なんでって・・・」

急すぎる話の別方向展開に頭がついていかなかったのは、来琥自身もそれを聞いていた亜里去にも分かっていたことだった。

「目的が少なからず一致しているんだ。少しでも互いを守ればいいだろ・・・」

「なっ・・・別に感謝なんかはしてないからね」

「感謝してほしいとも思ってたねえよ」

もし、第三者がこの二人のこの部分だけの会話を聞いたら、誰もがこう思っただろう。

なんだこのツンデレカップルは、と。

しかし、そんなことを互いに思っているはずもなく、短い沈黙の後、亜里去がどうにか気を必死に紛らわすかのように脱線した話題という名の列車を再び線路へと引き戻した。

「たっ……殺陣椿に関する情報提供者と接触を計画しているわ。場所は浜比良養殖漁場倉庫跡地。……よくまあこんな跡地が残っているものね」

人は新しい物を求める。それと同時に、古いものにも愛着、執着を持つ。これがその人間心理の一つとも言えるのだが、残すにしてももっと古くからの、世界遺産に登録されているような建築物を残すべきだろう。とはいっても、数百年のうちに世界中のあちこちで起こった巨大地震によって、本当に古くからの遺産レベルの建築物はほとんど残ってはいないのだが。

「とりあえず、そこに行けば殺陣椿の情報が手に入るんだな？」

「まあ、そういうことね」

亜里去が腕を組んだままで来琥の確認を肯定する。弱くはあるが、風が辺りに吹き付けた。

一週間後、亜里去が提示した情報提供者が指示した日時。浜比良養殖漁場跡地。さすがに数世紀前から行われているだけに海からの距離はかなり近い。潮の香りが鼻腔をくすぐる。来琥は海にいったことがないわけではなかったが、潮の香りを嗅覚に感じたのは久々のことだった。地球温暖化による海面上昇に対応すべく行われた地球重力外への放水により、実際に放水された海域の魚介類は、別の海域への移動を余儀なくされた。そうして移動した先で、新しい環境に体がついていかずに死んでしまうという問題が起こった。そこで世界各国で注目されたのが養殖だ。すでに養殖漁業のシェアは高く、むしろ天然のものは高級品とされてきていた。そうした漁業事

業によって、養殖も精密さと効率性が求められるようになっていた。早い話が、人は絶対的なボーダーラインを無意識のうちに欲していたということだ。

技術を求めるに当たり、旧世代の養殖では割に合わなくなっってしまったために、旧世代の養殖漁場は次々と閉鎖していった。そのうちの一つがここ、浜比良養殖漁場だ。

漁場跡地の正面扉から、来琥と亜里去はゆつくりと入っていった。複数の気配はあった。だが、人の気配は一つだ。情報提供者のそれか、それとも。

「あなたたちが、私が持つ情報が欲しい人達？」

現れたのは、一人の少女。年齢は来琥たちよりもずっと下だ。強いて言えば中学生。だが、小学生と言っても何の違和感もない、むしろの方が合っている。肩よりも長いローズピンクの髪が、古くなつた養殖場の壁穴から吹き抜ける隙間風で揺れる。こんな子が、殺陣椿に関する情報を持っているのだろうか。

「そうだ」

「じゃあ、まずはその権限があるかどうか、証明してみてね」

少女がそう言いながら口元に笑みをこぼすと、少女の近くにあったコンテナから人がコンテナを突き破って現れた。数は十。いかにも古風なスパイを思わせる黒いタキシードにサングラス。短く刈りそろえられた頭。全員がまったく同じ服装、体型だ。

「来琥！ この男たち、全員サポロイドよ！ 手加減はいらないからね！」

「了解！！」

サポロイドは、言ってみれば家庭において家事の手伝いを行う命令を受けた上でそれに沿って自律神経によって動くプログラムを組み込んだサポートアンドロイドとして数十年前に開発されたロボットである。男性の外観の執事タイプ、女性の外観のメイドタイプの二つがある。その数十年前に開発されたロボットのプログラムを独自に書き換えて戦闘用にしたのが、ここ最近裏ルートで流通している

のである。

「横から回る!!」

「勝手にしなさい!」

来琥は自身の自慢の一つである足の速さを利用して亜里去の左方へと常人以上の足の回転によって走り出す。来琥が横に回り込もうと走っている間に、亜里去が右手に握っている鈴嵐を構え、自分たちの右方へと走り出した来琥に気の取られた一瞬の隙をついて振り抜く。鈴嵐に備えられている空調操作機構によって、振り抜いた部分を中心に空気が裂かれ、真空の刃が走る。それはもちろんサポロイドを射線上に捉えていたが、それと同時に、奥の方で高見の見物のようにこの戦闘を見始めた少女に標準を合わせての攻撃だった。

殺陣椿に関する情報を持っている時点で裏の顔があることが明確ではあるが、サポロイドを十体も持つほどの資金力を持っているこの少女が、どれほどの力を持っているのかを知るために。

しかし、亜里去のそんな思惑は、その少女の前で阻まれた。

「なっ!?!」

真空刃によって亜里去の思うがままに掻き乱されていた空調が強制的に止められ、すぐに隙間風の一部となった。

「まさかこいつ……」

少女は真空刃を霧散させたときには全く動かなかった。強いていえば、自身に真空刃が向かって来たときに、こちらの攻撃を見て僅かに口元を歪ませたことだろう。

苦痛そうに歪めたのではない。戦いを楽しむかのように、笑いに口元を歪めたのである。

「超能力者!?!」

そんな亜里去の言葉を来琥は聞き取ることができなかったが、その間にもサポロイドの数を次々と減らしていた。サポロイドの電腦部分は人間の脳部分と同じ場所に置かれている。人間になるべく近づけるために行われた措置が、ある意味裏目に出たといってもいいだろう。来琥はサポロイドと距離をおきながら、刃薔薇を銃形態に

し、開いた刃の中に光る銃口から銃弾を放ち、サポロイドの頭部を貫かせる。元々、来琥は射撃能力が高いわけではないが、一定の訓練を刃薔薇を持つときに行ったために、積極的な回避行動を行わない対象に対しての標的の狙い撃ちは難しい話ではなかった。

「亜理去！」

来琥はなぜか呆然としている亜理去の名前を叫んだ。それを呼ばれた本人はぶっきらぼうに返す。

「気安く名前を呼ぶな！」

「お前もな！！」

それに対し、来琥も同様にぶっきらぼうに言い返し、刃薔薇を握り直した。亜理去がサポロイドの体勢を崩させようと空調操作機構で来琥が飛びのいた直後に暴風を巻き起こす。しかし、サポロイドらは足裏の接地部固定機能によって吹き飛ばされずに踏ん張りを見せた。風が止むと同時に、来琥の刃薔薇の銃声が二度跳ねる。その銃弾もサポロイドの電腦部分を貫通する。ここまでで残ったサポロイドは三体。来琥はこちらに接近してきたサポロイドの一体を側面への回避で受け流し、その目の前にいたサポロイドの足を勢いに任せて斬りぬく。体勢を崩したサポロイドはそのまま地面に張り付いたように再び動きだすことはなかった。

直後、来琥を暴風が襲う。刃薔薇を床に突き刺し、その場で耐える。体勢を崩して吹き飛ばされることこそなかったものの、完全に攻撃を中断された来琥は、暴風の発生源——正確には、暴風の発生源——の方を振り向いて声を荒げた。

「何すんだ！」

「アンタが邪魔なんですよーがつー！！」

そう言いながら亜理去は再び暴風を巻き起こす。来琥は飛びのいて暴風の発生圏内から脱すると、その暴風に体勢を崩したサポロイドへと銃弾を放つ。サポロイド等が暴風によって体勢を崩したあとにも関わらず、その銃弾を回避すると、来琥と亜理去それぞれに一体ずつ向かってくる。

「そつちは任せた！」

「言われなくても！！」

亜理去が目の前のサポロイドに向かって横薙ぎに鈴嵐を振るい、真空刃を発生させ、サポロイドを腹部から両断する。

来琥は向かってきたサポロイドの拳をかわすと、背面から刃薔薇を突き刺した。突き刺した刃薔薇を強制的に銃形態に変形させ、その刃を開く。より一層大きくなった穴により、サポロイドの動きは完全に止まった。

「これで証明はできたんじゃないか？」

「全く、手間かけさせてくれるわ」

戦闘型のサポロイドを全て破壊した二人がそれぞれに愚痴をこぼしていたが、少女にはそのことに対して何か反応する必要はなかった。だが、先ほど自分が『証明しろ』と言った以上、こちらから話題を振らざるを得ないのだろう。

「君たち二人つて……ほんとツンデレだね」

「なっ……！！！」

「俺のどこがツンデレだ！！」
わたし

「ぶっ……ハモッてる……」

自分たちで知覚したのと、少女に指摘されたことにより、その事実を知った二人は互いに焦りで顔を赤くして背中を向けあった。

「で？ お前が持つてるといふ情報は？」

「それを得るためには、二人の能力がそれぞれ必要になる」

「俺たちの？」

少年の返答に、少女は首を縦に振って応えた。

「殺陣椿と何の関係もない男が、最近頻繁に殺陣椿に接触しているつてというのが、私の情報。この男を捕まえて、殺陣椿への接触理由を君の力で」

そう言いながら少女の目線は少年へと向けられていた。過去を見ることのできる能力。そして、もう一つ、未来を見るための能力。

「そして、君の力でその情報によってこの先起こり得ることを予測してほしいの」

情報を得るために、それぞれの力が必要になるとは、この二人は思いもしなかったのかもしれない。ただ、接触理由はまだいいかもしれない。問題はこの先、その情報をもとに何が起こるかだ。大したことではなけれどもいいのだが、殺陣椿と何の接点もなかったはずの者が動いている時点で、そう簡単に収集がつくとも思えない。

「そういえば、まだ名前を聞いてないわね。私たちのことは知ってるようだし、不公平だと思わない？」

それを言われて少女は、自分がまだ目の前の二人に自己紹介をしていないことに気がついた。

「そっか……じゃ、カナって呼んで」

「フルネームじゃないのか……」

少年がぼそりと呟いた言葉を全く耳に入らずにカナは続けた。

「さっき話に出てきたその男の持つ情報は私も欲しいから、二人についていくから、よろしく」

そう言っただけでカナはその顔に笑みを浮かべてみせた。

「ラッコ、この間はごめんねえ。急に熱が出ちゃって」

自宅から姿を現した奈美がそう謝罪して来琥の横についた。

「いや、気にしてない。風邪なんて誰でもひく」

来琥はその謝罪を何の濁りもなく受け止め、僅かに笑みを見せた。周囲の通行人も、横にいる奈美も、今こうして高校生として学校への道を歩いている自分も、何の変哲もない人間だ。それがなぜか幸せなことのように思っていた。先日の木嶋相子との戦闘、カナとの接触もそう思わせる要因であったのだが。

そんな安らぎを感じていた来琥は、通行人の一人に一つの気配を感じた。自分が知っている者の気配。一人の男の気配。来琥はその気配を感じ、その顔を確認した瞬間、体中を悪寒が走った。自身が戦っているその意味を叩きつけられた時の感覚に、それは似ていた。

「どうしたの、ラッコ？」

「……いや、何でもない」

来琥とその男の視線が交わる。交わっていた時間は一秒にも満たなかった。来琥は奈美に何かを悟られまいとして。男は何も変えることのできていない来琥を嘲笑わんとして。互いにすぐに目を逸らした。

3、過去を持つ者、語る者

男とすれ違った日の放課後、亜里去に呼び出された来琥は、カナも含めた三人で、殺陣椿の接触者を追いつめるために動き出した。

「いい？ チャンスは一日一回。逃せば明日まで待たなきゃいけないだからね？」

カナがそう念を押すが、実際はそれ以上に面倒だろう。向こうがこちらの存在に気がつけば、殺陣椿との接触時刻や場所を変更、最悪の場合、完全に姿をくらます可能性もある。実質、チャンスは一度。この一回に賭けるしかない。

「ま、別にあんたが来なかったところで、私一人でも捕まえられるけどね」

「そういえば、亜里去、学校は？」

自分より早く来ることは別に大したことではないが、来琥の通う浜比良高校は、今日は昼過ぎには終わっていた。他の高校はそうではないというのは聞いていた。つまり言えば、他の高校はまだ小一時間授業があるのだ。亜里去が浜比良高校の生徒ではないことを来琥は確認済みであったために、余計に気になっていた。

「は？ そんなの行く必要ないでしょ」

「は？」

亜里去から返された言葉に、来琥は拍子抜けした声で返してしまっていた。

「ちゅ……中卒？」

「悪い？」

いらいらしながらも返された言葉に、来琥はさらなる返答を行うことができなかった。

「しっ！ おままことは終わりだよ」

カナのその言葉に、二人とも口をつぐんだ。本当は来琥も亜里去も、「何がおままごとだ！」と詰め寄りたい気分ではあったのだが。

三人の目の前を、一人の男が通り過ぎた。男というには、まだ若い。青年と言うほどの年齢だろう。鋭い目つき。ハーフグレーの髪が立てられている。あらかじめ決めておいた作戦に従って、三人が動き出す。男の前にカナが立ち、男に話しかける。

「ねえお兄ちゃん、エクストってどこお？」

エクストは現在全国展開されているコンビ二エンスストアの名称である。ここ十年間、コンビ二の売り上げでは常にトップを独走している。そのエクストに行きたいという少女が目の前に現れて、何かを疑う者は普通に考えればいい。今回、カナは囷である。

「それなら……」

完全にカナに気が逸れたと思われた瞬間、来琥と亜里去が同時に物影から飛び出す。同時とはいっても、亜里去の方が若干男との距離が短い場所から走り出したために、男に到達したのは亜里去の方が早かった。亜里去は鈴嵐を振って男へと向かわせる。来琥の刃薙薇は、男を負傷、当たり所が悪ければ殺してしまう可能性があるために、あえて構えてはいなかった。

「俺を拘束する理由を聞かせてからとさせてもらおう」

そう言うなり、亜里去の放った鈴嵐をかわし、保険の波状攻撃要員として接近した来琥の拳をかわし、カナを持ち上げて盾にしてくる。男は右腕だけでカナを持ち上げ、左手の人差し指の先から、火を出現させる。来琥と亜里去の動きが止まる。

「さあ、言え。貴様らの目的を」

三対一という数の利を全く感じさせない戦い方だ。一番力がないと思われる者を盾にして、残りの味方の動きを封じる、古い武士道精神を重んじる人は「卑怯者」と罵るような戦術だろうが、今にしてみれば、これは立派な基本戦術だ。第一、三対一という数においてアンフェアな状況で、味方一人を盾にすることを「卑怯者」と言う資格はないだろう。

「やってみなよ。君の力は全てが無に帰す」

沈黙と共に、四人の時間が止まる。男の左人差し指からは、絶え間

なく火が出続けている。再び時間が動き出した合図となったのは、男が出現させていた火を消した時のものだった。

男が火を消すと同時に、拘束されているカナの次に男に近かった来琥が走りだす。来琥が向かってくるのを見た男がその手を広げ、包み込むような形の手に火を出現させ、来琥へと放ってくる。しかし、その火球は横からの暴風によって軌道を逸らされる。来琥は尚も接近し、十分に距離が縮まったところで右拳を構える。男が自身の顔面の前にカナを持ってくる。来琥は拳を叩きつけることなく、その場で一回転し、後ろに飛びのく。それと同時に男の背中を亜里去の鈴嵐が打ち付ける。

「油断大敵だよ？」

男の拘束から解放されたカナがそう言いながら、男の足元に向けて亜里去が放つことができるはずの真空刃を放った。それも、亜里去がいつも放つのよりもずっと強力なものである。真空刃によって叩きつけられたコンクリートが破壊され、破片が男へと襲い掛かる。

男が破片を振り払うと同時に、カナに向かって炎を打ち出すが、カナの前でその炎はかき消される。その炎を今度はカナが放つ。不意をつかれながらもその炎を身を転がして回避し、立ち上がった男の背中に亜里去の鈴嵐が叩きつけられる。ふらついた男の左頬に、来琥の右拳が突き刺さると、男はそのまま倒れこんだ。

「俺は高真実。^{たかま・みのる}だが、それ以上のことを話す気はない」

「俺たちが聞きたいことは一つだ。殺陣椿への接触理由、それだけ教える」

実は自分が殺陣椿に接触していることがばれてしまっていることにあまり良い心地ではなかったようだが、来琥達の気迫とも呼べる詰め寄りにも決して屈する様子がなかった。

「まあ、しょうがないか……」

そう言つて来琥は何も言おうとしない実の額に手をかざし、実の過去を詮索する。その中で、殺陣椿と接触するその理由と呼べる部分

の記憶を掘り出す。直前に聞きたい事を尋ねておくことで、対象にその記憶を脳の前面に出させたため、目的の記憶を求めるには難しいことではなかった。

「三年前、情報の闇に隠れた五神斬生誕事件の黒幕を潰すこと・・・か」

五神斬の存在を知っている。それは殺陣椿接触の時点で分かっていたことであつた。だが、五神斬生誕事件の真相を知っているのは、まともにはいなかった。

「こあくまたちのよる五神斬生誕事件・・・！」

亜里去がその事件の別名称を震えながら呟いた。しかし、来琥はその事件について詳しいことは知らなかった。

「亜里去、やはり知っているのか」

「アンタは知らないの！？ 刃薔薇を持っている・・・五神斬との契約を行っているのに！！」

「刃薔薇は、その事件で俺が手に入れたものじゃない」

「確かに」

そこで口を挟んできたのは、カナだった。その目は全てを知っていると想わせるような目。

「あの事件の時、来琥は現場にはいなかった」

「何故そんなことが分かる？」

そこで実が口を挟む。それもそうだろう。見た目から推測される年齢として、そんなところに実際にいたとは思えない。それも三年前のことなのだからなおさらだろう。

「私のゴツバネットワークで手に入れたものなの。信憑性は高いと思っってもらって構わない」

ゴツバネットワークの存在が、カナを情報提供者として暗躍することのできる理由なのだろう。逆を言えば、彼女はそのゴツバネットワークを失ってしまうと、ただの国家戦力となる超能力者となってしまうのではないのだろうか。

「カナ、じゃあお前はあの事件のことをどこまで知っているんだ・・・」

「……？」

「私が知っているのは、その事件の表の面だけ。私は全てを知りたいの」

来琥の質問にカナは即答で答えて見せたし、その答えに躊躇いはなかった。

「実。お前は五神斬生誕事件の黒幕を調べるために、殺陣椿に接触したんだな？」

「ああ。それ以外であいつに興味はない」

その実の答えを聞いて、カナがまるで自身が指揮官を務めているかのような口ぶりと態度で亜里去の方を振り返ると、得意げな笑みを見せた。

「さ、君の力を使って。亜里去」

「はいはい、やればいいんでしょ？」

そう愚痴をこぼしながらも、亜里去が真っ直ぐに腕を伸ばし、そこに気力を集中させる。そこに気を集めることで得られる未来。自分たちが真実を知らずに過ごし続けた時、どうなってしまうかを映し出す、亜里去の力。

「な……何……これ……？」

亜里去は、現れた未来に驚愕と共に首を傾げるしかなかった。

こあくまたちのよる

五神斬生誕事件。その事件を正確に記憶している者はほとんどいない。五神斬そのものが世間に公表されてないために、五神斬生誕事件それ自体も『存在』を知っている者は全世界の人数にすれば○コンマ未満という言い方でさえも大きく見積りすぎであろう。

五神斬。刃薔薇、鈴嵐、殺陣椿、ももふそつ桃斧槍、おつ桜鎚の五つからなる武器。

こあくまたちのよるその五神斬が製造され、所有者を決定するために起こった闘争を、五神斬生誕事件と称されて密かに語られている。

五神斬生誕事件には、世界中から極秘の情報網において集まった屈強な戦士たちが集まった。だが、その中で二十五歳以上の者は全て弾かれた。理由は全て同じ。若い世代が極地に達するために、老

いた者達が参加する資格はない、と。

残された十五人の青年少女達は、施設内のどこかに潜む五神斬を探し出し、契約を行うことでそれを扱う資格を得る、という古めかしいトレジャーハントまがいのことを行わせた。

過行亜里去は、何も知らずに施設に足を踏み入れ、状況も掴めぬまま、このゲームに参加していた。彼女自身、これに意識的に参加していたわけではなかったために、とにかく一刻も早く抜け出すために、施設の中を彷徨った。その途中で一人の少年に亜里去は出会った。頭はハーフグレーに染められていて、一度見たら長いこと記憶に焼きつきそうな立てられた髪型だった。年齢は亜里去よりも上で、二十かそれ以下であろう。その目つきは鋭く、口調も堅いものだった。

「おい、お前、この馬鹿げたゲームの主催者知ってるか？」

「え？ し、知らない……です」

「……そうか」

少年はそれだけ聞き、満足した答えが得られないと判断すると、すぐに亜里去とすれ違って姿を消した。

その後、誰とも会わないまま、一つの部屋にたどり着いた。部屋の中には、鞭と思われる形の物体が置かれていた。真つ暗な部屋の中で、その物体だけがライトアップされている。

その時、後ろの足音に亜里去が振り向くと、そこには一人の男がいた。男は何も言わずに亜里去を見続けていた。無言のうちに退去を命じているかのように。

亜里去は深呼吸を一つして、自身の未来を見つめた。

今自分が一番近くに掴めるこの物体。これを掴んだ未来、掴まない未来。

彼女は、二つの選択肢を与えられた。掴まなければ自分は目の前の男に殺される。だが、掴めば、目の前の男はその憎しみを亜里去の両親へと向けるつもりらしい。彼女の目に映ったのは、何も言わずに赤い液体の水たまりの上で倒れる両親の姿だった。

（お母さん・・・・・・・・お父さん・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・！！）

亜里去は鞭の柄を握り、それと同時に契約を交わした。手にした武器、烈風鞭・鈴嵐との契約を。

亜里去は握った鈴嵐を振り、男を部屋から退却させた。男はどこかへと走り出し、それきり姿を消した。

三日後、亜里去が学校から帰った時、彼女の両親は一人の男の下で倒れていた。男は一本の剣を握っていた。

「おい」

亜里去は、その男が誰なのか分かり切っていた。少なくとも今の自分には勝てるとは思っていなかった。

「その武器の名前だけ、教えなさい」

「・・・・・・・・殺陣椿」

男はこちらを振り向きながら答えた。亜里去は絶対に目を逸らそうとはしなかった。

「椿の花言葉は・・・・・・・・」

男は亜里去の横をすれ違いながら呟くように言った。

「『冷やかかな美しさ』」

男はそれ以降、あの時のように黙って姿を消した。

それからである。亜里去が戦う理由を得たのは。

4、超能力者の定め

国家戦力としての超能力者。それは各国が暗黙のうちに決めたことである。核兵器がそこで生活する者に大きな被害を与えるのに対し、元は生身の人間である超能力者は必要最低限の犠牲だけで勝利を収めることができるのだ。基本的にこうした実践には、戦闘に特化した能力を持つ者が起用されるのだが、元より戦闘能力のある者がほとんどあるゆえに、例外という形の者がほとんどいないのだが、「今日は転校生を紹介します」

話題は変わる。学力の差こそあれど、転校生は珍しいことではない。高校生は自分がこの高校とは合わないと感じた場合、転校用の書類と転校試験の合格という二つの課題さえクリアしてしまえば、親も教師も教育委員会も一切無視して転校することができる。

「針^{はり}現^{うつ}実^み穂^ほです。よろしくお願いします」

ニコニコと笑みを絶やさずに自己紹介を目の前の少女が行う。実穂は来琥に一度視線を送ると、先ほどまで大衆に見せていた笑みとは全く別種の笑みを見せた。来琥は嫌な予感しかしなかった。まさか、自分について何かばれてしまっているのだろうか。超能力者としての存在がばれているなら別に問題はない。自分から公表はしてないが、特に隠しているわけでもない。問題は、五神斬に関することだ。「じゃ、皆仲良くしてください」

そんな担任のテンプレートな言葉も半ば聞き流しながらも、来琥は情報の漏洩を一人気にし続けていた。

実は来琥達との戦闘の後、連絡先だけを残して立ち去った。自身の目的の達成のために、人の手は借りたくはないのだろう。亜里去がその時に見た未来は、世間ではパニックを起こす可能性を秘めたものだった。

映ったのは、五神斬を持つ者達がりなりふり構わず一般人を殺して

いき、その阻止のために世界規模の戦争が起きているものだった。

亜里去は一応その見えた未来を報告した。その報告を聞いた全員がそれぞれ違う表情をしていた。来琥は一人考え込み、カナは驚きに目を丸くし、実は表情を全く変えなかった。

そもそも亜里去の未来予知の能力は与えられた情報を元に脳内で自動演算が行われ、起こりうる未来が構築され、それを脳内のイメージという形で視覚化するのである。

来琥が一人の転校生との出会いを果たしている間、亜里去は一人川辺で風を浴びていた。技術革新によって自然が少なくなる中、残った自然は保護対象として汚染、埋め立て、伐採などが禁じられている。もっと早くにそうしていれば、子供たちが川で遊ぶことで空調機分のエネルギーを他に回すくらいの余裕もできていただろう。

人類、特に中国や日本などのアジア諸国はそのエネルギー問題に疎すぎた。いや、対応を行うべきだとは分かっているけども、対応策が見つからなかったのだ。そうこうしているうちに、技術ばかりが先にいき、自然の消失速度はそれに比例して加速していった。温暖化に関する事項は、一応の解決の形になったが、それを先頭きって行ったのはWUSUであった。ただ、WUSUにしても、温暖化によって起こる被害は防いだものの、地球そのものの温度上昇は止められなかった。人工オゾンを噴霧させたところで、地球上の各国の温度は絶賛上昇中。WUSU諸国も温暖化の助長を行ってしまったこともあるために、一概にアジア諸国を責めることもできないのだ。

「・・・・・・！！」

亜里去は背後に気配を感じた。普段ならば、来琥やカナのものであると考えるだろうが、今はそんな時間ではなかった。明らかに一般市民が普段放つような気配ではなく、亜里去に向けられている確かな気配だった。

気配は二つ。そのうちの一つは、亜里去がよく知る気配だった。だが、もう一つは全く感じたことのない感覚だった。

「誰！！」

亜里去は鈴嵐を構えながら振り向く。そこにいたのは、木嶋相子、そして、面識のない一人の男だった。

「安心しろ、お前を仕留めるようなことはしない。ただ、大事な事を伝えに来たまでだ」

そう言われてから、亜里去は相子が戦闘態勢ではないことに気づいた。彼女がいつも仕込んでいる落穴式の地雷原発射装置も見当たらない。

「なら、さっさと用件言っ立去ってくれない？ こっちはプライベートな時間に乱入されていらいらしてるんだけど」

「まあ、長い話だが、手短に言わせてもらおう」

明らかな苛立ちを見せながら退却を要請する亜里去に対し、男はいたって冷静に、むしろそんな亜里去を見て呆れているようにも見えた。

「俺の名前は終末帝^{しゅうま・みかど}。三年前、五神斬生誕事件^{ごしんまたちのよる}において、暗銃刀・刃薔薇を手にした男だ」

もはや転校生の恒例行事となっている質問攻めも終わり、そのまま突入した何でもない授業が終わり、来琥達は帰路についた。校内外の清掃は每晚専用のロボットが行う。

この日、来琥の帰り道はいつもと違った。通った道という意味で違ったわけではなく、雰囲気的に違った、ということである。その理由は一つだった。今日転校してきた転校生、針現実穂が、来琥と奈美の二人と同じ方向だからだと二人についてきたのである。

「でもよかった。針現さんが話しかけやすくて」

「いやいやあ。それと、実穂でいいよ」

「うん改めてよろしくね、実穂ちゃん」

「こちらこそ」

笑いながらも暖かな空気を醸し出していた女子二人が話している間、来琥は実穂に関しての情報が欲しかった。朝、来琥に見せた笑みは、恐らく何かを知っている顔だった。もし、この帰り道に割り込んで

きたのも、何かを企んで行ったものだとしたら。考えすぎと言われるかもしれない。少なくとも、奈美よりも来琥は家までの距離が長い。人に聞かれたくないような話をするならそこしかないだろう。

「じゃあ、私はここで。実穂ちゃん、ラッコ。また明日ね」

奈美は帰り道の間、笑みを絶やすことはなかった。元々、ほとんど笑っている彼女が、授業や行事と言った真剣な時以外に笑っていないことなどほとんどなかった。

「ああ」

「またね」

来琥と実穂はそれぞれが別れの言葉をかわした。

奈美がいなくなると、やはり話題は来琥のことになった。だが、最初に話を切り出したのは来琥だった。

「針現、お前、俺のことを知っているのか？」

「ま、来琥君が隠したいと思うことは知っているかな」

人の悪い笑みだ、と来琥は思った。やはり、こちらの情報が漏れていう来琥の考えは間違いではなかったのだろう。

「たとえば、刃薔薇を持っていることとかね」

それを言われた時、来琥の中でただならぬものを感じた。もしかしたら自分は、彼女と出会うべきではなかったのではないのかと。

「私、実はWUSUから送り込まれたの」

「アメリカ人……？」

「まさか。私は生粋のジャパニーズよ」

「目的はなんだ」

「あなたとそう変わらないわ」

「何……？」

来琥はその言葉の意味を図りかねていた。来琥が今戦う理由として、全ての五神斬の破壊。理由はもちろんあった。だが、その理由を与えた男は、来琥に対して、様々な条件とリスクを背負わせた。「一年以内に起こるとされている、五神斬を持つ者の暴走。それを事前にとめるために、私は遥々WUSUの命を受けてきたの。私自

身も、両鎚棒・桜鎚じゅうついでんを持つてね」

「もし間に合わなければ、お前も暴走する」

「その心配はいらないわ」

「何故だ」

「じきにわかるわ」

来琥の質問を上手いこと受け流すと、実穂は走り出し、角に来たところで形式的にか、手を振った。

「じゃーね、来琥君」

実穂はそう言っていると、路地を曲がって姿を消した。

来琥は実穂と別れた後、カナに連絡を取った。

「カナ、五神斬の一つ、桜鎚の所有者と接触した。WUSUに所属している」

『なるほどね。戦闘は？』

「いや。だが、後々戦闘になる可能性はある」

実穂の目的達成には、来琥や亜里去との戦闘は避けられない。WUSUにいる以上、もし公にあれば世界規模で問題になる可能性がある。日本とWUSUの国際関係だけでなく、日本が非公認とはいえ、極悪な武具を五つも野放しにしていたということがばれるのだから。

「所有者の針現実穂に関する情報を集めてくれ」

『リヨウカイ！ まっかせといて！！』

威勢よく返された言葉と共に、通信は切れた。情報収集ならばカナの十八番だ。恐らく、こちらが望んだ情報を集めてきてくれるだろう。来琥はそれ以上誰に連絡することもなく家路についた。

「刃薔薇を手にした……来琥が五神斬ごあぐまたぎのよる生誕事件に関する情報が何もないのは、そのせい……」

「俺の目的はただ一つ。五神斬全てを破壊することだ！」

そこで亜里去は、その目的が来琥の目的と一致していることに気づ

いた。

「君は見たはずだ。五神斬が暴走する未来を」

五神斬のことをどこまで知っているのだろうか、この男は。ここま
で五神斬のことを知っている者は、今までいなかった。もしかした
ら、未来を見れる自分や驚異的な情報網を持つカナよりも上をいく
かもしれない。

「五神斬の持つパワーを受け止めるには、それに見合うほどの器を
持った人間が必要だ。例えば……そう、超能力者のように
な。俺は超能力者じゃあない。だから明日未来琥に刃薔薇を渡した」
それにしても、よくも来琥がそんなもののために刃薔薇を受け取っ
たものだ。この男、元々来琥との関わりがあるようにはとても見え
ない。何か脅しをかけたのか、それとも。

「そして、実はここに来た理由はもう一つある」

亜里去は分かってしまった。彼らがここに来たもう一つの理由。

——何が「お前を仕留めるようなことはしない」よ!!

「目的の一部を達成させてもらう!!」

「お断り!」

亜里去は鈴嵐を振って辺りに暴風を巻き起こすと、二人に背を向け
て走り出した。しかし、その進路に合計で三体のサポロイドが立ち
ふさがる。

「殺陣椿の下にいただけあって、給料は万全ね!!」

亜里去は鈴嵐を振り、真空刃でサポロイドを攻撃すると、サポロイ
ドがその真空刃をかわしながら接近してくる。

「褒めてるつもり?」

「ぜんっぜん!!」

至近距離にまで近づいたサポロイドに鈴嵐を直接叩きつける。鈴嵐
に叩かれたサポロイドの一体が倒れると、引き続いてもう一体のサ
ポロイドに鈴嵐を叩きつける。そのままもう一体のサポロイドの拳
をすれ違いながらかわすと、すぐに振り返って背後から鈴嵐を振り
上げて真空刃を起こす。真空刃はサポロイドの腹部を貫き、両断し

た。

「まだ私はミッションをクリアしてないのよ!!」

「知らないわよ、そんなの!!」

両断したサポロイドの爆発によって起きた黒煙の中から相子が現れ、拳を突き出してくる。亜里去はその拳を紙一重でかわして鈴嵐を叩きつける。追撃しようとした腕を引き、再び振り抜く前に相子の拳が亜里去の左頬に食い込む。亜里去はそれによってふらついた体で一回転して鈴嵐を横薙ぎに振う。しかし、相子はそれに屈せず二連続で拳を突き出す。ふらついた亜里去に、再び相子の拳が突き刺さり、亜里去は地面に倒れた。相子がとどめをさそうと飛び上がったと同時に、相子の右方にあつた川の水のうちの一部が蒸発し、その水蒸気がさらに火で熱せられて水蒸気爆発を起こした。その爆発は相子を叩き、攻撃は完全に中断された。

「おい、大丈夫か!!」

亜里去がその声が発せられた方角を見たとき、そこにいたのは実だった。

「実!!」

亜里去は立ち上がると暴風を巻き起こして相子と帝を足止めし、その場から走り去った。

5、不穏な動き

来琥が実穂との出会いを果たしてから一週間の月日が流れたが、特に変わったことはなかった。少なくとも来琥の周りでは。しかし、一週間という時間が経過しても、カナから、実穂に関する情報は知らされなかった。やはり、WUSUを相手には時間がかかるのだろうか。来琥が情報を求めてカナに連絡を入れてから、次に来琥がカナと通信したのは、十日後だった。十二時を回って少ししたところに、かなからの通信だった。

「カナ、お前——」

「来琥！ ちょっと面倒なことになったちゃった。今、浜比良倉庫群を北西ルートで向かってる。できれば応援頼みたい……きやつ！！」

カナの悲鳴の理由は通信機越しに聞こえる銃弾の音だと判明した。どうやらまだ撃たれてはいないらしい。参事を引き起こす前に、カナを救い出さなければならない。

「分かった！ 亜里去と実には俺から連絡する！！」

「お願い！」

そこで通信は途絶えた。来琥の方から通信を切ったので、向こうの状況は完全に分からなくなってしまった。

来琥はすぐに通信端末を操作して亜里去を呼び出す。呼び出し中も、会話中も来琥は走り続けていた。

「亜里去！ カナが危険だ！ 指定ポイントで合流する！」

「はあ！？ 話が唐突すぎ——」

確かに唐突な話であることは自分でも分かっている。何せ自分だって唐突に話が来たのだ。少なくとも自分にはかり文句は言ってほしくはなかった。来琥は亜里去が苛立ちながらもまだ何か言いたそうなのを強制的に通信を切断することで断ち切ると、そのまま今度は実への連絡を入れる。

「実、応援を頼みたい」

『何故？』

「お前の力が必要だ」

『だが、断る』

「頼む！！ カナの命がかかってる！ 仲間なんだ、助けてやってくれ！」

『………ちつ。指定ポイント？』

実は舌打ちをしたものの、どうやら加勢には来てくれるようだ。そのことに安心した来琥は、すぐに実の質問に返答した。

「今送る」

そう言つて来琥は通信を切断した。亜里去と実の両方にポイントのデータを送信すると、ただただ走る事に神経を集中させた。周りの人はただ一途に走り続ける来琥に一瞬とはいえ視線を送る者はいたが、それ以上気に掛ける者はいなかった。食品販売の路地を走り抜け、家電系統の路地を走り抜ける。あちこちの家電店は、新たに発売された立体ディスプレイタイプのテレビを路地に面したガラスによく見えるようにおいていた。やっている番組はそれぞれ違う。スポーツ、バラエティ、ニュース、アニメ……。そのどれも、来琥の目に、耳に入らなかった。ただ一つ入っていたとすれば、ニュース番組のテレビに人が集まっていたことぐらいだろう。人が集まるほどの内容なのかと、こんな事態でなければ混ざっていたかもしれないが、今はそんなわけにもいかなかったので、家電の路地も黙って通り過ぎた。

カナは走り続けながら、来琥から送られてきた合流ポイントを確認していた。ここから、今のペースを維持しながら走り続けたとして三分。ペースダウンと敵の妨害を考えれば、必要時間は五分。それ以上の時間をかけているようでは、恐らく追手の男たちに殺されるだろう。何故自分が追われているのかは分からなかった。ネットワークが掌握やハックされた形跡はなく、無関係者のアクセスの形

跡もなかった。少なくともゴツバネットワーク関係で追われているわけではないのだろう。もしネットワーク関係なら、ゴツバネットワークはとくに崩壊しているだろう。

ネットワークに対してのハッキング技術は、二十世紀くらいまでならネットセキュリティシステムの一步前を進んだテクノロジで各国家を恐怖と不安に陥れていたが、セキュリティシステムのそこから革新はハッキング技術の何十歩も先を歩むものになっていた。個人経営のセキュリティは別だが、国家経営のセキュリティシステムの場合、国が特別に雇ったセキュリティマン——セキュリティマンは、簡単に言えばハッカーなのだが、国の人間が犯罪者同様のハッカーという名義で使うわけにはいかなかったため、便宜上、セキュリティマンにしている——によって内部データをアンロックさせるくらいに嚴重なものになっている。

「ネットワークには情報は入ってない………。もう、どうなってるの……！」

もし本当にハッキングされているとしたら、自分は存在意義を失ってしまう。自分は情報で成り立っている。情報がなければ、自分が自分でなくなってしまう。カナは呼吸を整えながら路地の角へと進路を変更させる。真っ直ぐな道を走り続けては、恰好的だ。

「カナ！ ポイントまでは……！」

来琥からの通信だった。ポイントまでの距離は約二百五十メートル。多く見積もれば……。

「あと一分で行けるよ……！」

「いいか、ポイントの手前の曲がり角を曲がらずにジャンプした後、実の後ろまで行け……！」

「よくわかんないよ……！」

「俺が指示を出す。そのタイミングでジャンプすればいい……！」

「まあ……！」

カナの文句もむなしく、向こうから通信を切られる。

何度か角を曲がった後、合流地点に実の姿が見えた。姿といって

も、こちらを見ている顔だけがかろうじて見えているようなものであるため、その全身を確認することはできなかった。

『俺の合図でジャンプしろ、カナ』

「う、うん」

これから何が起こるのか、作戦を何も知らないカナはそう答えた後に走行中でありながら唾を呑んだ。

「行けええええ！！ カナアア！！！！」

来琥の声はすぐ近くから聞こえた。そのことに一瞬驚いてしまったが、すぐに振り切って空中に飛び出した。カナは元々遠くまで飛べるような身体能力は持ち合わせてはいなかったが、どこからか吹いた強風によって、通常よりも遠くへと体が運ばれた。どうにかその角に視線を向けると、そこには鈴嵐を握った亜里去の姿があった。足で着地したカナは実に庇われる形で抱きしめられる。

「ちょ………！！」

カナ自身は気づいていなかった。自分の顔が息切れではなく赤くなっていることに。

実は流れるように反対側の倉庫の陰まで移動し、再び飛び出した実が追手の男たちの足元に火球を飛ばす。男たちの足元から巨大な炎があふれ出る。そこでカナは気づいた。自分が空中に浮いている間に飛び越えた地面には油が撒かれていたことを。

追手きていた三人の男のうち、一人がその炎に全身を燃やされた。残る二人は着ていた防護服に火がついたが、燃え広がる前に手でかき消した。先ほどまで実が潜伏していた方の倉庫の壁から来琥が身を乗り出して刃薔薇から銃弾を放つ。連続で銃弾を放っているが、まだ全滅には至っていないようで、炎の向こうから銃声と共に銃弾が飛んでくる。来琥が遮蔽物となる壁で銃弾をやり過ぎすが、それでも解決策は見当たらない。

カナは自分の目の前でその状況を黙って見ていた実の袖を引っ張った。

「ああ？」

実の声はこつちへの対応がまるで億劫と思わせるような口ぶりだった。だが、そう思われても構わないという決意の下で話を始めた。

「援護しないの？」

「何で俺が」

「仲間でしょ？」

カナは、自分でも分からないくらい強い目をしていたらしく、実が珍しくたじろいだ。深呼吸を一つした実が、カナに小さく「下がってろ」と呟くと、自身の胴体くらいはあるだろう火の球体を作り出す。来琥と亜里去がその火の存在に気づいて攻撃を中断する。追手の男たちが携行していた消火ビンで足元の炎を消火すると同時に、実は巨大な火炎球を放った。

「これはそんなじゃ消えないぞ!!」

実の放った火炎球が、真つ直ぐに男たちに向かっていくが、男たちは全く慌てている様子はなかった。男たちは手首に装備していた端末のボタンを押すと、自身らの周囲に特殊な環境状態フィールドを作り出す。それに触れた火炎球は一瞬のうちに消え去った。

「亜里去!!」

「分かつてる！」

来琥の素早い指示と同時に、亜里去が動く。男たちの前で鈴嵐を構えると、横薙ぎに振って、空調操作機構により生み出される真空刃を発生させる。特殊な防壁すらも貫通した真空刃は、防壁を突破されるとは思っていなかった男たちを恐怖と不安に満ちた顔にさせると同時に、腹部から二人同時に両断した。

戦闘終了後、改めて追手の顔を確認した来琥達は驚きに顔を歪めた。

「こいつら……」

亜里去が目を丸くしていたのは、誰の目にも分かる変化だった。

「アメリカ人……!？」

実穂の下に、司令部からの連絡が入ったのは、正午より少し前の

ことだった。

「はい……では、私は兼任するということですね……
・はい。それはもちろん。……はい、分かりました。全力
を尽くします。はい、失礼します」

通信を切った後、実穂はゆっくりと息をついた。まったく、WUS
Uも大きく出てきたものだ。五神斬のことだけでも十分に面倒な任
務なのに、そこに別任務まで請け負うことになるとは。五神斬を持
っているだけで、負担を大きくしてほしくはなかった。どうせWU
SUは、自分たちに味方する日本人スパイ要員としか実穂を見てな
いだろう。五神斬を持っていることで、日本に力の全てを委ねさせ
ない、というのもあるだろう。こんな自分は一体何なのだろうか。
人気者と言えば聞こえはいいが、日本人なのにアメリカに加勢する
不幸者とすら言えるような気がする。実穂自身は不幸者として周囲
から慰められたい気持ちではある。だが、人気者としてチャホヤさ
れたい気持ちもあった。

閑話休題。

「私、パートナー制あまり好きじゃないのになあ」

他国がどうなのかは知らないが、WUSUでは作戦の遂行はほとん
どの場合、二人一組か、集団戦闘という形で行う。一人ではできな
いことが多いということである。五神斬は、実穂はプライ
ベートな時間までそのパートナーと過ごすことになるため、あまり
いい気はしなかったのである。

「にしても、これから彼らはどう動くかな」

五神斬も超能力もある、彼らは。

「にしても、さっきの消火のトリックは何？」

「秘密はこの装置にありそうだな」

来琥はアメリカ人の手首についていた装置を取り外した。見た目と
しては直方体の端末のようだ。

「消火するなら、こいつらの周囲の空気振動をゼロにしたんじゃな

いか？」

実の火を出現させる原理は、空気振動によるものである。指定した部分の——といっても、能力所有者の周辺だが——空気を高速振動させることによって温度を急激に上昇させ、酸素を利用して熱を炎に変える。人が寒地で体温を保つために体を震わせるジバリングと同じ原理である。それが実が発生させる炎の正体である。元々こうした空気振動系の能力は基本は音を発生させることによる脳波へのダメージを狙ったものである。つまり言えば、火を発生させるのは、その応用型ということだ。

もし空気振動をなくせば、温度の上昇は停止、及び温度低下によって火は消える。向こうは実の持つ超能力を完全に理解していた。「だが、それでは空間振動系の超能力しか防げない。実用性は低い」いくらいつものように冷静なまでの口調でも、攻撃をかき消された実が言うとき、負け惜しみにしか聞こえないが、実際そうだろう。

「それ以前に、空気振動を強制停止させるなんてこと、現代科学で可能なの？」

亜里去の意見に、誰も首を縦に振ることはできなかった。実の能力のように、空気振動によって音や火を発生させることは可能になった。何もない場所では空気は振動力が低いいため、何もしなければ、停止までいかなくともほとんど動かぬ状態にはなる。だが、『強制停止』は現在の日本の技術では、超能力を持っても不可能なのだ。

「超能力者の可能性は？」

「待つて。その装置よく見せて」

カナが来琥の話を遮って出てくると、来琥から装置を取り上げ、自分の端末に映し出される情報と照らし合わせた。やがて疑問が確信に変わり、カナは一度息を呑んだ。

「間違いない……これはWUSUが開発した超能力発散加速装置……サイコキネシス……！」

「超能力……サイコキネシス……！」

来琥は思わず裏返りそうになった声を無理やりねじ込んだ。カナはそんな来琥や亜里去、実に構うことなく話を続けた。

「こいつらは、私たちのように脳回路の手術を受けた人工の超能力者でもない、生まれつきに能力を持つ、ネイティブ・サイキッカー純粹種の超能力者だよ」

とある家電店の前、発売したばかりの立体ディスプレイ型のテレビの前にできたひとだかりの中で、一人の少女は佇んでいた。この人だかりは、このテレビを買うためにできたものではなかった。誰もがディスプレイに映し出されるその情報に釘付けになっていた。少女は日本風の顔立ちと髪型をしているが、その瞳だけは蒼く輝いていた。

（にしても、ミホはどこにいるんだろ？）

司令部から命令は受けているだろうに、未だ連絡がない。自分は早くミホの顔が見たいのに。どんな顔をしているのだろうか。かわいいのかブサイクなのか。やせてるのか太ってるのか、バストは？ ウエストは？ ヒップは？ 自分と仲良くしてくれるだろうか。不安も期待も、彼女は大きく膨らませ、パートナーとなる少女との出会いを待っていた。まるでそれが、自分の運命の出会いとなるようなそんな気がしてならなかった。

人だかりの中の立体ディスプレイに映った女性アナウンサーは、自分の手元にある原稿の内容を、全国へと発信していた。

『本日、現地時間午後七時ごろ、WUSUは我々日本に対して、超能力者の殲滅作戦を開始しました。WUSUは——』
ただありのままの事実を、無感情なまでに。

6、思惑と権力

発表が行われてから、アメリカ人を中心とした国内のWUSU所属の戦闘員は全国各地で超能力者の一掃を開始した。来琥達がそのニュースを知ったのはカナが襲われてから三時間後のことであった。四人は一か所に集まってそのニュースを閲覧していた。といってもカナはテレビでニュースが行われている間にもゴツバネットワークを使って情報の共有を図っていた。

「どうやら今回のことは、アメリカは賛成してないっぽいね」

「けど、各地で戦闘をしているのはどれもアメリカ人だという話だ」
実がそう返すが、カナはテレビで行われているVTRの中で熱論する指導者を指差した。

「記者会見で熱論しているのはブラジルの首相。横一列に並んだ時も、アメリカは一番端に位置している」

「確か、主要国ほど内側よね。アメリカはWUSUの創設国のはずなのに……」

来琥の知る限りならば、中心にいるのはブラジルを始めとした南米諸国だ。その次に中米、北米と並んでいる。アメリカとカナダが両端に位置している。

「まさか、南米はWUSUの主導権を握ったのか？」

「完全じゃあないだろうけど、握りつつはあるはずだよ」

カナの来琥の質問に対する返答に、実がさらに付け足す。

「おそらく南米は、上手いことアメリカを載せて兵を出させたんだろう。アメリカ人が襲えば、世界からのアメリカの評価は下がり、現在の絶対指導の場を退けるように言われる。その空いた指導者の席に、南米諸国が収まるつもりだろう」

「同盟国内で権力争いとはみっともないわね」

亜里去がその推測に出てきた権力争いを呆れるように言ったが、来琥がそれに異を唱えるが如く口を開いた。

「まだそうと決まったわけじゃない。それに、そのために犠牲になるのは俺たち日本……超能力者だ」

この言葉を聞いてか、亜里去が悔しそうに口を閉じた。これですね、なければいいのだが。

この超能力者の一掃が今後、本当に超能力者を全て消し去るまで続く場合、場合によっては五神斬が全てWUSUにわたる可能性がある。現時点でさえ、実穂の持つ桜鎚は、別の視点から言えば、WUSUのものという見方もできるのだ。よもや五神斬を持つ自分たちが全滅するとは思いが、可能性の一つとして考えておかなければならない。WUSUが五神斬のことを世界に公表するしないは別にしても、WUSUの軍事力が格段に上昇するのは間違いない。

WUSU内で、今現在とはかく、これまで一番の権力を持っていたのはもちろん創設国たるアメリカである。しかし、近年、南米諸国は軍隊を拡大していた。理由は簡単だ。お堅い軍人の家系の人間が国防関係の官僚になってしまったからだ。さすがに軍国主義なんて古臭い思想には囚われていないようだが、力によって全てを制そうとする動きがあるとみても間違いないだろう。もし南米は本当にWUSUの権力を狙っているとしたら、拡大した軍事力でアメリカに脅しをかけたとは思えない。核技術が衰退しているために、現代の研究者が、一から核兵器を作るのには時間がかかるのは誰の目にも明らかだ。

「南米や中米も派兵してくると思うか？」

「止むを得ない状況になれば、そうする可能性はある」

「止むを得ない状況って何よ？」

実の的を得ない回答に、亜里去が若干苛立ちながら聞き返す。やはり、先ほどの切り替えしですねってしまったのだろうか。後でご機嫌をとらないといけないのは自分であることに、来琥は分かっていた。いつても、話の中でさらに関係がこじれてしまう危険性は十分に秘めているので、油断できない。感情的になっっている者を相手に会話するとき、よく自分も感情的になっってしまうという欠点を、来

琥は熟知していた。

「アメリカ兵では、役に立たないと感じたときだろうな」

「あくまでも上から目線か……」

実の具体的な回答に来琥が感想を述べた。

そこで来琥は思い出した。WUSUの構成員のことを。

「そうだ、カナ。この前頼んでいた、WUSU構成員の針現実穂のことは？」

「それが、どこの誰も情報を掴めないの……」

「WUSUの妨害工作か!？」

思わず立ち上がった来琥に、カナはしずかに答えを告げた。

「たぶんね」

来琥は一度呼吸を整えてからその場に座り込んだ。

五神斬の暴走がいつ始まるか分からないというのに、こんなことで足止めされるとは。まだ刃薔薇と鈴嵐以外には、桜鎚を持つ実穂しか居場所が分からないというのに。それに、いくら実穂との目的が一致しているとはいえ、こんな状況になったとすれば、実穂ともいずれ戦うことになるだろう。少なくとも、今の情勢で共闘はあり得ない。相手はWUSUで、来琥と亜里去は五神斬を持つだけでなく、超能力者でもあるのだから。

「こうなったら、早いうちに来琥の目的を達成しないとね」

カナのその発言に、思考をめぐらせていた来琥ははっとしてしどろもどろな答えしか返せなかった。

「え？ はっ？ 俺？」

カナは頷いてその来琥のしどろもどろな質問を肯定してから続けた。

「殺陣椿はまだだけど、もう一つの五神斬の所在は掴めたから」

「もう一つ……」

亜里去がぼそりと呟いた。おそらく、殺陣椿ではないことに失望したのだろう。自分の復讐すべき相手の所在が掴めないのだ。しょうがない話だろう。

「斧槍刃・桃斧槍ハルバート ももふそう 五神斬中で最強と呼ばれる武器」

その固有名詞を聞いて、来琥は両手をきつく握りしめた。

WUSUが秘密裏に建造した地下基地の中に、実穂はいた。ここに来た目的は一つ。例のパートナーとコンタクトを取るためだ。しかし、連絡を入れたのは三時間前、集合時刻からはすでに三十分の時間が過ぎている。いくら時間にルーズだとしても、時間に遅れてくるようではパートナー間の信頼関係はよくなることはほとんどないだろう。

堪忍袋の緒も悲鳴を上げ始めたころ、待機室のドアのノック音が鼓膜を刺激した。

「アリス・ハイリアです。入室の許可を」

「どうぞ」

そう返しながら、実穂は祈った。どうか、どうか普通の子であつてくださいと。外見にこそ現れていなかったが、実穂はそればかりを願っていた。なんなら年上でもいい。気は遣うが、ある意味一番楽な結果になる。なら、どういう子が普通なんだと聞かれて、答えることはできないのだが。

しかし、スライド式のドアが勢いよく横に滑り、人影を現させたとき、実穂は額に手を当てて落胆したい気分させられた。

へそ、ふともも、脇も大胆に見せている。しかもミニスカートだ。髪型こそ短くそろえられているが、何のフォローにもなっていないかった。

実穂が最初に思ったことは、むしろ本人には聞こえなかった。

（露出、多あ！！）

なんで？　なんで自分はこうも不幸の星の下に過ごすの？　なんで願ったこと基本的に叶わないの？　なんでコンビニで買うおにぎりが私のだけ具がないの？　なんで新品の家電一発で壊れるの？　なんで身に覚えのない架空請求のメールが来るの？　なんで去年から体重だけしか増えないの？　そしてなんで目の前のこの子はこん

なににこやかな顔してるの!?

などという悲観にはまったのは一瞬のことであり、実穂はすぐに立ち上がって手を差し出した。一般的な社交辞令だ。どんな子であれ、ある程度折り合いはつけなければならぬのだから、（法的にはないが）決められた手順を踏むのが妥当というものだろう。

「針現実穂です。よろ——!」

しかし、その社交辞令は一気にもみ消された。アリスがその手を取らずに実穂に抱きつき、そのまま体勢を崩した実穂はアリス共々ソファへと倒れこむ。

「こちらこそよろしくうー! あえて嬉しいよお、ミホツ——!」

「ちょ……こら、離れる、アリス——!」

どうにかアリスを引きはがした実穂はすぐに立ち上がり、同じ状況に追い込まれないようにと身構えた。しかし、アリスはどうやら襲ってくる様子はなかった。しかし、それと引き換えかのようににやにやと顔を嬉々として歪ませている。

「今ので、スリーサイズ大体分かったかなあ」

「な——!」

今抱きついた時にスリーサイズをアバウトにはいえ図ったということが。たしかに今思い出せば、胸に顔をうずめられ、左手は腰に、右手は尻に回されていた。

——こいつ、本気だ——!

「上からあ——」

「待てえっ——! 言わないでえええっ——!」

いきなり弱みを握られた実穂は、ただただその秘密を封印させざるを得なかった。

とある一つの倉庫で、電子書籍を読みふけていた少年は人の存在に気づいて電子書籍を倉庫内に作った自室のベッドに放り投げると、得物を持って自室を出た。自室までに積まれているコンテナか

から見下ろすと、数人の男たちがこちらを探していた。人相と体つきからして、全員がアメリカ人。一日中、というよりは、この一週間はずっと電子書籍を読んでいた彼は、アメリカ人がここに来た理由を知らないゆえに、堂々と男たちの頭上で仁王立ちして問いかけた。「おい、てめえら、何しに来た？」

男たちは、少年の姿を見つけ、銃口を向けるやいなや、銃弾を放ってきた。

「おいおい、何だよ」

少年は銃口を向けられると察知した瞬間に何もない空間を回し蹴りした。放たれた銃弾が見えない壁に当たったかと思われた瞬間、銃弾は反射して男たちへと降り注いだ。少年は呆れたように男たちを見下ろしていた。それはつまり、見下^{みくだ}していると言い換えられるのだが。

方向転換の際の演算処理は面倒ではあるが、それは脳内で勝手に行われることで、少年が自発的に行う必要はなかった。引き続いて倉庫に入ってきた男たちも銃弾を放ってくるが、少年は通常ではできないような跳躍力で空中に飛び出すと、得物を男たちへと投げつける。男たちは銃撃をやめてそれぞれ別方向に散る。少年は高所からの落下にも関わらず綺麗に着地すると、手元へと戻ってきた得物の変形機構を操作する。得物の柄が一気に伸び、かなりの距離にいた男を腰から両断する。そのまま柄の長さを戻していき、最短になったところで得物を投擲する。その軌道上にいた一人の男を両断すると、わけが分からないままあたふたしている一人へと地面を蹴って急速に接近すると、先端で心臓を貫いた。

「うおおおおお！！」

背後から近接戦用のコンバットナイフを握った男が接近してくるのを見た少年は、得物を男へと振り下ろす。男はコンバットナイフの腹で受け止めるが、抵抗むなくナイフの刃が破壊される。飛びのいた男が様子を伺っているところに得物を突き出す。男が前転して斜め方向に突きをかわしたが、少年はそのまま得物を振り抜いて男

7、悪魔への成長

カナからの情報により、桃斧槍の所在を突き止めた来琥達は桃斧槍がいると思われる倉庫へと向かっていた。そこには他に人がいないらしく、何か邪魔される可能性が少ないらしい。入り組んだ倉庫群は、それこそ昔は倉庫としての役割を十二分に果たしていたが、数世紀前の人口爆発以来、地球人口は僅かにはあるが減少傾向にあったために、倉庫は残すも壊すもできない状態だった。もっとも、空いた倉庫をたまり場にする者がいたために、無暗やたらに倉庫を壊していくことができなかったというのもあるのだが。

「たぶんこの倉庫だよ」

カナが数ある倉庫群のうちの一つの倉庫の壁に触った。この倉庫群に以上、全ての倉庫を虱潰ししらみつぶしに当たればそのうち当たるのは分かっていることだが、できれば無駄にあがきたくはない、というのが全員一致の意見であったこともあり、もっとも確率の高いこの倉庫を目指したのだ。

「おい、誰がいるか!!」

倉庫に入って早々、来琥は倉庫の中へとそう叫んだ。向こうも五神斬を手にした以上、こちらの気配くらいは握っているだろう。少なくとも声を挙げている時点で、気配を隠す気などないことは十分に分かっているはずだ。

しかし、誰も出ては来なかった。人の気配はしている。こちらに姿を見せないからといって、戦闘態勢ではないと断言することはできない。この倉庫に入った時点で、向こうもこちらと戦闘に対する心の準備はできているはずだ。

「んだよ、うつせーぞ!!」

一分以上経ってから聞こえた返答は、返答すらも億劫そうなものだった。だが、これでここにいることが確定した。一人の少年が高く積まれたコンテナの上から現れた。その右手には、槍のフォルムに

斧を取り付けた武器が握られている。それは十世紀近く前にヨーロッパで用いられた斧ハルバードと酷似している。間違いないだろう。

「折角いいとこだったのによお」

少年は桃斧槍を握りながら飛び上がり、来琥達と同じ高さの床まで下りてきた。あれほどの高所から、どこを痛めた様子もなく着地したところを見れば、やはり超能力者だろう。筋肉質な者でもこの高さでは命の保証もできない。

「てめえら、この磯城革新紅しきがわ・しんぐの読書を邪魔することが、どういうことか分かってんだろうなあ！！」

新紅が大仰に桃斧槍を振り回す。

「待て！ 俺たちは話をしに來ただけだ」

「なら用件を言えよ」

来琥も亜里去も、いつ戦闘に入ってもいいように身構えていたが、それは止むを得ない場合の最終手段だ。だが、ここまで交わした会話から察せられる性格からして、まともな答えを得られるとは思えなかった。おそらく、最終手段に頼ることになるだろう。

「その五神斬の一つ、桃斧槍を破壊させてもらいたい。お前に危害を加えるつもりはない」

「馬鹿を言うな。こいつは武器だ。力だ。力なき人間が、力を持つて何が悪い？ こいつがあれば自分を守れて、人を思うがままに殺戮できる。こんなの他にねえぜ？」

「私欲のために力を求めて！」

「おめえだつて私欲のためにそいつを持つてるだろ！！」

「違う！ 俺は五神斬を全て破壊するために——」

「その私欲を力で叶えようとする！」

来琥が自分の目的を途中まで言ったところで新紅に口を挟まれる。新紅はそのまま続けた。

「体力も権力も知力も暴力も努力も話力も腕力も脚力も、結局は力だ！！ 人は力がねえからそうやって力を求めんだよ！ 俺もそのうちの一人、おめえだつてそつだろお！！」

「けど——」

そこで、来琥は全身に違和感を知覚した。しかし、違和感を知覚したところには違和感は大きなうねりを伴って来琥の全身を襲っていた。全身の自由が利かなくなり、かろうじて意識を保っている状態。視界がぐるぐると回り、それを避けようと目を閉じても、脳内がぐるぐると回り続ける感覚を全身に送り込んでいた。来琥は片膝を突き、左手は床に、右手は刃薔薇を床に突き刺してそれを握った。

亜里去にも同様の現象が起こっているようで、地面に突き刺しうのない鈴嵐を手放し、両手で頭を抱えてその場にうずくまっている。

「どうした、明日未——！」

「亜里去——！」

自分たちを気遣う実やカナの声もおぼろげにしか聞こえない。少しずつ意識が薄れていく。それと同時に、体が自分の物ではなくなってしまうような感覚があった。遙か前方にいる新紅もまた、この異常現象に体を支配されているようだが、それを思考している余裕は、すでに来琥には残されてはいなかった。

来琥の意識は、遂に閉ざされた。

実は来琥の名を呼び続けていたが、来琥の意識が薄れつつあるのを感じていた。しかし、対処法は思いつかなかった。来琥と亜里去がその意識を完全に閉ざしたのは、ほぼ同時だった。

「明日未！ 目を覚ませ！」

「亜里去——！ 亜里去あ——！」

「いたぞ——！」

その声に実とカナは入口の方を振り返った。アメリカ人の男たち。先日実たちが相手にした人数とは比にならないほどの人数だ。

「ちっ……こんなときに……」

止むを得ず臨戦態勢に入った実は、誰かに退けられる感覚と共に、床に倒された。実が床から見上げた先にいたのは、来琥だった。

「明日未……お前……」

「刃薔薇、目標の殲滅を開始する」

しかし、まるで来琥ではないような感覚。体全てが操られているように見える。

「鈴嵐、目標を確認……」

「亜里去！」

亜里去もまた、来琥同様に、操り人形の如く立ち上がった亜里去が、鈴嵐を握ってアメリカ人たちを睨み付けていた。さらに新紅も二人の後ろで桃斧槍を構えて同様に睨み付けていた。

次の瞬間、来琥、亜里去、新紅の三人はそれぞれが異常なまでの速さで走り出した。

帝は倉庫の内外をじつくりと見渡すことのできる位置にいた。五神斬は三つ以上が一箇所に集まれば、契約者との間で封じ込めている力を一時的にはあるが解放することができる。脳内に直接干渉することで、自動的に解放するのだ。むろん、脳回路の手術を受けている者は、その力を受け止めきれずに暴走してしまうが。

倉庫の入口で煙と共に五神斬を持った三人が飛び出してくる。来琥は生まれつきの速力で、亜里去は鈴嵐の空調操作機構を利用して、新紅は自身の持つ能力によって、誰もが高速で飛び出してくる。倉庫を出て直進すれば別の倉庫の外壁にぶち当たる。つまり、倉庫を出た後は通路状態となっているのだ。一体どんな戦い方をするのか、帝はとても興味を惹かれていた。

新紅が桃斧槍の柄を最短にして投擲し、まず向かってきた先行隊の五人を一気に両断する。新紅の元へ戻る桃斧槍の軌道をよけて、その後方に続いていた五人のアメリカ人へと来琥が急速接近する。

まず一番近くにいた二人のアメリカ人を刃薔薇を振って切り捨てると、左斜め前方にいたアメリカ人へと刃薔薇を突き刺し、変形させてその傷口を広げる。広げられた刃薔薇に、現在銃口は見えなかった。意図的に引込めているのだろう。刃薔薇を開いた状態で今度

は先ほどの場所から見て右斜め前方に位置していたアメリカ人へと振り抜く。そのまま腕を引いて目の前にいたアメリカ人へと刃薔薇を開いたまま突き出す。まだ殺されてないことに一瞬とはいえ安堵の表情を見せたアメリカ人は気づいてはいなかった。

来琥は開いていた刃薔薇を閉じて元の剣形態へと変形させる。それが意味するのは、アメリカ人の腹部を両刃で挟み込んで両断することである。大きな悲鳴の後、来琥は刃薔薇を銃形態に変形させる。開かれた刃薔薇の中には、銃口が光っている。さらに倉庫の陰から姿を現した三人のアメリカ人を見つけると、来琥はジャンプし、それと同時に足元にめがけてトリガーを引いた。その瞬間、銃口元で小さいとはいえ、爆発が起こる。多くの酸素、つまりは空气中に排出された瞬間に発火、爆発する特殊火薬だ。その爆発によって空中に飛び出した来琥を確認した亜里去が、鈴嵐を振り、その持つ空調操作機構によって発生させた真空刃によって残った三人を一気に切り裂いた。

「これが………暴走か………」

帝はたった今行われた一方的な殺戮を無表情なまでに呟いた。特に刃薔薇の力は他の五神斬に比べれば目に余るほどの強さを見せた。銃口の収容による近接戦の多彩攻撃化、特殊火薬による手元爆発。他の五神斬を凌ぐその力は、五神斬中最強と言われている桃斧槍さえも凌ぐと思わせる。刃薔薇の魅力は、銃剣一体のそのフォルムではなく、その形状を最大限に利用した潜在能力にある。

「それにしても、WUSUは対応が早いな………」

今回の超能力者の掃討作戦は、表向きこそ、核兵器に代わるこの超能力という力を捨てる第一段階として行われたものだ。では何故日本が最初の掃討標的ターゲットになったのか。裏の理由に、何故日本が狙われたか、という真の理由がある。

おそらくWUSUは、五神斬のことを掴んでいるだろう。そして、五神斬が集まった時の恐ろしさも心得ているのだろう。何せWUSUは、五神斬の一つ、桜鎚を所有しているも同義なのだ。

恐らくWUSUの真の目的は、五神斬を持つ超能力者を倒すことで、自分たちの手元へ五神斬を一手に集めるつもりだろう。そうであれば、桃斧槍を持つ新紅の下に幾度となく攻め込んでくる理由にならない。倒せないなら、人数を増強するなり、他の超能力者の掃討に回すなりして、作戦の遂行を行うだろう。そう、それなのにわざわざ、大して人数も増やしてないのに何度も攻め込んでくるのだ。南米はよっぽど自分たちの下から派兵させたくないらしい。ここに連続で送り込むなど、アメリカ力をギリ貧に追い込むも同義だ。「南米も主導権奪取に急ぎすぎだな……全く、これだから人間は困る」

不完全で、感情や私情で行動や思考を容易く変えてしまう。簡単に裏切りながら、わけの分からない信念だけは貫く。同じ人間である自分が言う権利はないかもしれないが。

「そんな不完全人間なあなたに、とっておきがありまーす」

その声の方向に帝は振り返りながら銃口を向けた。銃口の先に居たのは、少女だった。まだ幼い。年齢で言えば十歳前後だろう。髪はポニーテールで、肩を少し超えた位置まで伸びている。

「おじさん、欲しい？ 平常時の彼らと同等の力」

戸惑いの表情を見せた帝に、優越感に浸ったような笑みを見せながら後ろに組んでいた腕から見せたのは、帝にとってはよく見知った物だった。

「これは……五神斬……！」
暗銃刀・刃薔薇、あんじゅうとう 烈風鞭・鈴嵐、ハバラ 両鎚棒・桜鎚、れっふうへん 斧槍刃・桃斧槍、ススラン 鋭矛盾・殺陣椿、えいむじゆん ススラン りょうついぼう おうつい ハルバード ももぶそう

興味深そうに殺陣椿や刃薔薇を手にとった帝に、少女は続ける。

「暴走システムはないかわりに、契約の必要のない量産タイプの五神斬だよ」

「契約システムがない、ということは……」

「そう。契約は契約者の脳波に直接干渉することで成立する。それによって、武器で行われている物理的处理をデータ変換して脳に負

担させている」

物理的处理をデータ変換させる技術は、ほんの数十年前に発表されたものであり、世界的に見ればまだ新しい技術といっても問題は無い。物理的处理の代表としては刃薔薇の銃形態時の銃弾の装填がそれにあたるだろう。桃斧槍の柄の長さ調節も、脳に演算処理をさせることで成立する。

「これらは全て、そうした物理的な処理や演算を『自己的』に行うんだ」

「所有者のイメージをそのまま武器に伝えるということか？」
「簡単に言えばね」

これらは、もしかしたら状況を一変させるかもしれない。暴走システムのない五神斬。超能力者以外でも扱うことのできる五神斬。所有者がイメージだけで、武器自体が脳が負うべき負担を吸収、実行する五神斬。もしこれらがWUSUの方に渡ったとすれば、もう掃討作戦なんかではない。完全なる世界戦争が起こる。それもWUSUが圧倒的有利な状況に立つ一方的な世界戦争だ。

「そのうちの二つ、刃薔薇と殺陣椿を貸してほしい」

「安心して。元々これ全部、おじさんにあげるよう言われてきているから」

「誰がトップなんだ？」

それを聞くと、少女はにっこりとしながら言った。

「内緒っ」

「じゃあ、君の名前だけでも教えてくれ」

名前を聞くことを忘れていた帝は、少女にそう問うた。少女はようやく思い出したかとも言いたそうに、先ほどの質問を拒否した時とは別種の笑みを見せた。少女は、質問に対して何の躊躇いもなく答えた。

「私は高真価帆。たかま・かほよろしくね、おじさん！」

8、反撃の狼煙

アメリカ人相手に一通り暴れた来琥と亜里去は、その場に倒れた。その傍らで、新紅がゆっくりと二人に近づいていくのが見えた。実が二人に対して行われるであろう攻撃を阻止するために、火球を作り出し、新紅へと放つ。新紅はその火の存在に気付くと、右足を火球に向かって突き出す。一度は押され、受け止める形となった火球が、そのまま跳ね返させる。

「何!？」

「下がって!!」

カナは狼狽える実の前に躍り出て、跳ね返された火球を受け止める。一度消失した火球を、威力を強めて撃ち出す。

「新紅はおそらく、私と同じ演算反射系リフレイクタイプの能力。すぐに二人を連れて!! 私がい止めるから!!」

「分かった。頼む」

実は倒れたままの来琥と亜里去を、五神斬と共に抱え込んで走り出した。

殺戮目標が遠ざかるのを確認したのであろう新紅が、攻撃目標をカナへと変更する。カナは新紅に再び反射された火球を吸収すると、その力を強めて新紅へと撃ち出す。すでに火球はカナの上半身とほとんどかわらぬ大きさにまで膨張していた。新紅がその火球をも右足裏で受け止め、元来た軌道に引きかえらせる。カナは放たれたその火球を受け止め、どうにか吸収する。しかし、吸収した時点で、体への負担は大きかった。その負担に狼狽えている間に、新紅がこちらへと走り出す。全身の激痛に耐えながら、カナは更に膨張させた火球を新紅へと放つ。しかし、新紅は空中に飛び出して回し蹴りをし、その火球を弾く。弾かれた火球は床に直撃したが、一瞬の爆熱の後、消えた。

そこでカナは、新紅が二つの理由から弾き返さなかったのを悟っ

た。一つは、膨大なエネルギー量であるために百八十度の軌道変更を行うための脳内演算の負担を考慮して。もう一つは、カナが吸収したものでしか攻撃できないと感づいたからだった。

成す術はなかった。元々カナは、体術関係で優れているわけではない。超能力者ではあるが、だからといって身体能力まですぐれているわけではない。超能力者のほとんどは、脳内の演算処理能力が脳回路手術によって急激に成長する見込みのある者になっている。身体能力は全く無関係なのだ。

しかし、カナが屠られることはなかった。新紅はまるで魂が抜けたようにその速度を落とし、カナの目の前で両膝から崩れた。その際に桃斧槍も取りこぼし、そのまま意識を失うと共に、数歩後ろに下がったカナの足元に倒れた。

動かなくなった新紅の首筋におそろおそろ指を近づけ、触れる。まだ脈はあった。それも安定している。意識を失っただけだろう。刃薔薇や鈴嵐といった別の五神斬との距離が離れたからか、契約者たる新紅の体力が尽きたのか。どちらにしても、この機会を逃すわけにはいかなかった。

「逃げるオオツ!!!!!!」

戦闘前までいた来琥の家まで二人を運んだ実は自身の疲れを癒そうと一度大きなため息をつきながら椅子に座った。そこで思い出したように、カナを探そうと玄関の方へと向かう。外で子供でも遊び回っているのか、軽快な靴音が聞こえる。全く、本当に表は平和だなと実は思った。その表の平和すら、WUSUの掃討作戦で脅かされつつあるというのに、こちらは裏で五神斬にも関わっている。面倒なことになっているのは誰に問うまでもなく明らかなことである。

玄関まで来た実の目の前で、ドアが勢いよく開かれた。そこにいたのは、息を切らして今にも倒れそうなほどに体力が底尽きているカナだった。

「もう……………」

入ってきたカナは、切れている息の間でそう呟く。そして、玄関のドアが閉まると同時に、天井の方向を見ながら叫んだ。

「もう走るのはやだああああっ!!!!!!!!!!」

「ミホミホー、今度はどこ行くのー？」

「そのどつかにおいてきた緊張感を取り戻したら教えてあげる」

すり寄ってきたアリスを左手で払いのけると、基地の外に誰もいないことを確認して外に出る。むろんアリスもその後をついてきていた。

「言っておくけど、今回アリスは絶対に口出しはしないで」

「手出しは？」

「万が一なら許す。でも基本的にはダメ」

「ぶー」

そう言いながらアリスが頬を膨らませるが、実穂にはそんなことはどうでもよかった。ようやくここに来た目的を果たすために動くことができるのだ。全く、情報を掴むのにも苦労した。情報を掴んで任務完了になれる情報屋や情報収集職（どちらも一般的な職業ではなく、強いて分類されるなら『軍事職』となるのだが）と違い、実穂たちは自分たちで集めた情報を元に動かなければならない。そこは軍事面においてWUSUの悪いところだと実穂は個人的に思っている。一人一人にマルチな才能を持たせることで、緊急時にも補充要員として対応させたいのは分かる。だが、人には適性というものがある。苦手な分野を無理に修得させて、得意分野を疎外していたら、何の意味もない。

「殺陣椿……………」

実穂は一人、呟いた。これから接触する者の名を。その者が持つ神の武器の名を。

「え？　なんか言った？　ミホ」

こういう時ばかりはよく聞こえる耳でばそりと呟かれた言葉を感じ取ったアリスが実穂の顔を覗き込むように背中を曲げてきたが、視

界に入れないように顔を挙げた。

実とカナは眠ったままの来琥と亜里去をソファに寝かせて、今までのこと、これからのことを話していた。

「五神斬の暴走……過行が予知した未来の第一段階ということか……」

「五神斬の距離が離れば、多分暴走も止まると思うんだけど……」

刃薔薇と鈴嵐が同じ場所にいても何も起こらなかったということは、三つ以上の五神斬が集まった時に暴走が起これということだろう。どうという原理でそうなるのかは分からない。だが、そうなったという事実は、ここから先に変えていかなければならない。

「これでは、桃斧槍も殺陣椿も桜鎚も、必ず明日未か過行のどちらかが待機しなければならぬということになるな」

しかし、それでは戦力の下げ幅が大きすぎる。

今にして思えば、とんだ誤算だった。まさか五神斬が一箇所に集まった時に暴走するとは。五神斬について、ある程度の知識を持っている実でも、そこまでは知らなかった。

「暴走は制御できないのかな……」

「それができれば、あんな未来は見えなかったと思うがな」

亜里去が見た未来。五神斬の暴走によって多くの犠牲と世界的戦争を発生させている未来。超能力者の掃討作戦を展開しているWUSUにも気を配る必要がある。先ほどは皮肉にも暴走によって一気に倒すことができたが、これ以降またあれだけの人数が一手に出てきたら苦戦を強いられるのは目に見えている。向こうは五神斬こそ持つていなくても、超能力者だ。しかも純粹種。その上、他の超能力を無力化する装置まで手元になれば、少なくともその能力を顕著に発生させることになる実やカナでは太刀打ちできない。

直接の肉弾戦という手もあるが、向こうが銃を持っていれば近づけないし、カナは体術という体術らしいものがない。実自身も、体術、

格闘術はあまり専門にはしていない。かろうじて護身用としての近接戦闘術は身につけていたが、熟練した者と対峙すれば、たちまちやられてしまうだろう。

「これじゃあ、来琥の目的も、亜里去の目的も果たせないよ・・・」

カナが涙ぐみながら悲観的な言葉を吐くのを、実は止められなかった。

指定時刻、指定場所。そのどれもに正確に到着した男に、実穂は話しかけた。

「初めましてかな？ 殺陣椿」

「殺陣椿で呼ばれるのはあまり好きじゃない。俺は羅絶らせつ・たいが対駕だ」

「針現実穂よ。よろしく」

「変わった名前だな」

「あなたほどではないわ」

実穂はまずは様子を見ていた。対駕がどう出てくるのか、それを見たかった。しかし、様子を見る時間は僅か数秒に留まることになった。

「それで、わざわざ俺を呼び出した理由は？」

「まあ、早い話が、殺陣椿を破壊させてほしいの」

「それはできないな。俺だって目的があって持ち続けている」

やはり断られた。だが、最終手段に入るのはまだ早い。理由を問い詰め、そこから説得へと向かう。それが一番の近道であり、一番手間のかからない方法だと、実穂は思っていた。奇跡的にアリスも実穂の後ろで黙ったままであるため、ここまで事は予想の範囲内で進行していた。

「人殺し？」

「逆だ。人を守るためだ」

「それなしでも守ることはできるんじゃない？」

そこで対駕が殺陣椿の剣先をこちらに向け、その刃先に電撃を纏わ

せていた。

「アリス！」

「なにー！」

ここにきてもほとんど緊張感がないように見えるアリスにダメ元で声をかける。

「手出し許可！！！」

「やったね！！！」

そう言うなり実穂の前方に一瞬のうちに出てくると、雷を剣先から放った対駕へと接近する。放たれた雷へ向かって両手を突き出したアリスは、両腕を真横に広げる。雷はその腕の方向へとそれぞれ軌道を逸らした。

「その能力………ネイティブ純粹種か………！！！」

「雷は私たちには無効よ！！！」

そこで実穂は対駕の眼前に躍り出て、桜鎚を振う。桜鎚は両鎚棒という別名の通り、棒の両端に巨大な鉄槌が装備されたものである。棒としての機動力と、鎚の打撃力の二つを兼ね備えたこの武器は、特に接近戦で輝く。

実穂は桜鎚のほぼ中心を持ちながら、左右の鎚を連続で対駕の脇腹へと叩きつける。このまま押し切れると思っていたが、さすがに向こうも殺陣椿。盾で一方の鎚を受け止めると、すぐに反対側の鎚も受け止める。腕の鍛え方が尋常じゃない。殺陣椿は決して軽くはない得物だ。それをこうも連続で振り続けるとなると、かなりのものだと分かる。そのうちに、盾で防いだ直後に剣でこちらを斬りつけてくる。いきなりの反撃で対応できなかった実穂は、右肩の部分の衣服を斬られる。体まで届かなかったのは奇跡と言ってもいいだろう。実穂は一度距離を取ると、桜鎚をまるで古風なカンフーさながらに振り回しながら接近する。対駕はその連撃を、まるで映画のように回りながらかわし、一瞬の隙に回った勢いで斬りつけてくる。

「くっ………！！！」

殺陣椿の『殺陣』は、『盾』のイントネーションを引用したもの

だが、殺陣そのものの意味は、映画や演劇においての斬りあいや立ち回りのことを言う。今日の前で映画さながらの立ち回りをしてみせるのは、この殺陣というものがあるのも一つの要因である。もちろん、契約者たる対駕自身の元々の才能も相まっているのだろうが「威勢がいいのは最初だけか！」

そう言うと同時に、対駕は殺陣椿の刃先が実穂に向くと同時に雷を発射する。体の自由が利かなくなった実穂の左肩を、大剣に変形した殺陣椿が駆け抜ける。両断はされていない。だが、確実な一撃だった。傷が深い。

「ぐはあっ……」

実穂はその場に片膝をつかざるを得なかった。対駕が再攻撃を行おうと実穂に接近してきたが、その前にアリスが立ちふさがり、それと同時に左手を突き出す。それによって二、三メートルほど対駕が後ろに下がる。その隙にアリスは両腕を頭上に上げ、そのまま横に広げ、視覚で確認することができる防壁を作り出した。

「反射防壁か。さすが純粋種^{ネイティブ}はやることが違う」

対駕は大剣状態の殺陣椿を變形させ、臨戦態勢を崩した。

「桜鎚は元々五神斬同士での戦いでは不利だ。なぜか分かるか？」

実穂は対駕を睨みはしたが答えるだけの気力は残っていなかった。肩で呼吸をしている状態なのだ。まともに口を利けるわけがない。

「確かに桜鎚は打撃力がある。だが、他の四つとは違い、『斬る』ということができない。鈴嵐でさえ、真空刃という形で斬ることができる」

アリスもまた、対駕を睨みつけていたが、実穂同様何か言おうとは思わなかった。ただただ防壁の維持に集中力を使っていた。

「もっと桜鎚にしかできない戦い方をしろ。針現」

そう言うと、対駕は二人に背を向けて去ってしまった。

亜里去は、しばらく眠っていたような感覚をまだぬぐえぬままに、目をわずかに開けた。

「う．．．．．ん．．．．．」

「あ！ 亜里去！」

「気がついたか」

どこからか声が聞こえる。亜里去は、晴れてきた視界の中に映る顔を見た。そこには、未だ眠ったままの刃薔薇の使い手がいた。

——なんだ、来琥か．．．．．。

しかし、そこで亜里去は眠気でぼやけていた意識が一瞬のうちに覚醒した。

「つてええええええええつ！！！！」

亜里去と来琥の顔との距離は僅かに五センチもあるかないかだった。鼻先に至っては目が覚めていた時には触れていた。唇さえも、何かの拍子に重なってしまいそうなほどに近かった。亜里去は飛び起きて来琥をソファから蹴り飛ばした。ソファから落ちた拍子にテーブルの脚に頭をぶつけ、来琥も目を覚ます。

「いったあああつ．．．．．」

頭を押さえながら寝ぼけ眼をこする来琥と対照的に、亜里去は、顔を耳まで赤くしていた。

「さすがに同じソファに寝かせるのは不味かったんじゃ．．．．．」

「^みカナが実に向かって申し訳なさそうに言うが、^の実の答えは^{じつ}実に質素なものであった。」

「しかし、片方が床では不平等だろう？」

その声は亜里去に筒抜けであり。

「アンタが犯人があつ！！」

「まあまあ、亜里去。大好きな来琥と一緒に寝られたんだし」

そこでカナがフォローにもならないことを口にしたが、もちろん意味はなかった。

「な．．．．．だ．．．．．だただ誰が．．．．．こっ．．．．．
こんなやつ．．．．．」

「過行、顔が赤いぞ」

珍しく茶化す実の言葉も、火に油を注ぐだけの行為であることに変わりない。

「う……うるさ……い……!!!!!!」

そう叫びながら来琥の腹を蹴った。

「なっ……俺を蹴るなあ!!」

そう反論する来琥に耳を貸すことなく、亜里去は来琥を指差しながら、顔を真っ赤にして叫んだ。

「別にアンタのことなんか、すっ……好きでもなんでもないんだからねっ!!!!」

そこから亜里去の機嫌が直るのと来琥の後頭部にできたこぶが治るまでに時間がかかったのは言うまでもない。

9、心理と原理

一人となった新紅が目を覚ましたのは、カナが立ち去ってから二時間半後のことだった。起き上がった新紅は、自分は思った以上に長く眠っていたことを知覚した。最後に新紅が覚えているのは、自分の中を気持ちの悪い何かが流れたような感覚だった。新紅は桃斧槍を握りしめると、自室のあるコンテナまで飛び上がった。

足に触れた物に対する力の方向を重力や空気抵抗に縛られずに自在に動かすことができるのがこの能力だ。足に触れたなら銃弾もエネルギー系統の能力も、核兵器さえも跳ね返すことができる。もちろん、エネルギー量、もしくは質量が多ければ、それだけ反射時に必要な演算処理量も多くなる。脳内での自動演算とはいえ、脳に負担がかかれば集中力や戦闘能力にも影響が出てくる。だから新紅は膨大な質量、エネルギー量のことを相手にする時は、演算量を減らし、物体を『停止』させてから、反対方向へと『発射』することで、脳への負担を減らしている。この方法を使えば、その分隙が大きくなってしまふのが欠点ではある。何せ反射は、触れた瞬間に来たときと同じスピードで跳ね返すことができる。

「にしても最近はお客が多いな……こっちは暇じゃねえっつうのに」

まだ読みかけの小説が残っている。今日中に読み終えるつもりだったのに、これでは明日までかかってしまう。

「にしても、あの時の感覚は何だったんだ……」

僅かに残る意識の断片に映る自身の動きは、自分が指示して動いているものとはとても思えなかった。なりふり構わずいるやつ全てを消そうと暴れているようにも感じた。

——って、自分以外が邪魔だと思っのはいつものことか。

読書の邪魔だからと、自分に関係のない人間はとことん始末している自分を、新紅は分かっていた。自分が人を嫌っていることも、

人に嫌われやすい性格をしていることも分かっている。そして、それを改善する気もないということも自覚していた。

ある意味、最低な人間だ。

でも、それが自分だと思ってる。それでいいと思ってる。

「お、最新話か・・・」

でも、それを考えてることすら、新紅にはほとんどなかった。

来琥と亜里去は、その後の数時間の療養によって、完全に回復していた。

「ホントに大丈夫なの？」

カナが心配そうに亜里去に尋ねたが、亜里去は当然とでも言うような顔で言い返した。

「来琥と違って、私は自己治癒力が高いんじゃない？」

「俺はお前のせいで負った傷も治したんだが？」

そんな来琥の反論を亜里去は完全に無視したが、来琥も別に気にしなかった。

桃斧槍と戦闘を開始する直前に起こったあの現象。今まで感じたことがなかった。考えられる条件は、やはり五神斬がらみだろう。実やカナは何も異常がなかったとなると、考えられるのはそれしかない。

「明日未。他の五神斬と戦う時は、もう二人では出られないぞ」

「やはり五神斬が関係しているか・・・」

実から聞かされたのは、三つ以上五神斬が集まった時に発動する暴走についてだった。もし五神斬が五つ全て同じ場所に集まったとすれば、亜里去が見た未来が起こる。あまり信じたくはなかったが、自分たちがそれとほぼ等しい状態に陥ったのだから、可能性は否定できない。むしろ、肯定されるほどの可能性だろう。

「・・・ああ、分かった。ところで、カナ」

「え、あ、何？」

「殺陣椿の方の情報は掴めたか」

「え、あ、いや、それは……まだ……」

カナが自信なさげにそう答えたのを見て、来琥は不思議そうに顔を歪めたが、すぐにその顔を正した。

「まだ回復は完全じゃない。少し外に出てきたらどうだ」

「そうさせてもらっ」

来琥が玄関へ向かうのを見たカナが、亜里去の腕を強引に引いて玄関まで連れてくると、靴を履き終わった来琥へと押し出してきた。

「ちよっ!!」

振り返った来琥はいきなり現れた亜里去を慌てて抱き留める。赤面した亜里去がすぐに来琥を突き飛ばして自分の靴を履き始めた。

とある女が男から貰い受けたのは、一本の鞭。各所にこの鞭特有の機構を体現するための装置が取り付けられている。男の方は、特殊な形状の剣を一本ずつ持っていた。

「面白いものを持っているんですね」

「俺ももらいものだ。形勢が面白いように変わってくればな」

「変わるでしょう。これがあるなら」

女はにやりと口元を歪めてみせた。

来琥と亜里去の出発点が来琥の家であつたためか、来琥と亜里去は、買い物の帰りと思われる奈美と出会った。

「おお、ラッコ！」

「ら、ラッコ？」

亜里去がここに出ると思つてなかつた単語に首を傾げている中で、来琥は答えた。

「奈美、今帰るか」

「うん。今日は私の大好きなシチューを作るの」

奈美はいつでも笑顔で、いつも嬉しそうにしている、生きている」とそのものが幸せとでも言うように。

「ラッコ、そちらの方は？」

奈美が体を傾けて来琥の後ろで二人のやりとりを見つめていた亜里去を見ながら来琥に問うた。来琥は体を寄せ、奈美と亜里去をそれぞれ紹介する形になった。

「二人は会うの初めてだったな。こっちは代々木奈美。俺の幼馴染だ」

「よろしくね」

ここまで純粹な笑顔を向けられたことがなかったのか、亜里去は驚いてしまっていたが、照れくさそうに自己紹介した。

「過行亜里去です」

さすがに女相手ならば名乗るのだろう。そのことに少し安堵した来琥だったが、その安堵も、その一瞬で崩されることとなった。

「まったく、仲が良くていいわねえ」

聞き覚えのあるその声にすぐに反応した来琥と亜里去は、その視線の先に木嶋相子がいることを認識した。二人が振り向いた視線を追うように、奈美も相子へと視線を向ける。

奈美にとっては衝撃的だったのかもしれない。目の前で鞭を持った女がどう考えても友好的には思えない笑みを浮かべながらこちらに近づいてきたのだから。

「亜里去、奈美を連れて逃げろ」

「ダメだよラッコ！ 怪我しちゃうよ！！」

奈美には自分が超能力者ということを知れている。だが、五神斬のことに關しては全く教えてない。教えてはいけないと思っっているからだ。奈美に五神斬を、刃薔薇を見せるわけにはいかない。見せれば余計な心配をさせることになるし、最悪、WUSUに目をつけられて奈美を巻き込むことになりかねない。

奈美と亜里去の姿が見えなくなった時、来琥は目の前にいる相子の顔を睨みながら問いかけた。その目は、揺らがない。

「その武器はなんだ」

「よく知ってる武器だと思うけど？」

分かっている。見た目だけで判断しても、どうみても鈴嵐だ。しか

し、亜里去にその種の動揺がなかったということは、盗み出したわけではない。となれば、誰かが個人的に作ったということだろうか。しかし、おもちゃにしては完成度が高すぎる。鈴嵐の特徴である空調操作機構の動作部分や、その他細部まで細かく再現されている。

「契約者が必要としない五神斬だとは聞いたけど？」

「必要としない……！？」

それはつまり、誰でも扱うことのできるということだろう。しかし、それでは問題が発生するはずだ。

来琥の知識内では、五神斬は使用した際に発生する物理的な処理をデータ変換し、それを契約者に負担させることでその性能を発揮している。だからこそ、超能力者のような脳に大量の許容量キャパシティを持つ者でなければ五神斬を扱うことはできない。許容量が少なければ、契約を結ぶことすら敵わないのだ。

「なんでも、データ変換後の処理を自動でやってくれるとかつては、聞いたけど、ねー！」

言いながら相子は鈴嵐を振り、振った先から空調操作機構による真空刃を発生させる。斜めに放たれたその真空刃を横に飛んで回避して、刃薔薇を構える。縦に振られて放たれた真空刃を舞台上でダンスを踊るように回ってかわし、その途中で花開いた刃薔薇から銃弾を放つ。相子がその銃弾をかわしながら接近してくる。

「速い！」

恐らく、鈴嵐の力だろう、と来琥は思った。走るときに空調操作機構を利用しているのは間違いないのだ。

真空にした試験管の中と、空気が入った何も手を加えていない試験管の中で同じ質量、面積の紙を落とした時、真空にされた方の紙は一気に落ちていくのに対し、空気が入っている方の紙はふわふわと舞いながら落ちていく。これが一般に言われる空気抵抗というものだ。走っている時に前方から風が来ているように感じるのも、これと同じ原理である。恐らく相子は今、その空調操作機構によって走る際に邪魔になる空気を排出させ、空気抵抗を限界まで減らして

いるのだろつ。

「接近戦なら――！」

来琥は刃薔薇を剣形態にして、振われたその鞭をかわし、足部分へと刃薔薇を滑らせる。しかし、滑らせると同時に、相子の姿が視界から消える。体勢を立て直した来琥が振り向くと同時に、来琥の左わき腹に鞭が入る。

「くっ！」

そのまま切り返して今度は右わき腹に鞭が叩きつけられる。その勢いで振り上げられ、袈裟懸けに振り下ろされた鞭を体勢を低くしてかわし、バネ動力のように足を延ばして斬りかかる。

「おっと」

そう呟きながら相子が風を起こして刃から距離を置く。体全てを風の流れに任せて体の位置をずらしたらしい。空調操作機構をここまですべてに使いこなすのは、彼女の才能というのもあるかもしれない。機構の操作という処理にも、脳内のイメージを必要とする。それによって発生した振動や反動を脳内で処理する五神斬のシステムを覆し、それを武器そのものが処理しているということは、脳への負担は実質ないのだ。だからこそ、ここまで機構を連続して使い続けることができるのだ。

「武器一つでこうも違うの？ 情けないねえ」

そう馬鹿にしながら振った鈴嵐が来琥の左頬を叩く。その勢いに圧されて、来琥は地面にうつ伏せに倒れた。刃薔薇は握ったままだ。相子は鈴嵐を地面に叩いてしなせながら近づいてくる。来琥は立ち上がるう全身に力を込めるが、その力を発散させる前に鈴嵐を叩きつけられる。追撃とばかりに更に鈴嵐で叩かれる。その瞬間に、来琥の抵抗は止まった。それを見て相子は叩き続けるその手を止めた。その瞬間を狙って全身の力を爆発させた来琥は、一気に立ち上がって刃薔薇を横薙ぎに振う。しかし、それを軽く体を逸らせてかわされると、一撃逆転を狙っていた来琥の無防備な体勢を逆に狙って鈴嵐を叩きつけてきた。ここまでの攻撃の中で一番の衝撃が来琥

を襲った。来琥は両膝から相子の前に倒れた。

「ふん、たいしたことなかったわね」

立ち去ろうとした相子に向かって、来琥は言った。

「イメージしてみる………空調操作機構が、思うように動作しない様を………」

「動作しない………?」

その一瞬の隙だった。

来琥は獣の如き目で相子に肉迫し、刃薔薇を突き出した。相子が空調操作機構によって刃をかわそうとしたが、風は彼女の思うようには動かなかった。

「そんな!」

「もらった!!」

来琥が突き出した刃薔薇は、相子の左肩を貫く。そのまま銃形態に変形して左腕を切断しようとしたが、その前に刃薔薇を抜き取られる。だが、その代わりのように刃薔薇を振り上げ、その腹部に切り傷を入れた。相子はそのまま後退し、落ち着かせたのであろう脳内イメージで空調操作機構を使用し、遙か遠くへと飛び去って行った。脅威が去ったと体が知覚した瞬間、来琥は崩れ落ちた。倒れてから無意識のうちに止めていた息が切れ、呼吸が乱れる。揺れる意識の中で、来琥はメールを打ちこんだ。

亜里去は送られてきたメールを黙読した。来琥から送られてきたそれは、ここからの亜里去の行動を示唆するものだった。

「ラッコからでしょ」

ソファでじっと先ほどの衝撃に耐えていた奈美が、ソファの上で下を見続けながら亜里去に質問というよりは、確認の意味で問いかけた。亜里去は、送られてきたメールに書かれていた通りに行動することにした。自身が黙読した内容と照らし合わせながら。

『俺からかどうかを聞かれたら、違うと答える。内容を見せるように言われたら、同時刻に送ったカナからのメールをみせる』

「うっん、友達から」

来琥の指示通り、亜里去のメールボックスには、来琥のメールの二秒後にカナからのメールが入っていた。いつもより着信の振動時間が長いと思っただらこういうことだったらしい。

「あの人は、一体何なの……？絶対、私たちの中の誰かを、狙ってたんだよね……！」

奈美は涙ぐんでいた。それでも亜里去は、来琥に与えられたシナリオ通りに動くことにした。辛い嘘だということも分かっている。亜里去は嘘をつくのが下手でこそないが、プロでもない。それでも、これ以上彼女を巻き込みたくないという来琥の考えの方を、亜里去は尊重することにした。

『もし、木嶋のことを聞かれたら、WUSUの構成員だと伝える。掃討作戦のこともある』

「狙われていたのは、多分来琥と私。彼女はWUSUの人間。超能力者を狙っている」

「WUSU……超能力者の掃討作戦……？」

「……うん」

これ以上嘘は吐きなくなかった。自分自身、嘘を吐くのが辛くなっていた。来琥の指示とはいえ、何も知らないこの少女を、目の前のことも受け止めるのに必死になるくらいに裏の世界を知らない少女を、これ以上騙したくなかった。早くここから立ち去りたい。亜里去は強くそう思った。

「あいつ、優すぎるのよ」

アドリブで突破しようと試みる。このアドリブが自分の本心なのか分からなかったが、それでも、壊れかけた心は、亜里去に無意識のうちに本音を吐かせていた。

「自分を犠牲にしても、誰かを守ろうとするから……」
何言ってるのよ。私は。

「……じゃあね。また、いつか会おう」

「待つて」

尚も涙ぐんだままの声で、奈美が呼び止めた。もういたくなかった。足を止めなければよかった。やろうと思えば、制止の声を無視して、家を飛び出すこともできたはずだ。それなのに、自分は足を止めてしまった。もう、うまく話を持っていかなければ、帰るために再び歩くことができない。

「さっき言ってたこと、嘘でしょ……」

その言葉に、亜里去は思わず振り向いてしまった。

いつの間にか赤くなった空から、夕方を告げるカラスの鳴き声が聞こえてきていた。

10、優しい嘘

亜里去はこの上なく焦っていた。取り繕っていた嘘が全て見抜かれたのだろうか。

「来たメールはラッコからってことも、WUSUの人じゃないってことも」

「・・・・・・・・」

亜里去は自分の口が僅かとはいえ開いてしまっていることに気がつかなかった。今すぐにでも逃げ出したかった。彼女との関係はこれっきりにしたかった。もう顔も見たくない。嫌って見たくないと思うのではない。これから会えばきまずくなると思っていたからだ。

「きつと、その嘘もラッコが言ったんだよね・・・・・・・・」

そこまで分かっているとは。亜里去は完全に負けてしまっていた。

「あ、えつと・・・・・・・・」

言葉が出てこない。どうにか嘘を吐いたことを隠そうとしている自分がいることを亜里去は自覚していた。しかし、嘘を嘘で塗りつぶすというが、亜里去は嘘を塗りつぶすことすらできなかった。たとえ塗りつぶしていたとしても、奈美は僅かな塗装の違いを見つけてそれを暴くだろう。そんな可能性が頭をよぎったために、亜里去が口にできたのはたった三文字だけだった。

「・・・・・・・・ごめん」

「でも、ラッコが優しいってことは嘘じゃないんでしょ？」

「え・・・・・・・・？」

先ほど亜里去が早々に立ち去りたいがためにアドリブで言ったこと。一体そこそままでに言った嘘とどう違ったのだろう。同じように言っただけなのに。

「それはとっても嬉しいな」

「・・・・・・・・！」

もう亜里去は限界を超えていた。

奈美に背を向けて走り出す。玄関まで走り靴を急いで履き始める。こんなときに限って手元が狂う。早くここから出たいのに！

「亜里去ちゃん！」

奈美が玄関で帰ろうとしている亜里去を呼んだ。何も答えようとせず、ついに履けた靴を確認して立ち上がった亜里去に向かって、奈美は言った。その目に涙をためながら。

「優しい嘘を、ありがとう」

しかし、その顔は僅かであっても、笑みを見せていた。

ドアノブに手をかけた亜里去は、うつむきながら奈美へ別れ際の一言を言った。呟くように、でも確かに奈美には聞こえるように。

「あなたは………バカよ」

亜里去はそう言いながらドアを開け放ち、走り出した。

来琥と亜里去が出かけた後、実はカナを追及していた。

「お前、二人に隠しているだろう」

「な、何を………」

唐突に始められたその話に、もちろんカナがついていけるはずもなかった。実はもともとこういう性格であるがゆえに、言葉を選ぶのが苦手というのもあった。しかし、言葉を選ぶ必要もないと、実は思っていた。

「殺陣椿のことだ」

「あ………」

カナがしまったとしても言わんばかりの顔で実を見た後に力が抜けたように下を向いた。

「あの二人を騙せても、俺を騙せると思うなよ」

言葉そのものは強くなっていたが、カナを怯えさせなくなかったがゆえに、口調は柔らかいものだった。それが功を奏したのか、カナは一度動揺させた心を落ち着かせたようだ。

「何で黙っている？ 本当はとっくに掴めているだろう。きっと、俺たちが出会ったとき、すでに」

カナが再び驚いた顔で実を見つめた。

「そこまで知ってたの!？」

「やはり、その時も知っていたか」

「!」

正直に言えば、さっきのはハツタリである。本当に知っているかどうかを確かめるための。来琥や亜里去からの話なら、カナは、殺陣椿に接触している実のことを、殺陣椿の情報を得るために掲げたのである。つまり、元々殺陣椿に関する情報を持っているのに、わざわざ実のことを提示したのだ。第一、実を捉えたところで、殺陣椿に関する情報として吐き出せることは僅かしかなかった。並べれば、五神斬生誕事件のことと、殺陣椿の本名、羅絶対駕ということぐらいだったのだ。

「お前は殺陣椿の何なんだ」

「それは……」

そこでカナが黙り込む。それ以降、下を向いたまま何も喋ろうとしなかった。やはり、どういう形であれ、カナと殺陣椿の間には、なんらかの関係があるとみて間違いはないだろう。しかし、カナが何も喋ろうとしない以上、こちらがこれ以上追及しても意味はないだろう。だからこそ実は、これ以上何かを言い出そうとは思わなかった。しかし。

「誰にも言わない……?」

実が立ち上がるうとした瞬間に、しばらく口を閉じていたカナがついにその口を開いた。

「ああ、約束する」

自宅に戻った来琥は表に出た実とカナの前で倒れた。

「明日未、お前……」

体の各所を打たれた来琥は、ここまで歩いて来れたのが奇跡とすら思っていた。

来琥は相子が使っていたあの鈴嵐のことをずっと考え続けていた。

契約者を必要としない五神斬。データ変換後の物理的处理を五神斬そのもので行う構造。それによって、超能力者以外でも扱えるようになった。相子が何の不自由もなく使っていたのがその証明だ。契約者を必要としない、それはつまり、五神斬の方から脳波に干渉することはないということだ。ということは、あの疑似五神斬は暴走することがないということだろうか。

暴走も契約も脳波干渉もない、超能力者以外でも使える、ということは、もし量産化されれば、誰もが自分たちと同等かそれ以上の力を持つことになる。それとも、量産を前提で作られた試作品なのだろうか。

「二人に、報告しておくことがある」

帝は価帆という少女に連れられてとある研究所に来ていた。彼女が個人的に使っている研究所だということだが、それにしても設備がかなり整っている。白を基調としたこの研究所は、彼女一人で専有しているものらしい。

しかし、帝は未だに疑問を持っていた。手先が器用でも、この年齢において五神斬の構築理論を理解することは難しい。五神斬は内部でコンピュータのような役割も果たしている。コンピュータが感知した反動や装填の際に、与えられたその障害をコンピュータそのものに吸収し、それをデータとして表示。演算処理能力によって、それらを情報として所有者の脳波へと送ることで、武器自体を不由なく使うことができるのだ。

そこにはさらに複雑な演算処理式を必要とする。その処理式を五神斬そのものに行わせるとは、どうにも難しい話なのだ。

「君はこの技術をどうやって手に入れたんだ？」

「お父さんとお母さん、かな」

「二人とも科学者だったのか」

しかし、その仮説に対して価帆は異を唱えた。

「違うよ、科学技術研究者だよ！！」

変なところを強調されたが、帝はあまり気にしなかった。しかし、その次に言い出したことは、決して聞き捨てならないことだった。

「これ、量産してWUSUに売りつけるつもりなの」

「WUSUにかー!!」

契約者が必要としない五神斬。桜鎚を所持しているも同義の状態のWUSUが、五神斬を長いこと使っている桜鎚を筆頭に、量産化した五神斬で攻めてきたら、確実に日本の超能力者は全滅するだろう。それはつまり、日本のオリジナルの五神斬たちが負けるということである。

「WUSUの資金力を吸収して、それを糧に新たな研究につきたいから」

「私欲のためなら、敵国にも手引きするか」

「元々五神斬だって、WUSUの力なしには作れなかったしね」

「機密なところまで知っているんだな」

そんな帝の皮肉な言葉にほとんど耳を傾けようとはしなかったが、それでも構わなかった。「そういえば、おじさんは、五神斬の何なの？ 機密事項も知ってるようだけど」

彼女は五神斬に深くまで関わっているのだろう。五神斬に一番深く関わるのは、使用者でも提供者でもなく、製作者だ。そして、彼女はこの量産型五神斬の製作者。向こうが向こうで自身の正体を明かしたのだ。自分も同様に明かすのが筋だろう。

「君が量産型の五神斬の製作者とするならば、俺はオリジナルの五神斬の製作者、ということになるだろうな」

当時の開発チーム以外、このことを知る者はいない。五神斬生誕事（いめくまたちのよる）件にて行われたトレジャーハントも、帝が主催したものである。

「当時の開発チームの中に、高真大路と、高真小夜（たかま・おおじ）という人達がい
たでしょ？」

「ああ、いたな。五神斬の演算処理電腦の開発主任と副主任だったな」

その言葉を聞いた瞬間、価帆は手元にあった疑似刃薔薇を握ると、

帝へと突き出してきた。帝はその突きをふらりと倒れるように体勢を崩す形でかわす。突き出した位置からそのまま横方向に振り抜かれた刃薔薇をしゃがんでかわすと、頭上から振り下ろしてきた。帝はその斬撃をサイドへのステップでかわし、振り広げようとした価帆の腕を、帝は片手で掴んで止めた。

「君は科学者だ。無理に戦う必要ない」

「言っただよ。科学技術研究者って!!」

価帆は刃薔薇を銃形態に変形させて銃弾を放つが、腕の方向を変えたために、帝を標準に捉えることは叶わなかった。

帝は、そのまま価帆を引き寄せると引き寄せた腕を下へ、帝自信の左足を振り上げ、刃薔薇の刃の腹部分を蹴り、価帆の手から刃薔薇を強制的に離す。そこから間髪入れずに刃薔薇の柄を地面で蹴り、価帆がすぐには取り戻せない位置まで滑らせる。帝は価帆の腕を離れた。

「なるほどな・・・高真・・・君の両親か」

「あの時から、お父さんもお母さんも帰ってこない！ 何処!! 何処にいるの!？」

「彼らは、それぞれ五神斬の設計図を持って、世界中に散らばった。少なくとも、日本にはいない」

その言葉を聞いて、価帆は諦めて口を閉じた。帝は何も言わずに価帆に背を向けた。その帝に気が付かれないように、価帆は今度は桃斧槍を握って帝へと突き出してきたが、帝はその突きを回りながらかわし、大きく振り上げた足を桃斧槍の槍部分に振り下ろし、槍部分を床に突き刺す。

「君は黙って研究を続ければいい。君は科学技術研究者だろう?」
帝は皮肉そうに言いながら、価帆の研究所を去った。

どうにか自宅まで戻ってきた来琥は、ソファに横になりながら、実とカナへと鈴嵐のことを話していた。

「五神斬が誰かに作られてるってこと?」

「誰が作ってるのかは知らないがな」

カナがゴツバネットワークに接続して情報収集を始める。鈴嵐があるということは、おそらく、他の五神斬もあるだろう。鈴嵐だけが完成したとは考えづらいのだ。

「実、どうした？」

「……いや、何でもない」

実が何か考え込んでるのを見て、来琥は声をかけたが、何でもないと言われて黙ることしかできなかった。

来琥は感づいていた。実が何かを知っていることを。そして、それを隠しているということを。

11、一人での再戦

相子との戦闘から一週間が経とうとしていた。あれから亜里去からの連絡は一度としてなかった。奈美もまた、亜里去のことを心配していたようだが、首を横に振るしかなかった。一度、奈美の方にも亜里去のことを聞いたのだが、あの日以来見ていないと言われ、完全に音信不通になってしまっていた。

帰り道で奈美や実穂と共に歩く。話している内容こそ同じであれ、考えていることはそれぞれ全く違うことだった。来琥は亜里去との連絡がつかないこの状況で、どうやって五神斬を破壊しようかと考えていた。亜里去がいけないことで、五神斬を持つ者に挑むには必ず起こってしまう暴走は回避できる。しかし問題は、その少なくなった戦力でどう対応するか、ということだった。殺陣椿の情報は入らず、桜鎚のバックにはWUSUがある。狙うべき五神斬は一つしかなかった。

「ねえ、来琥君はどう思う？」

脳内思考を張り巡らせていた来琥は、突然に実穂からかけられた質問に驚くことしかできなかった。

「え？ あ、えっと……」

「もう、話聞いてないの？」

「ちよつと考え事を……」

「いいわけしないの！」

実穂が指を立てて拳を軸に揺らす。本当に考え事をしていたので、一応理由にはなっているようだが、向こうからすれば、それは事実でも立派な言い訳らしい。

「浜比良祭、今年は私たちのクラスでケーキを作ろうと思うんだ」
奈美が嬉しそうに笑ってみせる。来琥はその顔に笑みをたたえて賛同した。

「いいんじゃないか？ 人も集まるだろうしな」

「じゃ、私たちがこれ提示したとき、来琥君も絶対手挙げてね？」
「え、いや……それは、男のプライドっていうか、女子の意見に賛同すると、後で批判が……」
しかし、来琥のそれ以上の反論は、実穂が無言で詰め寄ってきたによつて認められるはずもなく、来琥は仕方なく、ただ一人だけ挙げることになるかもしれない危険を冒してまでも賛同の挙手をするこ
ととなつてしまった。

奈美と別れた後、来琥は正面を見たまま実穂に尋ねた。

「奈美にはばれてないようだが……何があつた？」

「何の事？」

わざととぼけているのは目に見えて分かつた。来琥は自分の左肩を右手の人差し指でつつきながら呆れたように言つた。

「その左肩。怪我してるんだろ」

「やつぱり分かる？」

実穂が照れくさそうに笑つた。来琥が何故そんな怪我をしたのを聞
こうと口を開きかけた時、聞きなれない声が鼓膜を刺激した。

「ミホオオオオオオッ！！！！！」

結構遠くの方から実穂の名前を呼びながら少女がこちらへと走つてくる。その姿を見た実穂が、今にも逃げ出したくてたまらないように顔を歪ませていた。来琥は無関係者としての地位を振るまいたかつたのだが、そういうわけにもいかなかった。

「来琥君、私の言うタイミングで私の前に出て」

「は？」

尚も向こうから走り続ける少女は、実穂めがけて一直線に走つてくる。止まる気配が全くなかつた。来琥はただただ無関係者の振りを
し続けていたが、

「来琥君！！」

「あいよ」

そう言いながら実穂の前に立つた来琥はそのまま突っ込んできた少

女を数歩後ろに下がりながらも受け止めた。少女は顔を上げると、赤面しながら、驚いて飛び退いた。おそらく、抱きついたのが実穂でないと感じたために、余計に恥ずかしくなってしまうているらしい。

「（精神的に）大丈夫か？」

「あ、うん、（肉体的に）大丈夫」

ある程度の年齢を重ねているにも関わらず、ここまで弾けられるとは、ある意味幸せかもしれないが、精神的に未成熟な気がしてならない。自分たちとほとんど変わらないであろう年齢のはずだが、その言動は若干自分たちとは違う若さを象徴しているようだった。

「アリス、自己紹介しなさいよ」

「あ、うん。……あ、アリス・ハイリアです」

「明日未来琥だ」

来琥はアリスへと右手を差し出した。アリスは「ふえっ？」と情けない声を漏らした後、来琥の右手に自身の右手を重ねた。来琥は安堵して顔を綻ばせたが、アリスはこちらの顔を見ようとはしなかった。少なくとも怒っている様子はなさそうだからよかったが。

「あ、ミホ！ 司令部がミーティングを行うから早く来いって」

「そんなことなら科学的に連絡を寄越してよ。直接伝えるなんて、いつの時代よ」

実穂が呆れて溜息を一つついた後、その場を立ち去ろうとした来琥に声をかけた。

「来琥君、またね」

「じゃあね、来琥！」

「………ああ」

二人は別れの言葉を告げて来琥に背を向けて走り出した。また来琥は二人とこうして話すことができるか分からなかった。おそらくアリスもWUSUの構成員で、二人は行動を共にするパートナーのよくなものだろう。WUSUは作戦行動時、二人三脚の形をよく取ってきていることは、軍事関係者ではなくともよく知られていること

だ。次会うのは、友人としてではなく、敵同士としてかもしれないのだ。だからこそ来琥は、にこやかに友人として振る舞うことはできなかった。少なくとも自分は超能力者であり、オリジナルの五神斬、刃薔薇を持つ者。WUSU自体からも、全ての五神斬の破壊を命じられた実穂からも狙われている身なのだ。

来琥は家までの道を歩きながら、もうかなり遠くなってしまった二人の少女の行方を、目で追いつけていた。

来琥が実穂、アリスと別れたころ、価帆は自分の研究所の入口付近に設置しておいた警備用の戦闘型サポイドが破壊されたのを察知して、すぐに監視カメラを作動させた。監視カメラに映っていたのは、先日この研究所に招き、価帆が憎むべき敵であることが判明した終間帝だった。価帆はそばにおいてあった端末を手に取るとある人物に、目標発見の暗号文通信を送った。その事実を知る者は、送受信者のみの話である。

その通信を受け取った青年は、受信直後から走り出していた。家の前で磁力車に乗り込み、目的地へと走らせた。磁力車は、その名の通り、磁力によって加速する車だ。車体後部には二対の磁石が取り付けられ、反発時と引き寄せ時の切り替えによって加速と減速を行うことができる。車体下部には、反重力装置が取り付けられている。反重力装置は、重力、つまりつは、地球が物体を引き寄せる磁力に反発することによって、常に浮いた状態となっている。方向転換の時には、この反重力装置の一部の反磁力を弱めることで車体を傾けることで行える。磁力車は従来の四輪車に比べれば、高低差を気にせず走らせることができるが、方向転換時に少なからず車体が傾くために、乗り物酔いの症状を持つ者たちの人気は低い。もちろん、環境車エコカーとして、国は磁力車を推薦しているのだが。

研究所で磁力車を乗り捨てた青年は、研究所の入口におかれているサポイドが破壊されているのを確認すると、正面入り口から、

送られてきた暗号文に記されていた場所へとその足を急がせた。通路に設置されている監視カメラが破壊されているところを見れば、侵入者はかなり手練れか、もしくは一度来ただけでほとんど覚えたのかもしれない。もつとも、破壊されていれば、そこを通ったという道しるべになるゆえに、青年にとって都合は良かった。

破壊された監視カメラをたどった先に、目的地が見えた。

価帆は侵入してきた帝を睨み付けた。帝は達観した面持ちで、腕を組んでこちらに一步ずつ歩み寄ってきていた。

「君は愚かだ。五神斬は俺の作ったオリジナルだけで十分だ。模倣品は作ってほしくなかった」

「嫌悪しているわりには、刃薔薇と殺陣椿をちゃっかり持ってつちやつてるけど？」

「ただの戦利品に過ぎない」

「五神斬のように、使用者への負担が大きい武器など、実用性は低い！ ましてや使用者の脳波を乱して暴走するなんて——」

「今のは聞き捨てならないな。使用者の脳波を乱しているんじゃない。五神斬による脳波の拡張動作に、脳波がついていけない、もしくは、脳波の方がそれを強制遮断するために暴走しているのだ」

帝がゆつくりと近づいてくる。おそらく、本気で自分を始末するつもりだろう。おそらく、五神斬生誕事件に、参加者以外での関係者は、おそらく彼にとっては都合の悪い存在。

「君には消えてもらう——！！」

そう言つて帝が、銃口を価帆に向けた時。

「それはさせない」

一人の青年が、部屋の入口で右手から火を溢れさせながら帝を睨み付けた。

『磯城革に挑む！？』

来琥が帰宅後に通信機越しにカナに告げたことに対してのカナの反

応はこれだった。

『何でいきなりそんな……』

恐らく、カナの今までの状態を考えれば、恐らく殺陣椿の情報は入っていない。そして、桜鎚たる実穂もミーティングを行っているとすることは、WUSUの戦力がごくわずかな時間だけとはいえ、少なくなるのだ。この機会を逃して桃斧槍に、磯城革新紅に挑んでも、また邪魔が入る可能性がある。向こうは——恐らく能力を利用しているものだが——圧倒的なジャンプ力を有している。すぐに逃げられて、最悪の場合、来琥一人がWUSU兵に取り囲まれて孤立する可能性がある。

「亜里去と行けば、また暴走することになる。カナの能力じゃあ桃斧槍には太刀打ちできない。それに、実とは連絡がつかない」

『連絡がつかない！？』

カナが驚くのも無理はない。今まで実は、こちらの用件、依頼を断ることはあっても、こちらからの複数回の連絡にも反応しない、などということはなかったのだ。一度連絡がつかなくとも、一、二時間後には連絡がついていたか、もしくは数分後に向こうから掛け直されていたのだ。

「元々、五神斬の破壊は俺の目的なんだ。亜里去に俺の目的を押し付けるわけにはいかない」

そうだ。自分は勝手に亜里去を仲間に引き入れて、亜里去の殺陣椿への復讐に勝手に手伝おうとして、勝手に自分の目的の協力をさせた。この前もそうだ。奈美に余計な心配をかけまいとして、奈美を自分たちの戦いに巻き込ませまいとして、亜里去に役目を押し付けた。亜里去が嘘を吐くのが上手いのかどうかは分からない。しかし、最初から嘘を吐かせること自体間違だったのだ。奈美に嘘が通用するはずがない。たとえ万人を欺けるポーカーフェイスを持っていたとしても、誰もを自分のペースに乗せる話術があっても、もしその両方があったとしても、奈美には見破られてしまうのだ。それをどこかで分かっているながら、自分は奈美に嘘を吐きたくなかったからと、

亜里去に押し付けたのだ。

自分は最低な男だ。

「もし俺がこの後誰とも話せなくなっても、どうしてそうなったのか、その理由を知っておいてほしいから……」

『来琥、待つて……』

「じゃあな」

『ちよつと、ら——』

来琥は、強制的に通信を切断すると、未だ血肉のにおいが残る倉庫へと足を踏み入れた。

倉庫の中に積まれているコンテナの上から一人の男が飛び降りてくる。

「予告通りに来たか……全く、殺されに来るとは馬鹿なやつだ。棘のないお前が、刃薔薇という棘だけもって悪あがき。やるだけやってみるよ」

「お前も、逃げないとは馬鹿なやつだな——」

新紅がにやりと笑って来琥を見やった。この日、この時刻に再び来ると、新紅ヘエリアコールで伝えたのだ。メールなどには目を通さなさそうな性格に見えるが、奇跡的に見てはくれたようだ。

誰ももう巻き込みたくない。全て自分で決着をつける。それぞれの目的が違うのだ。それぞれが達成するしかない。実との連絡がつかないということは、実はどういう形であれ、目的へ近づきつつあるのだろう。実の行動源がなんなのかは分からない。それでも、自分が達成すべきこと、達成しなければならぬことのために今動いているのだ。

だから、俺も。

「——確かに、俺にトゲはない。だが、刃薔薇は、俺自身をトゲにする!」

12、それぞれの戦い

奈美の下を飛び出してからもうすぐ一週間。一人、川辺で亜里去は佇んでいた。この場所は好きだった。数少ない本当の自然を感じられる場所であり、水の音を心の中まで流れていくような感覚を覚えることができるからである。

亜里去は知らなかった。実との連絡が途絶えたことを、来琥が一人、桃斧槍に挑みにいったことを。

「三年ぶりか、鈴嵐」

本当は、この場所を汚したくはなかった。でも、ここなら、自分の本当の力が出せるとも感じていた。

「アンタを倒すわ……殺陣椿！」

亜里去は、相子を尾行することで、殺陣椿の位置を確認した後、風に乗せてここに呼び出す文面を殺陣椿に送りつけたのだ。殺陣椿は、得物を持って現れた。

亜里去には、もう壊れた心も迷いもなかった。ただ自分の目的を達成させる。それだけだった。それ以外、自分にはできることがなかったし、逆に、自分にしかできないことだと思っていた。

亜里去は、鈴嵐を握りしめた。

カナの下に、鈴嵐と殺陣椿が戦闘を開始したという情報が舞い込んだのは、ほんの数分後のことだった。カナはその確定情報をつつこく確認したが、結果は変わらなかった。カナは情報が絶対的なものであると確信した瞬間、端末を落としてその場にうずくまった。「どうしよう……みんな……みんながばらばらになっちゃうよ……」

今まで一緒に戦ってきたのに。不安になったことも、笑いあったことも、何もかもが過去の産物に、いや、元々そんなものが存在しなかったと告げられたような気がした。このまま、もう四人そろって

とがなくなってしまうのではないかとすら考えてしまう。

「いたぞ、超能力者だ！！」

その声に顔を挙げたカナは視界の中にアメリカ人の姿を捉えた。その声に反応してアメリカ人が徐々に集まってきているのが確認できた。カナは能力的にWUSUには敵わない。カナの能力は、エネルギータイプの演算^{リフレクト}反射しかできないのだ。実体を持つ銃弾は跳ね返せない。そもそもカナの能力は、一度体内に吸収した後、そのエネルギー量を増幅させて跳ね返すというものである。銃弾など、反射や吸収以前に、貫通してしまう。

カナは当然、逃げるという選択肢以外与えられなかった。

実は研究所の中に入り、右手から火を出現させる。こちらを見ていたのは、二人。一人は男、一人は少女。男の方は以前、ある女と共に亜里去に接触していた男だ。

「まったく、遅いよ、お兄ちゃん」

「なるほど、まだ肉親がいたわけか……」

男がこちらに向かつて右手に握られた刃薔薇の銃口を向ける。左手に握られているのは恐らく殺陣椿だろう。元々そこまで刃渡りが大きくない刃薔薇と比べてさえ短く感じる刀身と、その根本部分で存在感を存分に発散させていることから、そう考えられる。

「妹に手は出さないでもらう！！」

実はそう言いながら右手の火球を、出力を強めて撃ち出す。男はその火球をまるで演劇のようにその火球をよけると、実へと銃弾を放つ。実はその銃弾を部屋の外に出てやり過ぐすと、計六つの火球を男に向けて連続で飛ばす。男は最初の火球を殺陣椿の盾で凌ぐと、すぐにその殺陣椿を大剣型に変形させ、床に突き刺して両足を地面からはなし、脚部を狙った三発の火球をかわすと、殺陣椿を空中で変形させ、降りた先に待ち構えるように突き進んでいた火球を盾で無理やり押し込み、残り一つを刃薔薇でいなして、実へと走り出した。

「お兄ちゃん!!」

妹、価帆が実へと刃薔薇を投げ渡す。実はそれを受け止めると、すぐに男に応戦する。しかし、実は元々能力一つでやってきた身だ。基本的な銃撃の作法こそ身につけているものの、剣術など専門外だ。握っただけでも、銃との違いは顕著に表れていた。実が剣を握ったところで、できることなど、力技で押し込むことくらいだった。無暗やたらに剣を振えば、こちらが無駄に大きな隙を作ることの原因にもなりかねない。しかも、こちらは内部に銃を仕込んだ刃薔薇一本だけに対し、男の方はその刃薔薇と、剣主体としている殺陣椿の異種二刀流だ。向こうは剣術も相当な鍛錬を積んでいるだろうし、さらには体術さえもかなりのものであることは、先ほどこちらが連続火球を映画さながらにかわしてみせたことが証明していた。

「威勢いい割には、接近戦は大したことないな!!」

そう言いながら男が連続で剣を叩きつけてくる。それも力任せに振ってくるのではなく、こちらが刃薔薇を握れなくなるように手を振動でしびれさせるつもりだろう。そして、斬撃をかわすには至らなかった実は、男の思惑通りに、刃薔薇で受け止めざるを得なかった。接近戦においては、軽量で小回りの利くハンドガンよりも、相手に直接畳み掛けるナイフの方が強いと言われている。それは今の戦いでも同じことだ。

「お前にはその程度の力しかない!! 真に強い者は、たとえ使ったことのない武器を前にしても、臨機応変に対応するものだ!!」
遂に実の刃薔薇が弾かれ、男の殺陣椿が振り下ろされた。

桃斧槍、新紅と対峙した来琥は、刃薔薇を握りしめながら走り出した。今ここにある五神斬は刃薔薇と桃斧槍のみ。予想通り、暴走はない。これなら、桃斧槍とも対等に渡り合えるはずだ。闇雲に力を振る暴走ではできないことも、理性を十分に保っている今はできる。来琥は新紅に向かって刃薔薇を振り抜く。新紅はその刃を桃斧槍の斧部分で受け止める。

「そんなみみつちい得物で、俺に対抗しようってんのか!!」

「そのつもりだ!!」

来琥は火花散る二つの刃のうち、自身が握る方の刃を離すと同時にその体を地面へと倒れさせて振りぬかれた桃斧槍の斧部分の刃をかわす。新紅が振った桃斧槍を頭上で一回転させて、槍を来琥へと突き出してくる。来琥はその身を転がして槍をかわすと、地面に突き刺さった槍が抜けるのとはほぼ時を同じくして来琥は立ち上がり、新紅へと刃薔薇を突き出す。新紅はその突きをかわして桃斧槍の槍を来琥へと突き出す。来琥はその突きを回ってかわそうとしたが、刃が来琥の体に触れた。貫通することはなかったものの、脇腹のごく一部を抉り取った。

来琥は傷口と口から吐血する。その痛みに耐えきれずにその場に倒れこむ。腹に力を加えようとすれば、痛みと共に血が流れ出るのを来琥は感じていた。一瞬ぶれた意識を必死に戻す。来琥はその一瞬とはいえ集中力を切らしたことを恥じると共に、歯を食いしばった。新紅がその口元を、まるで死者をしつこくいたぶる直前のようににやけさせていた。それは、勝利を確信した顔だった。新紅は頭上で桃斧槍を力強く振り回す。そして、その槍の矛先をこちらに向けて、それをその向きのままに直進させてきた。来琥は右手の刃薔薇を握りしめた。握られた刃薔薇は、その刃を開いていた。

WUSUのミーティングでは、終始ざわめきがおさまらなかった。それは、今回のミーティングにおいて提案されたことだった。具体的な内容を言えば、独自に疑似五神斬を創り、しぶとく生き残っている超能力者、及び五神斬所有者に対抗するというものらしい。その案に対し、「疑似五神斬を創れるならば」と賛同者が続出したが、そのミーティングに参加していた実穂は立ち上がって異を唱えた。「ちよっと待ってください!! 疑似五神斬を創りだすのは、そう簡単なことではないし、何より、それを急ぐ必要は——」

「針現、お前に口出しする権利はない」

賛同者のうちの一人が実穂に向かって反論するなど遠回しに言う。

「そんな理不尽は認めません。私もここにいます以上、口を出します。口を出すこと権利が認められているからこそ、私はここにいます！」

「黙れ、この日本人が！」

賛同者の一人が声を荒げた。現代において、国籍によって態度などを変えることは、差別行為として国際的に取り締まられている。しかし、このミーティングは違った。今ここにいるのは、実穂を除いて、日本語こそ話していても、全員が南米出身だ。今ここに、差別などという概念は存在せず、実穂の味方となる者は誰ひとりとしていなかった。

「針現、お前は日本人であると同時に五神斬も持っており、超能力者だ。お前は、我々にかくまわれている、ということをお忘れな」その言葉に対して、実穂がこたえられる言葉は一つしか存在しなかった。

「………はい」

しかし、やはり実穂は納得してはいなかった。五神斬を創ることは、技術的に難しいことであることに変わりはない。たとえこの案が決定したとしても、それを現実問題として考えた時、実行は難しくなってしまう。上の者はただ決定するだけなのだ。下で動く者達の苦勞を考えたりはしない。

WUSUは所属国に関しては階級制度を取っている。階級は基本的にその戦績において上がるものであるが、基本的に大佐以上の階級の者は、親が軍人であり、それを継いだためにその階級についていたというものがある。両親が准将、大佐という階級についていれば、それだけでその子供にも力があるということによって優遇されるのだ。もちろん、そうした優遇された環境によって、名前だけが立派な者も少なからずいるのだが。

「では、我々は科学者に召集をかける。針現」
「はっ！」

「お前の桜鎚は、これから一週間の間、我々が預からせてもらう」
その顔は、こちらを貶めようとしているのが、どんなに疎い人間でも分かるくらいに歪んでいた。もしここで自分が桜鎚を渡してしまえば、向こうはそれを別の人間に渡す可能性がある。そうなれば、日本人である自分はWUSUとして活躍する必要はなくなる。当たり前だ。少なくとも現在敵対している日本の国籍を持つ者が、重要な武器を持っているからこそ引き入れたのだ。それを奪ってしまったのは、実穂の利用価値は一つしかなくなる。しかも、それだって十分に足りていることなのだ。だからこそ、切り捨てる。取り上げたら、秘密裏に処理するなりするのだらう。

「お断りいたします」

「何だと………？」

「五神斬は契約者がいて初めてその構造を明らかにします。契約者がいなければ、ただの固形武器です。特に桜鎚のような武器は、わざわざ私のを拝見せずとも、概形が判明しているのですから、複製は可能でしょう。もっとも、桜鎚は五神斬の中では弱い部類ですから、量産したところでどれほどの戦果を挙げられるのかは分かりませんかね」

今、実穂はこの上なく幸せを感じていた。自分が言いたいことを一方的に言うことのできるこの優越感。自分の方が上にいるという感覚。目の前の上官が束になって襲ってきても、跳ね返せる自信が桜鎚、針現実穂にはあった。

ミーティングルームに起こったざわめきは、実穂の勝利を証明するために起こった者と同義だった。

「もうよい。本日はこれにて解散とする」

それによって全員がどよめきおさまらぬまま、まばらに動き出した。実穂もまた、その中で黙って歩き出した。

おそらく今回のミーティングは、実穂の桜鎚を利用すべく開かれたものだ、実穂はほぼ確信していた。議題の中心となった今回の五神斬量産案も、はじめから仕組まれていたものだったのだらう。

実穂は一応、WUSUにおいて、日本においての現場指揮官を務めている。しかし、現場指揮官など、実際は腐るほどいるのだ。現場指揮官が集まったの作戦立案を行うことはあれど、日本人の一現場指揮官をわざわざ重役ばかりが集まるミーティングに召集をかけるはずがない。

もうWUSUは、自分を一兵士としてさえ見ていない。ただ自分たちに非常に有益な武器軍のうちの一つを所持している日本要人に過ぎない。いや、むしろ要人とすら見ていないかもしれない。

ミーティングルームを出て肩の力を抜くことができた実穂に、アリスという別の重荷がのしかかってきたのは、言うまでもない。

13、始まり告げる復讐劇

カナはWUSU構成員の攻撃から逃れるため、アメリカ人たちの視界から外れた場所に作った地下通路に逃げ込み、その入り口を閉鎖する。もちろん、力でこじ開けることを防ぐためのものであるが、床の色と全く同じ色にしてあるため、入口をカムフラージュすることにも役立てている。

地下通路に進んだカナは数十メートル間隔で通路上部に設置された電灯に一度目を細めたが、すぐにその光源から目を背け、一本道の通路の壁に手を振れる。指紋認証の後に扉が開き、その先に一つの部屋を露わにする。カナはここから逃げるために、二重にも三重にも仕掛けを施していた。カナは部屋に入ると、背後の扉を閉める。そして、用意された台座に立つ。台座は人の体重を検知すると、網膜スキャンを行い、部屋に用意されたもう一つの出入口へと自動で動き出す。網膜スキャンのためのセンサーは、カナの身長に合わせた位置で行われるため、身長が高い者は網膜スキャン認証を正常に受けることもできないのだ。そもそも、台座の体重測定機能において、四十五キロを突破した場合、網膜スキャンは作動すらないのだ。つまり、台座は微動だにしなくなる。台座に乗らずにこの部屋を突っ切ろうとすれば、床一面に設置された無数の鋭針が全身を貫くことになる。

部屋を出たカナはとにかく走り、倉庫から距離を稼いだ。最近ここにあることに走っている気しかないカナは、またも走り続けなければならぬ運命の残酷さを一度は呪ったが、そうしたところで状況が改善されるわけではないということは分かっていたから、その事象に対して文句を言う気はなかった。

「早くみんなに知らせなきゃ……」

来琥が一人で桃斧槍にたった一人で向かっていたことを伝えなければならぬ。身体、超、両能力では、桃斧槍どころが、ほとんどの

超能力者とも互角以上の戦える気はしてなかった。だからこそ、みんなへと知らせ、応援をもらおう。亜里去が実、どちらか一方だけでも連絡がつけば、来琥は死なずに済むかもしれないのだ。

カナが、亜里去と殺陣椿が戦闘を開始したことを知ったのと、先ほどカナが抜けだしてきた部屋にアメリカ人の悲鳴が響き渡ったのは、その十分後のことである。

亜里去は殺陣椿に向かって鈴嵐を構えた。

「羅絶対駕、君の真剣勝負を受けよう」

「覚悟！！」

真剣勝負を所望した覚えはなかったが、もし向こうがそれを拒否しても、亜里去は無理やり押し付けて戦闘を開始しただろう。対駕に向けて鈴嵐を振り、その空調操作機構から真空刃を発生させる。対駕はその真空刃を、自身の前に殺陣椿を構えて防ぎきると、ゆっくりとこちらへと歩を進めてきた。亜里去は尚も真空刃を放つが、対駕はそれらをものともせず盾で防ぐ。その歩みは止まらない。それは、王者の風格さえ漂わせていた。

遠くからでは拉致が開かないと感じた亜里去は、接近戦に持ち込むことにした。空調操作機構を停止させ、鈴嵐を完全なる鞭にする。と、対駕へと走り出す。対駕の歩みは止まらない。空調操作機構なしで風のように走る亜里去とは、非常に対照的な姿だった。亜里去が横薙ぎに払った鈴嵐を、その巨大な盾で何の造作もなく防ぐと、次いで行われた攻撃を体を回してかわし、その回転のままに斬りつけてくる。亜里去はその斬撃を横転してかわし、立ち上がると同時に鈴嵐を振り上げる。対駕が盾を掲げるが、その威力に盾を持っていかれ、その無防備な体をさらけ出す。亜里去は鈴嵐を袈裟懸けに振り下ろすと同時に真空刃を対駕へと飛ばす。

しかし、対駕はその崩れている体勢の中でも回避の策を講じていた。真空刃が放たれると知ったと同時に、右足を軸にしてその体を亜里去から見て左方へとずらしたのだ。

「そんな……!!」

真空刃をかわした対駕は、しっかりとその体勢をとり戻したかと思えば、左足を一気に踏み込むと同時に殺陣椿を大剣型に変形させ、それを亜里去へと突き出してきた。

亜里去は、対駕の殺陣椿の使いように翻弄されつつあった。殺陣椿が持つ力を最大限に活かした戦い方である。相手から浴びせられる攻撃を、時に盾で防ぎ、時に殺陣でかわす。盾剣状態の欠点であるリーチの短さを、僅かな隙に大剣型に変形させることで補う。

これが、殺陣椿、羅絶対駕の強さ……!!

亜里去は突きをかわそうとして体勢を崩し、地面に尻餅をついた。体勢を崩したことによって、結果的に突きをかわしたが、その体勢に大きな隙がついていたのは誰の目にも明らかであった。

「その程度か!!」

対駕がそう言うと同時に、右足を勢いよく突き出し、空中へと飛び出す。

「お前の復讐劇はここで終わりだ!!」

「アンタが決めるなあっ!!!!」

亜里去は周囲の空気を自身の背中と地面の間に溜めこみ、一気に膨張させる。膨れ上がった空気は破裂の形で亜里去の体を押し出し、対駕の斬撃から逃れる。地面で数回転しながら十メートルほどの距離を取り、体勢を立て直す。対駕が地面を蹴って亜里去へと一気に接近してきた。亜里去は真空刃を放ったが、斜め方向に前転してかわし、すぐにまたこちらへ走り出す。

対駕が殺陣椿を斜め方向に切り上げる。ほぼ水平斬りに近かった。亜里去はなるべく距離を取る形で転がり込んで回避すると、立ち上がりと同時に真空刃を発生させる。対駕は真空刃を盾で弾くと同時に、殺陣椿に雷を纏わせる。亜里去が再び放った真空刃を先ほど同様に盾で弾くと、殺陣椿の刃先から雷を発射する。奇襲同然の攻撃に亜里去が対応できるはずもなく、その雷を諸に食らう。

亜里去はこの雷を浴びるまで気づかなかった。対駕はここに至る

まで、超能力を一切使っていなかったことに。亜里去は、接近戦においての動体視力は、今までの戦闘経験からある程度、少なくとも戦闘経験のない者よりは優れていると自負している。それはもちろん虚勢ではなく、先ほどのうい見れば、咄嗟の閃き、判断力も含めて、接近戦において、遅れをとってはいない。

しかし、それは向こうが能力を使わない、旧来と同様の戦い方であつたからこそであろう。こちらも向こうも、それまで両者とも攻撃を食らわず当てられずの状態であつたのだ。それだけ、能力による戦力補正が大きいということだろう。

亜里去の能力は未来予知であるため、戦闘において使える能力は有していない。それはつまり、戦闘に使えるのは、今まさに握っている鈴嵐だけなのだ。更に、鈴嵐は系統で表せば鞭。基本コンセプトが剣である殺陣椿との間においては、罅迫り合いを行うことができない。向こうは数度の打撃を受けても、十分な訓練がされているゆえに、そこまでダメージはない。しかし、剣となれば、場合によつては一度の攻撃で相手を屠ることも不可能ではないのだ。

対駕の能力は、体内に流れている電流を制御し、脳内で発生、流通している電流の余電力を加圧、膨張させて体外に放出するものだ。電流は人間の体内で無数に発生しているため、実質、エネルギー切れがない。脳内で流れている電流とはいえ、あくまで体外に放出するのは脳に情報を送り込むには必要のない余った電流であるため、思考回路にも問題はない。

雷を浴びた亜里去は、完全に身動きが取れなくなっていた。体中に電気が走り、足や腕を中心に体の力を抜き取られるような感覚。両手足の感覚はほとんどなくなっていた。電気によって、感覚器官の一部が一時的とはいえ麻痺しているのだ。これでは、戦闘どころか、立ち上がることもすら難しい。戦闘に特化し、何年もの間訓練を積んでいるような者ならば、雷を浴びても、ある程度立っていることはできるかもしれないが、亜里去はあいにく、軍人ではない。少なくとも雷に対抗するための訓練など、行っているはずもない。

「虚勢は人としても、戦士としても必要だ」

地面に倒れて身動きができなくなっている亜里去へと、対駕が一步、軽い足取りで近づいてきた。対駕の右手に握られている殺陣椿の刃は、対駕の中から溢れ出た電流を纏われている。

「だが、自己の力とあまりにかけ離れた虚勢は、身を滅ぼす」

対駕が亜里去に向けた殺陣椿の刃先には、雷が集まっていた。

新紅が来琥へと直進させた桃斧槍は、その進路を阻まれた。来琥は、握った刃薔薇を銃形態、つまりはその刃を開いた状態で自身の前に持っていていき、桃斧槍の槍を剣形態に変形させる過程の状態の刃薔薇で挟み込んだのである。それは、刃薔薇にしかできない技。相手の得物を、変形の過程において挟み込み、攻撃を遮断する。古風な言葉を使えば、白刃取りと形容するべきだろう。振り下ろされたのが剣ではなく槍、受け止めたのは両の掌ではなく根が繋がった双刃。違っている部分はそこだけだ。来琥の窮地においての閃きが、彼の命をつないだのだ。

来琥はその槍を抑え込んだまま、自分はその矛先から逃れ、床だけとなった矛先をそのまま直進させる。槍が倉庫の床に突き刺さり、新紅の動きが止まった。しかし、来琥が再び新紅へと斬りかかるほどの時間は与えられず、脇腹の痛みを抑えながらよろよろと立ち上がった来琥とほぼ同時に、床から槍が抜ける。勝負は、来琥がハンデを背負った状態で振り出しに戻った。しかし、来琥が背負ったそのハンデは大きかった。一撃として攻撃を食らっていない新紅に対し、脇腹を槍によって決られた来琥は、痛みによって、その思考を完全に固定することはできなかった。数秒に一度、視界がぼやけると共に意識が遠のく。精神力でその体を支えている来琥は、刃薔薇を握りしめることで精一杯だった。

「てめえ、この前いろいろ言ってたようだけどな、てめえはその力を自在に操ることもできてねえだろ。そんな状態で、俺に説教がまそうなんて、偉そうな口きいてくれんな」

新紅が桃斧槍を肩にかけながらよろめく来琥へと、勝者の口調でそう言った。だが、来琥はまだ、この戦いを諦めてはいなかった。

「……たしかにそうだ」

ふらつく体を抑え、どうにか両足を地面に固定して、ゆっくりと来琥は頭を挙げた。

「けど、お前はその力を自分のためだけに使う」

「前も似たようなことを言ったな。俺は、てめえも私欲のために刃薔薇^{それ}を持つてるっ言った」

「ああ。だが、俺は、五神斬の破壊によって、守れる命があるから戦っている。五神斬があることによって起こりうる未来を変えるために……消えるはずの命を保つために!!」

来琥は自分自身の記憶を見た。過去を見られる能力。この能力で、ここまでの戦いにおいての桃斧槍の動きを正確に把握する。攻撃パターン、攻撃時の体重の移動、目線、攻撃のスピード。

「それが偽善や押し付けた優しさだとしてもかあ？」

「構わない!!」

来琥はその意識を自身の気力によって完全に回復させた。視界が一気に開ける。その視界の中に捉えた新紅へと、一度はその力が抜けて倒れこんだ足で地面を蹴って走り出す。新紅が桃斧槍を振り、その槍を突き出してくるが、来琥はその突きをバレーさながらに回って回避する。今度は斧部分が迫るが、来琥はそれを刃薔薇で受け止め、鏑迫り合いの形に持つて行った。

「だからこそ俺は、お前に勝つ!!」

その言葉を聞いて、新紅が「やっと面白くなってきた」とでも言わんばかりの笑みを見せた。それは、先ほどまでのように、勝者としての確信の笑みや、死者をいたぶる狂気の目ではなかった。ただ純粹に、戦いを楽しんでいる顔だった。

おそらく、これが磯城革新紅の素なのだろう。先ほどまで来琥に向けられていた言葉も、表情も、全ては戦いを楽しむ、戦いに悦びを感じるがゆえの行動なのだろう。

自分が戦う理由があるように、新紅にも、戦いを楽しむという理由があつたのだ。その内容こそ滅茶苦茶であっても、自分の感情に逆らわない、ある意味素直なその理由に、来琥は何故か安心していった。人の子ではないような性格の持ち主ではあるが、それでも、人は人である、ということが分かったからだ、と来琥は一人、心中で納得していた。

「俺はてめえなんかにや負けねえよ」

その目は狂つたように見開かれている。その口は最高の悦びを噛みしめている満面の笑み。そこに嘘偽りは一切なかった。向こうは、戦いに全力を傾け、本気を見せつけている。ならば自分は、挑戦者の立場である以上、それに応える必要もある。

「桃の花言葉は、天下無敵だあ！！！！」

「上等！！」

二人の刃が交わった。

14、兄妹

実に振り下ろされた殺陣椿は、彼の体に届くことはなかった。実が何らかのアクションを起こしたわけではなかった。実の目の前には、ぎりぎり視覚で認識することができるほどの透明な防壁が地面から半円状で広がっていた。実の全身を完全に覆ったその防壁に、帝の殺陣椿が弾かれ、帝と実との間に距離が空いた。周囲の防壁が消えると共に、実は火球を帝へと放つ。いや、むしろ逆で、実が火球を飛ばすと同時に、周囲の防壁が消えたと言っていていいだろう。帝が火球を殺陣椿で防ぎ、防壁の発生者の一方の可能性を否定すると同時に、一方の可能性を確信した。帝は、実から視線を外し、価帆の方へと視線を向けた。

「その技術力に加えて、ネイティブ・サイキッカー純粹種の超能力者……全く、いつもいつも驚かせてくれる」

生まれながらにしての超能力者は、ネイティブ・サイキッカー純粹種の超能力者と呼ばれる。ネイティブ純粹種は、人工的な超能力者と違い、理論づけることのできない特殊能力を持っている。その代表例の一つが、たった今価帆が発動させた反射防壁だ。ガイド・リフレクト実体を持つ物、持たぬ物問わず、触れたものを同一角度、同一圧で跳ね返す、人工的な超能力者でいえば、カナや新紅と言ったリフレクトタイプ演算反射系に分類されるものだ。

ネイティブ人工と純粹種の決定的な違いは、所持する能力数にある。人工は、基本的に能力は一つしか持つことができないのに対し、ネイティブ純粹種は科学的理論証明が現代において不可能な超常能力をいくつも持つことができる。

「君は、殺すにはもったいないくらいだな!!」

そこで実は右手を突き出し、その掌から炎を放出する。帝が数歩下がりがりながらその炎を殺陣椿で受け止める。しかし、実は炎の放出を止めなかった。大気中で激しく燃えている炎を、価帆が念力を送ってその動きを捻じ曲げる。発射部分から拡散方向に広がって、広範

罫に攻撃する物だ。それを純粹種ネイティブの持つ超常能力の一つ、超念力サイコネシスである。超念力によってその動きを強制的に変化させることで、変幻自在な動きを行って動き出す。炎が帝の周囲を取り囲み、各方向から一斉に襲い掛かる。四方八方からの炎に、帝が包まれる。

「さすが兄妹、攻撃に関しての連携も十分過ぎるな！」

帝が炎の中から飛び出してきて、実へと斬りかかってくる。実は振り下ろされた刃薔薇をかわして価帆の前に立つ。

自分しか守れる者はいない。他の誰にも任せることできない、自分自身への使命。

実は火球を帝へ向かって飛ばす。その火球の一部を価帆が超念力サイコネシスで操る。多方向から押し寄せてくる火球を前転一つで全てかわすと、一瞬のうちに実まで駆け寄り、殺陣椿の刃先を実に、開かれた刃薔薇の銃口をカナへと向けていた。

大剣型に今の僅かな時間のうちに変形させ、ある程度の距離を取った状態で実をいつでも屠れる体勢。銃口の標準も、価帆の眉間から全くぶれることがない。これが意味するところはつまり、価帆と実両方の動きを封じていることだった。一方が動き出せば、もう一方が犠牲になる。価帆が動けば実の首が刎ねられる。実が動けば、価帆の眉間を銃弾が貫く。

もはや、今の実と価帆には、打つ手がなかった。

亜里去に向けられた殺陣椿の刃先から、青白く光る電流が放たれた。

しかし、亜里去の体に再び雷が突き刺さることはなかった。途中で誰かに目の前を塞がれ、そこで消えた。自分を庇ってくれた者は、どうやら何ともたいようだ。それどころか、雷そのものが消えたようにも感じた。自分の目の前に立っているのが、長い髪から女性であることは分かったが、それ以外を認識することができないまま、力がふっと抜けてしまった亜里去は、そのまま意識を閉ざした。

亜里去の目の前に現れたのは、鈴嵐と殺陣椿の戦闘が開始されたことを知って駆け付けたカナだった。カナは対駕の前に立ってその雷を吸収した。反射はしない。する必要がなかったからだ。カナは今、力ではなく、言葉で解決するつもりだった。なぜなら、目の前のこの男は、カナがよく知る男だからだ。

「やっと見つけた。三年かかったよ」

「俺はもつとかかると思っていたがな」

カナの目の前でそう皮肉を言った対駕は、今の今まで亜里去に——今この瞬間はカナに——向けていた殺陣椿を降ろした。カナは、一度は安心したが、それでも気を抜くようなことはしなかった。亜里去は戦闘の疲れが出たのか、気を失ってしまったが、カナにそのことについて考える余裕はなかったし、あつたとしても考える気はなかった。

「答えて。なんで殺陣椿を持ったの………？」

「俺が二番目に見つけた武器だからだ」

「そういう意味じゃない！！………質問変えるよ。なんで五神斬を持ったの？」

「力が必要だった………ただそれだけだ」

嘘だ。おそらく、嘘だ。力が必要なことに偽りはないかもしれないが、そもそも対駕は、体内電流の放出という超能力を元より持っている。力は元々あるのだ。わざわざ更に大きな力を持つ必要はないのだ。

対駕はそれ以上言おうとはしなかったが、カナのきつい眼差しを受け続けて観念したのか、呆れをお供につけながら口から零すように告げた。

「………小さいころの命の恩人を守りたいだけだ」

「じゃあなんで亜里去の鈴嵐に固執してるの？」

「あまり長々と話はしたくないな」

「私は全てを知りたいの。だから教えてよ。お兄ちゃん」

来琥の刃薔薇と新紅の桃斧槍が何度もその刃を交える。交わる度に響く金属音が、中世の戦いを彷彿とさせる。来琥は脇腹の痛みを抑えながら戦っているために、時折鈍りかける意識と感覚をどうにか保ちながら戦っていた。突き出される槍をかわし、振り抜かれる斧を刃薔薇で受け止める。しかし、斧を受け止めるには、どうしても片手では弾かれてしまう。それほどの重量感があるのが桃斧槍だ。

桃斧槍は、重厚なそのフォルム通りに、一振り一振りが重い。しかし、その重さを引き立てているのは、ほかでもないその扱い回しだ。重量感と共に、振った時のスピードは、五神斬の中でこそかなり遅い方ではあるが、一般的に見れば、そのフォルムからは想像もできないほどに速く振ることができる。刃薔薇や鈴嵐は、小回りが利く、連続で攻撃するタイプであり、その攻撃速度も速いのが特徴である。桃斧槍は、回しながら攻撃することによって、遠心力を利用して振り回すことそのものに使う肉体的エネルギーを抑え、叩きつける時のみ力を込めることができる。

「桃斧槍と刃薔薇じゃ、格が違うんだよ!!」

勢いよく叩きつけられた桃斧槍に両手持ちした刃薔薇で対抗するが、それでも足りずに押し切られ、数メートル後ろへと足を滑らせる。開いた距離を利用して刃薔薇を開き、その中に眠っている銃口から銃弾を一発発射する。しかし、こちらが刃薔薇を開くと同時に片足を振り上げた新紅は、放たれた銃弾を足裏で反射する。

「ぐはあっ………!!」

来琥の脇腹に激痛が走る。銃弾が来琥の脇腹、正確には先ほど挟まれた傷口を諸に通るコースで直進してきたのである。その痛みに、視界が揺らぐ。脳に回る血が少なくなっているのか、思考回路に渋滞が起こる。一瞬晴れた視界で、新紅が桃斧槍の柄部分が短くされていた。それが意味する動作は一つしかない。

「言っただけえ………わざわざ殺されに来たなってなあ!!」

新紅がそう言い放つと共に桃斧槍を投げつける。迫ってくる桃斧槍

を避けようと来琥はふらつく足を動かす。それは、正確には避けることを第一として動かしたものではなかった。

来琥は迫る桃斧槍をかわすのと同時に、新紅へと走り出した。新紅へ向かって刃薔薇を振り抜く。しかし、刃薔薇は新紅の体には入っていかず、足裏で受け止められ、そのまま跳ね返される。来琥はそれで体勢を崩すことなく、跳ね返された勢いで逆回転して刃薔薇を振る。やはり足裏で受け止められ、弾き返される。来琥はまだ諦めてはいなかった。再び先ほどの逆回転を行って刃薔薇を叩きつける。案の状、刃薔薇は足裏で跳ね返される。

だが、これを狙っていた。

来琥は、投擲後に契約者の下まで戻ってくる桃斧槍に目を向けた。刃薔薇を銃形態——用途としては、刃薔薇を開いたということになるが——にして桃斧槍へ回転を利用して近づく。そして、刃薔薇と桃斧槍が重なる瞬間、来琥は剣形態へと刃薔薇を変形させた。もちろん、その間には桃斧槍がしっかりと挟まれていた。来琥は回転を利用してそのまま遠くへと桃斧槍を放り投げた。

桃斧槍が音を立てて倉庫の端で止まった。

「てんめええ！！！」

新紅が激昂して殴りかかってくる。来琥はこの新紅の浅はかな攻撃を狙っていた。来琥はその殴打を回避すると同時に、脇腹を斬りぬける。皮肉にも、来琥が挟まれた部分とほとんど変わらない場所を。
「ぐっ……」

新紅のうめき声を背に聞いた来琥は、すぐに振り返って新紅の背中に蹴りを食らわした。新紅がその衝撃に吐血する。来琥は刃薔薇を銃形態に変形させ、銃弾を放つ。銃弾は新紅の右肩に吸い込まれるように貫き、遠くへ飛翔していった。その銃弾による衝撃と痛みを新紅が全身を持って受け止めている間に、来琥は一気に新紅へと詰め寄り、低くした姿勢から体を伸ばし、それと同時に刃薔薇で一直線に薙いだ。

新紅が体勢を崩す。もう体勢を立て直すことができそうにはなか

った。理由は一つ、新紅が気絶したからである。

「俺も言っただはずだ……俺自身を、棘にするってな」

完全に身動きが取れなくなってしまうていた実と価帆は、二人同時に逃げ出す機会を伺っていた。これは、全てがタイミングの勝負。帝の腕が上げっぱなしで疲労が蓄積するタイミング、左手に持っている刃薔薇の標準がずれるタイミング。二人が同時に作戦行動を開始するそのタイミング。

二人の間で誰にも見ることでできない作戦考案が行われてから数分後、帝が数歩下がり、その両手それぞれの得物を握ったままに力を抜いた。

「ゴー」

そうなるときこそ、実と価帆が狙っていた展開。実は一気に走り出し、価帆は自分と実の周辺に反射防壁を構築する。その防壁の力も相まってか、実は帝へ普通に殴るよりもずっと強い殴打をお見舞いした。帝がその衝撃によるめいた一瞬の隙をついて、実と価帆は全力で走り出した。研究よりも命を優先させるのは当たり前前の行為と言っていい。今の時代、研究成果を上げようとするよりならば、人は直感的、本能的に生という長くあり、二度と手に入らないものを求める。

「価帆」

「何？」

価帆に背を向けたまま走り続ける実は、本当にすぐ後ろにつけている価帆へと、優しく言った。普段の堅牢なイメージとかけ離れた。人らしい実の姿が、そこにはあった。

「研究所は、いつか俺が取り返す」

「もちろん、そうしてもらうよ」

価帆が面白そうに笑みを零したのに対し、実もまた、価帆に背を向けたままに笑みを零した。

来琥は、気絶した新紅と十数メートルの距離を置いたところに寝かされている桃斧槍の内部に取り付けられた装置を作動させる。そこに現れたのは、テンキーと四ケタの数字入力を求めるもの。来琥は構わず、次の数字を入力した。

「0015」

その数字は、五神斬という意味での「5」、そして、桃斧槍の製造番号一番を象徴する、「001」を組み合わせたものである。製造番号は、桃斧槍、殺陣椿、桜鎚、鈴嵐、刃薔薇の順番に、数字が割り振られている。

その数字を認証したプログラムが、桃斧槍と、その契約者、磯城革新紅との間に、視覚、触覚化された一本の赤白い糸が現れた。

「これが……契約糸」

契約者と五神斬とを繋ぐ、普段は見ることも触れることもできない契約の証。触れることができるこの状態ならば、この糸を断ち切つて、契約を強制的に解除することができる。

「刃薔薇を持つて、桃斧槍の契約を断絶する！」

そう言つて、来琥は契約糸を刃薔薇によつて切断した。

契約を強制的に破棄したものに訪れるのは、契約成立後の記憶、もつと言え、五神斬に関する事柄を全て忘れることになる。それは、精神的な記憶だけでなく、肉体的な記憶もそうだ。つまり、五神斬を手にしてから鍛えた体は五神斬入手前に戻り、五神斬を手にしてから負った傷は五神斬入手前に戻る、というものだ。

もちろん、何かきっかけがあれば、精神的な記憶に限り、復活する。

来琥は、己の務めの第一歩を踏んだ気がしていた。契約者を失つた桃斧槍を持つて、ゆつくりと歩き出す。桃斧槍と触れた時に契約が成立しないのは、すでに刃薔薇との契約が行われているためだ。他の五神斬と同じ媒体につきたくないという、桃斧槍自身の拒絶だ。ふらつく足取りは敗者のものであったが、その歩みが止まらないことは、勝者の証明でもあった。

15、続く波乱

九月四日。八月一日から三十一日までの一か月という夏休みを経て、始業式が執り行われた。夏休みの間、何度かWUSUの攻撃を受けたものの、それ以上のことが無かったただけかもしれない。去年までと比べれば波乱の一か月だったが、夏休み前と比べれば、随分平穏な夏休みだったと言えるだろう。ただ、それでも気の休まる時はなく、常に敵の有無を警戒しながらだったために、お世辞にも羽根を心置きなく伸ばすことができた一か月とは言えなかった。

殺陣椿との戦闘によって電流を諸に受けた亜里去は、体の各部の感覚器官の完全修復のために、来琥達が夏休みの間、入院していた見舞いには、毎日カナが行ったということは、後から聞いた話だ。電気ショックによる感覚器官の麻痺は一時的なものであるとはいえ、中には後遺症が残るケースもある。浴びたのが超高压電流であれば、さすがに亜里去もどうにもならなかったのかもしれないが、幸いなことに電流が流れたのは一度、それもそこまで大きくないことが、一時的な感覚麻痺だけに症状を留めたのだろう。

連絡が取れなかった実は、夏休み前半には連絡が取れるようになり、再会も果たした。しかし、その表情は決していいものとは言えず、目的は達成できなかった、とだけ呟いて、帰ってしまった。隣のいた幼い女の子のことを聞こうとも思ったが、とてもそんな様子ではなかった。背を向けて少女と帰っていく実は、その姿勢こそいつもと変わらぬピンとしたものだったが、疲労と落胆の色が、その垂れ下がった頭からよく分かった。

そして、来琥は新紅との契約を切断した桃斧槍を、夏休みを利用して県外の山まで持っていき、そこに埋め込んだ。五神斬の暴走を防ぐためには、まず五神斬そのものを近づけないようにしなければならない。桃斧槍が離れることで、暴走の可能性は一気に減るだろう。本当は破壊したいのだが、少なくとも民間企業に持って行って

も軍事施設に持ち込んでも、取り上げるなり通報されるのがオチだ。だが、同じ五神斬の刃薔薇だからと言って、五神斬を物理的に壊すことはできない。破壊するには内部の分解プログラムを入力しなければならぬのだが、来琥はそのプログラムを知らない。だからこそ、隠す以外に方法がなかった。

二週間後に迫った浜比良高等学校学園祭、通称浜比良祭の準備に、始業式の日放課後から生徒達は忙しくなった。高校生としての学園祭、というのは来琥達には初めてのことであるために、中学の時の規模は全く違うものなのだろうと予測こそしていたが、さすがに違った。中学では、各部門に生徒を分け、その中で班分けを行って作業分担するのだが、やはりその中で怠けるものはいた。もつとも、その部門分けの際から、各生徒の適性を考慮——といっても、決定は機械が行っている——して割り振られたものなのだが。

しかし、浜比良祭では、必ず生徒一人一人に、放課後の時間を悉く潰していく仕事の表が張られている。事情なしで何か一つでもサボリ、手抜きがあつた場合は、問答無用で全教科の点数をマイナス八十点。つまり、不真面目な態度はそのまま留年への道を進むということだ。

「ラッコー、これ持つてー」

奈美が重そうにしている箱を来琥が支え、そのまま自分だけの荷物にする。この学校では、適性こそ機械が判断するが、人間関係なども考慮されている。誰との仲が良いのか悪いのか、その上で適性に合うのか。適性と友好関係、どちらかが欠けるのは誰にも心地よい気はしないだろう。

「あ、来琥君、これお願い」

来琥の姿を見つけた実穂が来琥の持っていた箱を見てその上に箱を重ねる、それによって、来琥の前方の視界は完全に箱で塞がれた。

「明日未、俺のも」

「あ、私のもお願い」

次々と持ち寄られる荷物を一挙に運べるわけがない。

「俺は運び屋じゃねーよ!!」

そう叫んで、遮られた視界のままに逃げ去るしかできなかった。

亜里去の視界は暗く閉ざされていた。意識がないわけではない。感覚器官を遮断することで、治療を行っているためだ。今の亜里去には、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感は一切閉ざされている。見ることも聞くことも嗅ぐことも食することも触ることもできない。正確には、それら全ては行うことはできるが、脳に情報が送られてこない。だから実際、他の人から見れば、目も開けているが、実際は見えない、というわけだ。食べ物全て、胃へ直接流入している。そうした治療の中、亜里去はずっと自分の敗北を悔いていた。あの時、誰かに目の前を遮られた時、自分が守られてしまうほどに弱いのだと悟った。これでは鈴嵐を手にした意味がない。元々、自分が死にたくないからあの時鈴嵐を握り、なんの対策もできないまま運命を受け入れるしかなかった。だが、今は違う。運命を変えることはできる。殺陣椿を壊せば、暴走を止めることもできるかもしれないのだ。そうなれば、来琥の目的も少なからず達成することができるのだ。

そこまで考えたところで、亜里去ははっとした。

——なんで、あいつのこと………。あんなやつ……。

赤面した亜里去の周りに誰もいなかったのは、不幸中の幸いであつたことは、言うまでもなかった。

来琥達が夏休み明け初の授業に参加している間、日本首相官邸では、日米首相の対談が行われていた。日本現首相、岡本牧夫と米大統領、ナイク・クラウト。WUSUの代表として厳重な警備の中で行われた対談のプログラムの内容は、やはりWUSUが日本に行っている超能力者掃討作戦だ。岡本首相はこれを厳しく言及したが、

クラウト大統領は、それに対して、軍事力を対等にするために必要不可欠、避けては通れない事項だと反論した。世界中の国を見ても、日本の超能力者の数は異常だ。軍隊を持たないという五百年近く前の日本国憲法第九条に関する事項を変更してないゆえに、政府は屁理屈を通して超能力者を大量に生産したのだ。国家戦力としてではなく、一人一人の人間としての成長、等と綺麗後を吐きながら。

対談はそうした内容で時間一杯まで行われた。それだけなら、そこまで人々の記憶には残らなかったかもしれない。問題は、対談直後、岡本首相を含めた首相官邸の者達による見送りの時だ。両者が堅い握手を交わし、クラウト大統領の手が岡本首相の手から離れた時。

クラウト大統領の眉間を銃弾が貫き、クラウト大統領の体はその衝撃の勢いで地面に倒されると同時に、辺りに銃声が響いた。クラウト大統領は即死だった。すぐに周辺にいたWUSUの護衛兵が周囲の警戒とクラウトの生死を確認したが、意味はなかった。

そして、クラウト大統領の抹殺を目の前で見た岡本首相は、その事態に衝撃が走り、泡を吹いて倒れた。すぐに病院へと搬送されたが、ショックによる心肺停止状態となり、それから小一時間で、死亡が確認された。ショック死でもおかしくはない。数分前まで対立姿勢とはいえ言葉をかわし、数秒前にはその手を握り合った者が、一瞬のうちに、呆気なく死んだのだ。画面越しの紛争やデモの映像でもなく、映画やドラマでもなく、現実として、目の前で人が、寿命や病気ではなく、殺害という形で死んだ。そのことは、岡本首相には、かつてない経験だったということだ。本人は元々心臓が弱かったというのも、一つの原因と考えられたのだが。

日米のトップが、それぞれ違う形とはいえ死亡したニュースは、日本、WUSUに限らず、全世界中を震撼させた。しかも、クラウト大統領に至っては眉間を貫かれて銃殺されたのだ。日本政府は全力を挙げて犯人の搜索を開始したが、普通に考えれば見つかるはずがない。今、日本中には、銃を持ったWUSUの構成員があちこち

で超能力者を探し回っているのだ。考えられる容疑者は、百人、千人単位では数えきれないだろう。軍事関係者は、当時の状況を整理した結果、相手は超長距離射撃によって大統領を殺したという見解を提示したが、それだけではどうにもなるはずもなかった。

今日分の作業を終えて帰路についた来琥、奈美、実穂の三人は帰路についていた。結局、来琥はその後三往復ほどして全ての荷物を運び終え、その後もどうにか時間ぎりぎりで今日のノルマは達成させた。全部運ぶ時点で、お人好しが過ぎると思われるかもしれないが、逆に言えばあの状況で拒否してしまえば恐ろしく気まずく、そして除け者にされるような空気だったことは間違いなかった。さすがに除け者は考えすぎだろうが、悪い意味で一目置かれる可能性はあった。

「俺、このままパシリの座に就く気は絶対にならないからな」

帰り道でのその一言に、奈美も実穂も堪えていたのであろう笑いを吐き出した。特に実穂の笑いは酷かった。大声で笑われたら、こっちだってどう接していいか迷ってしまう。奈美こそ、形容するならクスクスという世間一般でかわいいという部類に入るであろう笑いだというのに。

「まあ、私たちもなるべく自分たちで頑張るから」

実穂がようやく収まった笑いの後に続けた言葉がそれだった。「だったら今日からそうしてくれ」と言いたかったくらいだが、言ったところで過ぎた過去を変えることができるはずもないので、言うのはやめる事にした。

そのころ、WUSUの基地内では、本場から新たに着任した者達が集っていた。しかし、その中で一目注目されていたのが、三人の男たちだった。全員、周囲のアメリカ人とは一線を引く体格を持っている。その三人の中の女性ですら、そんな印象を持たせた。

「ブラジルより、メリア・ナルク中尉、ただいま着任しました」

「同じく、アルナス・ナルク大尉、着任しました」

「同じく、ベイブ・ナルク少尉、着任完了です」

彼ら三人が兄弟関係にあると周囲が悟ったのはその自己紹介の時だった。

ナルク兄弟は、年長は長女のメリア・ナルク、その次に長男のベイブ・ナルク、末っ子として、次男ベイブ・ナルクと続いている。三人とも、それぞれ体格はいいが、筋肉が全身から膨れ上がるような容姿をしているわけではない。長女のメリアに至っては、腕とウエストが誰からでも分かるほどに細い。他の二人も、身長こそ高く腕筋もあるが、目立つほどではなく、むしろその辺のアスリートとさほど変わらないくらいだ。

着任の挨拶の後、三人は揃って誰もいない廃墟となったビルの屋上に来ていた。元々高所に建設されていたために、屋上からは町を一望することができた。

「それにしても、なあんで俺達がここまで来なきゃいけないんだよー」

ベイブがそう愚痴をこぼしたが、その言葉に兄弟がともに反応を返すはずもなかった。

「俺達をここに寄越すということは、WUSUはもうかなり疲弊してきているのかもしれない」

以前、WUSU内外を問わずよく言われていたことがあった。「WUSUの悪あがきの結晶」と。いつも自分たちが戦場に出てくるのは、WUSUが戦況的に見て不利になったときだ。戦場に出て、戦況をひっくり返すこともあれば、結局押し切られるということもあった。そう、自分たちは不完全な切り札。非絶対的な奥の手。

「まあ、WUSUがこいつを託してくれたことには感謝してるがな」
そう言いながらアルナスは一本の武器を取り出した。全体的な槍のフォルム、その刃の根本に取り付けられた斧。

「桃斧槍の奴が負けて、どこかに消えたっていうから一か月間、総

力を挙げてさがしたらしいからね。おまけまでついてきたしねえ」
WUSUは八月の間、何処かに消えた桃斧槍の場所を探るべく、日本中を駆け巡った。その結果、山奥に埋まっていた桃斧槍を発見し、アルナス・ナルクの下へと送られてきたということだ。メリアとベイブが持っているのは、桃斧槍の構造を真似して作られた疑似物らしい。性能は同等のものだという話なのでそこまで不便することはないだろう。

「無駄なあがきだろうと、託されたからにはやってやるしかないからな」

「五神斬持つてるやつと、日本ニッポにいる反WUSU勢力をぶっ飛ばしやいいんだろ？」

「早く見たいものね。日本人が恐怖と不安に震えるところ」

16、対抗者達

WUSUに対して不信感を抱く者達がいた。それは、WUSUという連合組織の創設時から続いている組織だ。世界中に密かにその支部を持つその反抗組織は、五年前にとある研究を開始した。それは、WUSUに対抗するための絶対的な武器を開発することだった。全国から優秀、しかし未だ世にその名前を出すこと敵わない者達を、「世紀の発明に関わることができる」と唆した。開発の主任となつたのは高真大路。副主任を務めたのは大路の妻、小夜である。二人には子供がいるとは聞いていたが、実家に預けてきたらしい。日本において、他国には秘密裏のうちに行われたその研究によって、二年の歳月をかけて、遂に五つの武器が完成した。今ある全ての技術がつぎ込まれたそれらの武器は、開発の総監督を務めていた男が主催した争奪戦において、四つが持ち出された。だが、五つの武器のうちの一つは、男が会場に持ちこまなかった。忘れたわけではなく、すでに当てがあっただけに過ぎなかった。

明日未来琥。男の部下の息子だった。その部下が脳回路手術によって手に入れた未来予知の能力によって一つの未来が判明した。

来琥に刃薔薇を渡した場合、彼の幼馴染である、代々木奈美が三年後に死亡する。それを阻止するために行う必要があるのか、五神斬の型を持つ全ての物体を破壊することだった。男はその話に乗った。当時十三歳の来琥に刃薔薇を渡し、こう告げた。

「この世界にある全ての五神斬を破壊するんだ。そうしなければ、定められた運命が君に襲い掛かる」

「俺が死ぬということか……」

「おしいが、違うな」

男は来琥に刃薔薇の柄を差し出した。来琥はその柄におそるおそる手を出した。一度はそれを握ることを躊躇ったが、その後、きつく刃薔薇を握った。来琥と刃薔薇との間で契約が行われる。イメージ

の具現化とデータの脳内処理。それを負うという契約を。

これで、未来は、運命は決した。

「君の幼馴染、代々木奈美。彼女が死ぬ。正確に言えば――」

まだ小柄だった来琥のために僅かに折っていた膝を伸ばしながら、男は言った。

「――殺される」

その言葉に衝撃を受けた来琥に向けて、男は告げた。

「だが、言っておこう。この俺、終間帝は、君の敵でも、味方でもないとな」

そう言つて、帝は来琥に背を向けた。来琥はそれ以上何も話そうとはしなかった。

その後、全国から集められた開発部門の科学者達は、情報漏洩防止と証拠隠滅の名目で、全員殺された。

彼らは今も、反WUSU勢力組織、「カウンターズ対抗者達」として、活動を続けている。

実穂は、WUSU内の者からの蔑みの視線を今日も受け止めることとなっていた。所詮自分はWUSUの中では日本人としてのスパイ要員でしかない。自分のことを、WUSUはいつでも切り捨てることができるだろう。自分がどんなに足掻こうとも、どんなに忠誠を誓っても、おそらく一旦疑ったら、それを覆そうとはしないだろう。WUSUというアメリカ大陸の諸国の連中がそういう性格の者達の集まりであることは分かっていたことだから、もしそういう状況になったとしても、驚いたりはいしない自信はあった。

「ミホー、何処行くのー？」

アリスが実穂にくつついてきた。実穂は、アリスをどうあしらおうかと思ったが、それが叶わぬことであると、薄々気づいていた。アリスはどんな理由を並べても、自分についてくるのだろう。

「アリス、ちょっと、話があるの。来てくれる？」

「え、うん」

実穂は気づいてなかった。アリスが自分の後ろでその目を違う意味において輝かせていたことを。

来琥は、始業式より数日、浜比良祭まで十日という日に、カナ、亜里去の二人と、一か月ぶりの再会を果たした。亜里去は少しばかり髪が伸びたようだが、ライトレッドのツインテールは相変わらずだ。カナは以前より少しばかり短くし、後ろは結ってポニーテールにしていた。亜里去は年齢的にもさほど変わっていないかったが、カナの方はまた随分と身長が伸びた気がする。一か月前よりも二、三センチは伸びたかもしれない。

「大丈夫か、亜里去」

来琥が開口一番に放ったのはその言葉だった。亜里去は腕を組み、得意げな表情で返してきた。

「当たり前じゃない」

「よかった。相当心配したんだぞ？」

亜里去の一月前と遜色ない態度と切り替えしに、来琥が安堵の溜息を一つ吐きながらその言葉を発した。その言葉に、亜里去が過剰に反応する。

「別に心配なんかしてもらわなくてもよかったわよ……………」

「ツンデレも健在だね」

茶化すカナの頭に、亜里去の拳が落とされる。亜里去自身は、赤面してそっぽを向き、無言のままに制裁を加えていた。

「いまだ……………最近ツンの割合が増えたんじゃない？ 来琥は来琥でデレの割合が増えてるし」

「増えてねーよ！」

「増えてないわよ！」

カナへの反論によって、二人の声が重なる。カナが占めたように不敵な笑みを零した。

「二人ともツンデレ認めたね」

「なっ……」

結局、来琥も亜里去も、再びカナの巧妙な話術という名の誘導尋問に引っかかってしまったというわけだ。

「カナよ……」

「何？」

「また全力疾走することになるぞ……」

「え……あ」

カナは恐らく悟っただろう。このままいけば、自分が確実にこの二人から集中攻撃を受けることになるということに。

程なくしてカナは、その場で土下座した。

「ご、ごめんなさい……」

二人きりの川辺。それが親しくなった男女によってできている構図ならば、ほとんどの人がロマンチックな光景、もしくは、夢見ずきな光景だと思うだろう。しかし、二人きりは、男女によってのものではなく、少女同士のものだった。

「アリスは、WUSUに忠誠を尽くしている？」

「一応、そのつもり」

しかし、二人の間には、カップルならあるだろう緊張感がなかった。いや、実穂の方は十分な緊張を纏っていたのだが、アリスの方はいつもの如く緊張感がなかった。そもそも、実穂とアリスはカップルなんかではなく、任務上のパートナーに過ぎない。

「私とWUSU、ついていくなら、どっち？」

「ミホ」

驚くほどの即答だった。いくらアリスとはいえ、速答はするだろうにも、少しくらいは考え込むかと思っていたが、そんなことを考えるのがそもそも間違いらしい。

「アリス。私がこれから言うことは、絶対に口外しないって、約束できる？」

「ミホのお願いなら、絶対聞く！」

ここまで自分になついてくるのは、恐らくアリスくらいだろう。男女問わず、自分には元々こんな風に、自分のために一生懸命になつて、自分のために尽くしてくれる人に、実穂は会ったことがなかった。ある意味、こんなやつと会えて、自分は幸せ者なのかもしれないな、と実穂は心の中で自身に納得し、一つ、深呼吸をしてからその言葉を放った。

「私、反WUSU組織に所属してる、^{スパイ}諜報員なの」

その一言を放った時、実穂是最悪の結果を恐れた。二人の時間、否、世界全ての時間が止まったような感覚が、実穂の中にはあった。アリスは失望するだろうか。自分が今まで一緒にいた者が、実は反勢力の諜報員であると知って。元々の味方以外に、実穂がWUSUに潜り込んだ者であることを知らない。話したのは初めてのことであった。

「これから、私の扱いは徐々にひどくなっていく。日本人の私は、WUSUには必要ない。日本国のスパイの可能性をずっと疑ってる。日本政府のスパイではないけど、スパイであることに変わりはない」
実穂は、アリスの顔を直視することができなかった。アリスの顔からいつもの無邪気さや、緊張感のなさは消えていた。きつと絶望してるだろうな、と実穂は思うしかなかった。

「ミホ……」

直視できずにいたアリスが、口を開いた。自分はどうなるだろう。

ここで反逆者として殺されるのだろうか。

「もし、WUSUを裏切る時は、私も連れてって」

「アリスッ!？」

実穂は、この答えを期待していたのかもしれない。しかし、反WUSU組織はつまり、そこに所属する国の者をも嫌う可能性がある。自分が味わってきたこの視線を、この侮辱を、嫌疑を、アリスに背負わせることになるのだ。

「ミホが今まで辛い目に遭ってきたのに、私だけ平和面なんてでき

ない!!」

アリスは、実穂自身が危惧することをいとも容易く跳ね除けた。

実穂は思った。アリスに会うことは、自分の人生を、良かれ悪かれ変えたのだろう、と。人としてまだまだ未成熟なはずなのに、いや、むしろ未成熟だからこそ、自分たちがすでになくしてしまったものを持っている。人が時代の変化に合わせて古い文化を捨てるように、成長に合わせてなくしてしまう感情、あるいは行動。アリスはそれをたくさん持っている。

実穂は気づいてなかった。アリスの言葉に、自身の両目から涙を溢れさせていた。

「……………ありがとう……………!!」

実が小さな女の子を連れて来琥の家押し入ったのは、来琥が亜里去とカナを家の中に招いた直後だった。

「実、その子は……………」

前々から聞きたかったことを、来琥はようやく聞くことができた。

実はその正体を打ち明けることに少しばかり躊躇していたが、その正体を問われた本人には、何の躊躇もなかった。

「高真価帆です」

弾ける笑顔の中で名乗る。来琥は、価帆の名字が、実のそれと同じであることに気が付いた。それが意味するもの、それは。

「い、妹……………」

いつの間にか後ろにつけていた亜里去がその一言を来琥から奪うように言う。そこに、カナが補足するように付け足した。

「まさかシスコン？」

「それは違う」

カナの言葉を表情を全く変化させずに否定すると、玄関にて靴を脱ぎ、ずかずかとあがりこんできた。おそらく止めても無駄だと分かっていたから、取り残されたように玄関に残った価帆の方に視線を送った。

「どうぞ、上がって」

「あ、うん」

素直に頷いた価帆は、靴を脱いで先ほど実が入っていったリビングへと走って行った。来琥は、価帆に続いたカナ、亜里去に続いて、リビングへと向かった。来琥がリビングに戻った時には、すでに実と価帆がそれぞれ一人分用のソファに座り、それに続いた亜里去とカナが二人用の長ソファに座ってしまったために、来琥は一人、床に座らざるを得なかった。

来琥が諦めて無言のうちに床に座ったところで、実が口を開いた。
「先日、クラウト大統領が殺されたのは知ってるな？」

「銃殺だったな」

「犯人はWUSUの構成員の可能性がある」

その言葉に、すでに話を聞いていたのであろう価帆以外の全員に衝撃が走った。WUSUが、アメリカの大統領をわざわざ殺す必要があるのだろうか。

そこで、来琥は思考を変更した。ある。WUSUには、大統領を抹殺するだけの動機がある。今この時、WUSUの中心となりつつある諸国。

「まさか、南米………？」

南米。WUSUの主導権を握るべく動いている。今回の超能力者掃討作戦を立案、実行した。ここ最近軍事力を底上げしている南米は、その軍事力でアメリカに脅しをかけ、実働部隊にアメリカ兵を送り込ませた。それはつまり、日本によって戦死した分、アメリカの軍事力が減っていく。そして、更に南米に軍事力で遅れを取り、逆らうことができなくなってしまう。

「ああ。銃弾が貫いたのと銃声のズレから算出すれば、発砲者は一キロ前後の位置から狙撃したと考えられる」

「それは私も同意見。周辺は警備が厳しいしね」

カナが賛成の意を述べる。口にくそ出さなかったが、来琥も亜里去も、考えとしてはほぼ一致していた。当日は両国のトップが並んだ

のだ。首相官邸内はもちろん、その周辺の警備は相当なものだ。恐らく犯人は、首相と大統領が別れるその瞬間を狙っていたのだ。その時にできる一瞬の気の緩み。そのときだけを狙っていた。

「犯人にとって、岡本首相もお陀仏してくれたのは、ちようどよかったかもしれない」

実のその言葉の指す意味を、来琥が補足した。

「日本はトップを失うことによって、内部で混乱し、更に停戦の交渉もできなくなってしまったからな」

「だけど、今回の事件でまず真っ先に疑われる国はどこだと思う？」
そこでこの話題に入って初めて価帆が口を開いた。その口調はどうか達観したものだった。

「そうか……今WUSUと敵対している日本が、向こうの主導者を消すために行ったという観点から見れば……」
超能力者の数は世界でもトップクラスである、別観点において軍事力を強めている日本が、WUSUの——現在は表面上の——トップであるアメリカの大統領を殺すことで、向こうの統制を乱すということもできるというのである。

「これは、日本に勝ちも負けも許さないようにWUSUが決めたシナリオだ」

17、裏切りと狙撃手姉妹

浜比良祭まで後七日。アリスに自身の正体を明かしてから三日。遂にWUSUから脱退すると実穂とアリスが決めた日だった。この日は実働部隊が一番出払っている日だった。アリスは、基地に少しでもダメージを与えて逃げるつもりだった。監視カメラがいたるところに設置されているために、自分が敵と認識されることにそう時間はかからないだろう。だが、アリスもバックアップしてくれる。攻撃後の脱出に手間取ることはないだろう。

「アリス、準備はいい？」

「いつでも行けるよ」

二人の前にあつたのは、WUSUが収集したデータが大量に積み込まれたデータコンピュータである。WUSUにとって今なくなつて一番痛いのは、兵士でも施設でもなく、情報だ。第二次世界大戦、もしくはそれ以前から、情報が戦いにおいての重要な役割を担っていたことは間違いようがない。それは現代諜報戦でも同じこと。情報の優劣で、勝敗すら決することもある。第三次世界大戦においても、情報の漏洩によって一度、戦況がひっくり返ったこともあるくらいだ。

データを格納しているコンピュータへと、構えた桜鎚を勢いよく振り下ろす。コンピュータが内部でショートすると共に、大きく凹む。そこから間髪入れずに三度桜鎚を叩きつけ、コンピュータは潰れた。

背後の扉が閉まる。だが、これも予想の範疇であり、そこまで狼狽える必要はない。

「そんなものおっ!!!」

桜鎚を扉へと叩きつける。扉は桜鎚の一撃の下に粉碎される。実穂とアリスは警報の直後に粉碎された扉の中から姿を現して動揺している基地兵を薙ぎ払い、走り出す。基地の外に出れば、後は予定さ

れているへりに乗ってこちらの基地まで逃げるといふ寸法だ。

こちらを敵だと認識したWUSU兵達が、銃弾を放ってくるが、実穂とアリスがそれぞれ広げた反射防壁によって、その全てが跳ね返される。それはつまり、銃弾を撃てば、撃った者が死ぬということだった。賢い者は自身も反射防壁を展開したが、そういう者に限っては反射防壁による反射角度を調整し、床の方へと銃弾を落とした。

いよいよ入口が近くなったところで、目の前を塞ぐ者が現れた。

見上げることで、実穂とアリスはその顔を確認した。

「ベイブ少尉……！」

ナルク兄弟がこちらの基地に着任したという話は聞いていた。ナルク兄弟がどういう人物なのかも知っている。向こうにいる時に会話を交わした回数は一度や二度ではなかった。その目の前を塞いだベイブの右手には、実穂に見覚えのある形の武器だった。

「それは………桃斧槍！？」

「——の、模倣品のようなものだ」

模倣品とは言うものの、その完成度は外見だけでも十分に間違えるほどのものだ。WUSUはどこからか桃斧槍を入手し、さらにその構造を再現した武器を作り上げたということだろう。つまり、先日実穂がミーティングにて言及したことは、あっさりと突き崩されたわけだ。ベイブは巨大でありながら自分の身長よりも低い桃斧槍を軽々と持ち上げ、実穂達へ振り下ろしてきた。実穂は反射防壁を展開するが、向こうも同様に防壁を展開し、その効果を相殺する。実穂は両手で支えながら桜鎚でこれに応戦する。振り下ろされた桃斧槍を受け止め、押し合いを始める。しかし、いくら五神斬を持つているとはいえ、男女の差もあれば、元々の体格差も異常なまでに違うのだ。元よりこちらが勝てるわけがない。

そのことを熟知していた実穂は、そのまま桃斧槍を受け流して勝負を降る。向こうはこの体格だ。桜鎚で叩いたところで、扉やコンピュータのように簡単に崩れてはくれないだろう。ならば、攻撃

すること自体、体力も時間も無駄にする行為であると、実穂は心得た。

「アリス、脱出だけを考えて！」

戦闘前に決めていたことだ。コンピュータを破壊した時点で、戦闘になってしまうことは免れないと分かっている。だが、あくまで破壊後は逃げるために時間を取っている。戦闘は必要最小限に留める必要があった。ここで欲張って兵力も落とそうとすれば、返り討ちに遭う可能性があるのだ。

「逃いがすかよお！！！」

ベイブが実穂に向かって薙いできた桃斧槍を、身を屈ませてかわすと、ベイブの後方に位置している出口に向かって桜鎚を振り抜いた。扉は凹みこそしたが、破壊とまではいかなかった。その間にも、ベイブやWUSU兵達の攻撃は続いている。実穂とアリスは、その攻撃を凌ぎつつ、扉の破壊を行い、脱出しなければならない。

これは、勝ちと負けの二択しかない戦いだった。

実穂とアリスが行動を開始する数時間前、カウンターズ対抗者達はWUSUより脱出してくる二人を回収するための準備を始めていた。今回、主戦闘を行うのは脱出してくる二人だが、ヘリに乗り込むまでを援護するのはこちらの仕事だ。

二人の少女の前には、日本支部の長である終間帝がいた。帝が二人に出した指示は一つだけだ。

『回収者を援護しろ』

それが、今回自分たちに与えられた任務だった。援護というと、人によっては不満を持つ者がいるかもしれない。それは、前線に出て戦うことができないというものがほとんどで、援護という言葉ばかりを嫌悪するものもある。

だが、少女達は違った。自分たちが援護に回することは当然のことであるし、逆にいえば、戦いの主役になる気は毛頭なかった。先週こそ、自分たちが中心として事を回したのだが。

「じゃ、行こうか、未奈」

「うん。未久姉ちゃん」

二人の少女の肩から紐で下げられていたのは、彼女達の上半身を軽く超えるであろう銃身のスナイパーライフルだった。

来琥と奈美は揃って学校に来ていた。授業が休みの土曜だからと言って、仕事がないわけではない。その仕事の量こそ、平日に比べれば少ないが、本来家で休むことができる日に学校に出てくるというその事実ばかりが、生徒達の首を精神的な意味で絞めていく原因であった。奈美は楽しそうにしているが、来琥も首を絞められる者の例に外れるわけもない。絶対にWUSUから狙われている身ではあるが、それでも高校生としての表の顔がある。表がなければ裏が成立しないように、社会一般の人間として十分に認知されるぐらいの力をつけておかねばならない。

何度となく訪れた不況の波は、二十五年前に起こった不況を最後に、徐々に回復傾向にあった。それは、科学的な分野を中心に、人手が必要になってきたから、というのが一番言える。雇用が増えれば、不景気は自然に緩和される。給与を貯蓄する傾向にある日本人だが、企業もその傾向がある程度自分たちに振り向かせようとあれやこれやとサービスを展開し続けている。その結果、世の中の施設は利便性を増し、その代償として自然物が減少しているというわけだ。

午前中だけの作業とはいえ、集合時間ぎりぎりに到着し、来琥は今日いるはずのもう一人の姿がないことに気が付いた。そのことを奈美にすぐ質問した。

「針現がないな。どうしたんだ？」

「実穂ちゃん、急用ができて今日は来られないんだって」

「・・・・・・そうか」

実穂が作る急用として考えられるのは、やはりWUSU絡みだろう。それ以外で何か急用を作るとはとても思えない。それは、WUSU、

あるいは桜鎚としての実穂しか知らないからでもある。出会ってから、長くはなくとも、親しくするには十分な時間を過ごしてきたが、実穂も来琥も、互いのことをほとんど知らない。表面上だけ仲良くして、話をして、大事な部分は決して見せようとはしない。それは、五神斬を始めとする戦闘関連のことだけでなく、人としての部分も、という意味合いも含んでいる。

「実穂ちゃんの分も、皆で協力してやつちゃおうか」

「ああ、そうだな」

来琥も奈美も、共に作業する者も知り得なかった。実穂の急用が、WUSUを脱退することだとは。

実穂は、扉の破壊作業とベイブの攻撃を回避することにただひたすら神経を集中させていた。アリスは反射防壁によって周囲のWUSU兵の銃弾を無効化し続けていたために、こちらに加勢する暇がなかったのである。扉は桜鎚による殴打によって、少しずつではあるが変形していた。この扉の素材が、変形させる限界に到達した時扉は破壊され、逃走ルートを確保することができる。そして、それを行うことができるのは、他の五神斬にはない圧倒的な打撃力を持つ桜鎚だけだ。桜鎚が行うのは切断攻撃ではない。破壊活動だ。

「開けえええっ！！」

実穂が何度目か桜鎚を扉に叩きつけた時、さきほど叩いていた時とは若干ではあるが違う音が実穂の鼓膜を刺激した。それは、金属が衝撃に耐えている音を超え、悲鳴を上げている音に他ならなかった。実穂は間髪入れずにもう一方の端にある鎚を同じ場所に叩きつけた。破壊が成功したのは一瞬のことであった。桜鎚の与えた衝撃によって、金属の扉が破壊され、空いた穴から太陽光の光を差し込ませた。太陽光と共に、燦っていた風が勢いよく基地内に流れ込んでくる。その光と風に、ベイブを含むWUSU兵が攻撃を中断せざるを得なかった。実穂はアリスの名を叫んだ直後に、その穴へと飛び込むと、その穴から手を伸ばした。アリスはその手を取り、穴の外へ

と飛び出す。数百メートル先に、ヘリが降下していくのが見える。

あそこがゴール地点。周囲は基本的に何も無い。いくらかの廃棄された建物はあるが、それ以外はほとんど荒地となっている。それは、殺伐とした場所ほど逆に基地が目立たなくなるという逆転の発想である。以前は、たくさんの建物の中に身を隠すことで、周囲の建物同様に一企業としてカムフラージュすることもできたが、企業審査が厳しくなったゆえに、密集したビル群の中ではむしろ逃げ場がなくなってしまうという状況に陥ってしまったのである。そこで、公に動くことのできない組織は、こうした人気のない場所に建設するようになった。いくつか残っている廃墟は先代のそうした組織の基地の名残である。

「アリス、怪我はない？」

「うん、大丈夫」

実穂はアリスの無事を確かめると、ヘリに向かって一直線に走り出す。百メートルほど走ったところで、後方から叫び声と共にこちらへ向かってくるWUSU兵の姿が見えた。足止めにと、反射防壁を実穂とアリスのもので二重ににかけていたのだが、それらを突破してきたらしい。だが、それも想定済みであるし、それに対する対処も、すでに準備してある。

基地から溢れるようにして出てきたWUSU兵の眉間を、その弾道をほとんどずらさずに貫通する。その様を初めて見て、そこに銃弾が吸い込まれていくような錯覚に陥るのは、一人や二人ではないだろう。それほどズレがないということだ。

それでも、悪あがきのように飛んでくる銃弾はある。アリスが一応反射防壁を展開しているからとはいえ、その銃弾は全くそれた弾道を飛んでいくのがほとんどであった。まぐれ当たりで反射防壁に当たれば、そのまま自分たちに返ってくるのだから、本当に悪あがきの銃弾であった。

「見えた。行くよ、アリス!!」

「うん！」

二人の視線の先、十数メートルのところに、ヘリは着陸していた。プロペラは常時回転を続け、いつでも離陸できる体勢を作っている。すでに援護の射撃は止んでいた。恐らく、自分たちと同様に逃走の準備に入っただけであろう。ここにあまり長居しては、遅かれ早かれ身を滅ぼすのは分かっているのだ。幸いなことに、援護射撃によって、実穂、アリスと追手のWUSU兵との距離は更に開き、すぐに追いつけるような状態にはなかった。

実穂とアリスがヘリを眼前に捉えるまでに近づいたとき、二人の少女がこちらへ駆け寄ってきた。

「未久、未奈！　ありがとう！！」

「お疲れ様。行きましょ」

そう言つて、狙撃手の二人はヘリに乗り込む。実穂もヘリに乗り込み、ヘリの下で俯いていたアリスを呼んだ。

「アリス、さあ、乗つて」

「ホントにいいのかな……」

「え？」

それは、ここにきてアリスが初めて見せた、弱気の面だった。

「私なんかが行つても、いいのかな……」

実穂は、自分が無駄に重荷を押し付けてしまったような感覚に初めて襲われた。裏切ったとはいえ、元々WUSUに所属していたのだ。WUSUにいた自分のように、白い目で見られる可能性はあった。

だが、と実穂は思った。それを、全力で自分が守らなければならぬ、と。自分が経験してきたこと全てを、アリスに背負わせる気はなかった。どんなに言及されても、どんなに邪魔者扱いにされても、自分が連れてきたのだ。咎めは受けるし、全力で庇って見せる。そのために、実穂は自身の正体を明かしたのだ。上に報告されるリスクを大きく孕みながら。それでも、伝えたのだ。それに嘘偽りはなかった。

「もちろんよ」

実穂は、その言葉に顔を挙げたアリスに笑顔を見せた。迷う必要は

ない。自分はやるべき責務を果たしたのだ。

「ようこそ、反西端アメリカ連合勢力組織、カウンターズ 対抗者達へ！！」
アリスは、実穂が差し出した手を取って、へりに乗り込んだ。

18、悲劇の予兆

浜比良祭まで、後五日。日曜日も姿を現さなかった実穂は、月曜日になってようやくその姿を見せた。サボったわけではないだろうが、休日二日を潰すほどに忙しい用事は、やはり大きな事象によってしか思えなかった。

「奈美ちゃん、ごめんね」。私の分までやってもらったみたいで」

「全然大丈夫だよ。みんなも手伝ってくれたし」

手を合わせて頭を下げる実穂に対し、奈美が笑顔で返す。その笑顔には、一切裏表がない。素でそう思っているところが、奈美らしいところだと、来琥はよく知っていた。

「そっか。じゃあ放課後は皆に謝つとかないかね」

実際、皆が手伝ったというのは嘘ではない。そこにいた誰もが、自分の仕事を少し増やした感覚で行っていたために、そこまで重荷にはなっていなかった。それにしても呑気なやつらだな、と埒もないことをその時は思った。裏では五神斬同士での戦いが行われ、表面であっても、WUSUによる超能力者掃討作戦、最近には日米首相、大統領が死んだというニュースが入ったのだ。それなのに、ここまです緊張感をなくすことができるものなんだな、と無駄なところで感心していた。

「気にする必要はないさ、皆好きでやってるしな」

実穂に向かって、来琥はその言葉と共に微笑みを見せた。

その日の放課後、ノルマを終えて、鍵が開いている家に戻ってきた来琥は、見慣れた三つの靴と、まだ見慣れない靴を一つ確認してから靴を脱ぎ、リビングに足を運んだ。案の状、亜里去、カナ、実、価帆の四人が、それぞれソファに座って来琥の帰りを待ちわびていた。もちろん、来琥が座れる場所はない。全員がようやく来たかという顔をしているために、座れる場所がないことに余計に腹立たし

くなつた。

「まったく、どんだけ遅くなってるのよ！」

「ここは俺の家なんだが……」

「遅れたアンタが悪い！」

人ん家に勝手に上がっている上にソファを四人掛かりで占領しているやつらに言われる筋合いはない、と反論したかったのは山々だったが、口にする直前、それは焼石に水と同じことだと来琥は気づき、反論をやめた。

「で？ 人の家に上り込んでまでの話つてのはなんだ？」

どうやら、話はまだ行われていないらしく、来琥が来てから全員が聞くことになっていたらしい。確かにそれなら遅れた自分が悪いよな気がしないでもないが、元々自分の家であり、今日集まって話をするなどということは全く聞かされていなかったということもあり、やはり一概に自分が悪いということにもできない。などということをも口で説明しても絶対亜里去辺りに途中で遮られそうな気がしたので、やはり反論することは諦める他なかった。来琥が（仕方なく）床に座ったところで、カナがその口を開いた。

「私がWUSUの軍需産業を知り合いに持つ設計工学者に聞いた情報なんだけど……」

カナにしては珍しくもったいぶった言い方だ。それほどまでに重要な事柄なのだろうか。

「WUSUは今、南米において核兵器の発射準備を完了させようとしているらしいの」

その言葉に凍りついたのは、来琥だけではなかった。

二世紀以上も前に完全撤廃させた核兵器を再び作り出した。完全撤廃を完了させても、結局設計図が何かを残して、非常時に使えるようにしたかったのだろう。核保有国の中でも先陣切つて核兵器を完全撤廃したWUSUが、再び核兵器を開発してまで打ち滅ぼしたい国。

「それで、日本を狙い撃つ気か？」

実の推測に、カナは首を縦に振って肯定した。

「けど、それを知ったところで、私たちがどうこうできる問題じゃない。南米よ？ 日本人である私たちが、入国を許されるはずがないわ」

亜里去の意見はもつともだ。日本人というだけで、今は敵対国ということで、日本側の空港が許さないだろう。

「だから今回、その任務はある組織に依頼することにした」

「組織……」

来琥がそう呟きを漏らしたのにちらとカナが視線を送った後、その組織名称を告げた。

「反WUSU組織、終間帝率いる、カウンターズ 対抗者達」

「終間帝！？」

カウンターズ「対抗者達！？」

指導者の名前に来琥が、組織名称に価帆が過敏に反応した。実は声を挙げなかったが、カウンターズ 対抗者達の方に反応を示していたのは、誰の目にも明らかだった。亜里去は、自分一人が置いて行かれていたような錯覚に陥ったのか、不機嫌そうな顔をして来琥を見ていた。

「みんな、心当たりはあるみたいだね」

カナの言葉に対し、実は、その部屋にいる者がかるうじて聞こえるような声で、口から言葉を漏らした。

カウンターズ「対抗者達は、五神斬を開発した組織だ」

その言葉に、来琥の記憶がフラッシュバックされ、一つの事実が一気に繋がった。

三年前、帝から告げられた未来。奈美の死。それを妨げるために、五神斬を破壊するように指示された。その五神斬のうちの一つ、刃薔薇を帝が持っていたのは、帝が開発組織に所属していたから。刃薔薇を持ち続けながら契約が行われたなかったのは、帝自身が超能力者ではないこと、そして、帝の方が契約を拒否したというのがあ

った。

しかし、来琥の中で別の疑問がそこで生まれた。自分で生み出しておきながら、五神斬を何故わざわざ破壊させようとしたのだろうg¥か。五神斬の暴走を恐れてのことなら、そもそも作る必要などなかったはずなのだ。しかし、その疑問は、すぐに晴れた。帝が所属する組織、反WUSU組織。つまり、五神斬は対WUSUのために作られた可能性がある。そして、五神斬の模倣品が現れ、それがWUSUの手元に渡ったとした場合……。

——この世界にある全ての五神斬を壊すんだ。

それはつまり、性能は異なれど、五神斬と形容して問題のないものは全て破壊しなければならない、ということだ。それは、オリジナル、模倣品の差別なく、ということだろう。つまり。自分は帝に、カウンターズ対抗者達にとつては、五神斬が流用された時のための保険ということになっていいるのだろう。全ての五神斬を破壊するにあたつて、オリジナルを標的にする可能性も、場合によっては自分たちに刃が向けられるリスクを背負つても尚、わざわざ刃薔薇を渡した。もしかしたら、WUSUが超能力者の掃討作戦を行うことも見越していたのかもしれない。五神斬の存在を知ったWUSUが、『超能力者』の名目において五神斬を追い詰めるつもりであつたことも。

一体、帝たちは、何処までの真実を知っているのだろうか。

タイズ放課後、実穂は以前までと違い、WUSUの基地ではなく、カウン対抗者達の基地の方へと足を運んだ。基地内では、すでにいつものメンバーがそろつていた。ただ一人を除いて。

「アリスは？」

「そろそろ起きてくると思うけどね。かなり疲れてたみたいだし」
「どうやら、アリスを拒絶しているような雰囲気はなさそうで、実穂はほつとした。まだアリスと未久、未奈はまともな自己紹介をしていない。元WUSUの人間とはいえ、今は仲間としての扱いを受けるのだ。自己紹介くらいは、早いうちに行った方がいいだろう。」

その時、ちょうどアリスが寝ていた部屋のドアが開いた。開いたドアの先にいたアリスは、少なくとも寝起きとは思えない清潔に決められた格好で出てきた。その姿に、未奈が噴出しそうになっていたが、未久に背中を抓られて阻止されていた。

「そんなに固くならなくても大丈夫だよ。この人、元WUSUだからって拒絶したりしないから」

「あ……はい」

「それと、敬語も禁止。実穂と同じ年ってことは、私とも同じ年なんだから、固いことはなしってことで、ね？」

「うん、ありがとう」

WUSU時代の名残なのか、きびきびしすぎていた自分の行動が恥ずかしくなったのか、アリスは赤面して下を向いてしまっていたが、その顔は微かに笑っていた。

「あ、自己紹介がまだだったね」

その未久の言葉に、はっとして顔を挙げたアリスは思わず敬礼しながら自己紹介を始めた。

「あ、えっと、アリス・ハイリアでありますっ！！」

「だから、敬語禁止だつてばあ」

「あ、え……あ！」

先程言われたばかりの禁止事項にいきなり触れてしまったアリスは、またも頬を赤らめるしかなかった。クスクスと笑う未奈と実穂に挟まれて、未久が自己紹介を始めた。

「私は明日未未久。今十六歳」

「あ、私は明日未未奈。未久姉ちゃんの妹で、十五歳です」

「え、明日未……？」

未奈が自分たちに接するように敬語を使っていることは横においておくとして、この姉妹の名字に動揺してしまうのも無理はないだろう。彼女らは、明日未来琥の兄弟にあたる者達なのだ。もつとも、来琥の方がこのことを覚えているのかどうかは分からないが。

未久は来琥と双子、大して未奈は年子として生まれた。未久は、

来琥と双子でも自分の方が精神的にも大人であるから姉だと言っているのだが、実際、先に外界の空気に触れたのは来琥の方が先らしい。そのことは、何故か当時は生まれていないはずの未奈から聞いた話であるが。

「来琥とは会ってるの？」

アリスのその質問から、話題はここにいない来琥のそれへと変わっていった。

「もう十年近く会ってないからなあ、元気にしてるのかなあ」

「ちゃんと高校生してるよ」

その質問には実穂が答えた。さすがに、放課後に同じ道を歩いているとか、クラスが同じでよく会話をするとかまで言えば、また、面倒なことになるだろうから、そこまで触れる気はない。

そこまで来て、「高校といえば」、と未久が思いついたように話を新たな方向へと斬りこみだした。

「実穂、WUSUに潜伏してる間に高校行ってたんでしょ？」

「いや、今も行ってるけどさ」

ささやかなツツコミは、当たり前のようにスルーされて、次なる言葉を発表された。

「好きな人はできた？」

「でっ、できてるわけないでしょっ！」

実穂は、突然振られた自分への質問に、言葉の出始めを噛んでしまっていた。そして、その動揺の出所を直感とはいえ、きっぱりと言いつけてきた。

「もしかして、来琥だったりする？」

「なっ、なな、そ、そんなわけ……ない、でしょっ!!」

自分が予想以上に赤面し、予想以上に噛みまくり、予想以上に顔が熱くなってしまったことに、実穂はさらに動揺してしまい、もうなにがなんだが分からなくなってしまうていた。

明日未姉妹がそんな実穂を見て（分かりやすいなー）と全く同じことを思っていたことを、実穂は知りようもなかった。

WUSUの基地では、すでに実穂やアリスのことなどはほとんど触れられず次なる作戦の実行を計画していた。今現在基地においているここ、浜比良を一気に攻め立て、それとほぼ同時に、北海道方面、九州方面の二つを核兵器によって爆撃することで、有無を言わず殲滅する作戦だった。この作戦の実行のために、北海道と、九州方面の県に潜んでいるWUSU構成員がこの浜比良に集約される。偶然なことに浜比良に集結している刃薔薇、鈴嵐、殺陣椿、そして桜鎚。今度こそこれらの五神斬を破壊し、WUSUがこの世界において最強であることを証明する必要がある。それは、南米を中心にして決定したことだった。いや、むしろ南米諸国の独断だったと言っても過言ではなかった。仮にもカナダや中米にも、意見する権利はあったはずだが、南米諸国はこれを圧倒的な軍事力を盾に制した。クラウト大統領を失ったことで、WUSUの主導権は、ほぼ完璧に南米が握っていた。

「して、作戦の実行はこの日で間違いないな？」

「問題ない。それまでには、各基地のWUSU兵も集まってくるだろう」

「では、作戦決行を、五日後とし、各自準備を始める。各員に通達！」

「はっ！」

そう言つて、基地内部指揮の者がミーティングルームを敬礼の後に出ていき、浜比良のWUSU兵全員にそれが知れ渡ることとなった。

来琥も亜里去もカナも実も価帆も、実穂もアリスも未久も未奈も、多くの情報を持っているカナを持っても、反WUSU組織であるということを持っても、ある事実に気づくことは、できるはずがなかった。

WUSUが計画している三か所同時攻撃の日が、ちょうど浜比良祭と同じ日に行われるということを。その日の攻撃によって、自分

たちが今まで築き上げてきた日常が酷く脆く崩れていってしまうということを。裏と表が、その日、混ざり切ってしまうことを。ある少年が、その日に人生のうち、最大の絶望を味わうことになってしまふことを。

作戦の実行まで、浜比良祭の開催まで、あと、五日。

19、理由 過去

浜比良祭まで後三日。学内では各所がこれまで以上の仕事を持つことになった。特に仕事の量が増えたのは、各教室での展示用の材料の買い出しや飾り付けの用意などを担当する班である。そして、来琥達は、その班に属してしまっていた。他の班が帰り支度をしている間にも、来琥達はせつせと準備に勤しむことになった。

「よし、今日の作業終わったあ！」

実穂が背伸びしながらそのままたりと床に仰向けに倒れる。そのまま床でもぐぐつと体を伸ばす。来琥はその間にも今日出たごみをきばきと回収し始めた。何でか知らないが、自分の仕事は何故か帰り際にこの回収作業というもので増えてしまっていた。ただでさえかなりの仕事を背負わされているのに、という感覚が来琥の中にあつた。

「さ、帰るか」

全ての仕事（来琥の追加分も含めて）が終わって、来琥達は帰路についた。奈美と別れ、世間話の中で、話題の一つは兄弟のことになった。ただ、実穂はいない、来琥には二人の妹、という二つだけで、会話は一瞬のうちに終わってしまった。

実穂とも別れ際の言葉を交わそうとした。だが、実穂は来琥を引き留めた。

「来琥君はさ、その……今、好きな人とかいるの？」

来琥はその質問に終始狼狽えるほかなかった。だが、今まであつてきたどの子も何十秒も頭の中に映像として映されるような人はいなかった。だが、その中でも僅かながら、来琥の脳内に残った者はいた。

「どうなんだろうな………いても、もしかしたら自分で気づ

いていないのかもしれない」

来琥が実穂へ返した答えはこれだった。来琥には、これ以上の答えもこれ以下の答えを用意できなかった。だが、そんな答えにも、実穂は笑顔で返した。

「別に無理して答えなくてもいいよ。うん、ありがとう」

「針現、お前、まさか……俺の事……」

「べ、べつに、針現じゃなくてもいいから！ 実穂で、いいから！」

「え？ あ、うん……」

来琥はいきなり話を遮られてそう答えるしかできなかった。

「それと、私、WUSUから手引いたから」

「は！？」

いきなり変えられた話題は、全く予想外の話題であり、その内容もまた、来琥の予想を大幅に外れたものだった。

「私、元々対抗者達カウンターズの人間だしね」

その言葉に、来琥ははっとした。先日初めて聞いたばかりの固有名詞ではなかったが、今、来琥の脳内を占めるウエイトはかなり大きいものだった。だが、来琥がそれについて言及しようとしたが、それを行う前に、実穂は走り去った。

帰宅した来琥は、家のソファで横になっていた亜里去を見つけると、その名前を呼んだ。

「亜里去」

しかし、亜里去の反応はなかった。生きてるのが死んでるのか分からないくらいにぐっすりと眠ってしまっている。来琥は溜息を一つついて亜里去のすぐ近くまで寄ると、その口を開いて叫んだ。

「起きろお！！」

「にやあああー！！！！」

いつもの態度や性格からは考えられないような声を挙げながら亜里去が飛び起きる。いきなりの出来事に、自分が寝ていたことすらあ

やふやになつてしまつていゝほどに動揺していた。こんな亜里去を見たのは初めてだったために、来琥は声を挙げて笑つていた。ようやく自分の置かれてゐる状況を少しずつ把握していった亜里去は、眼前で腹を押さえて笑つてゐる来琥を見て言及を開始した。

「なつ、何笑つてんのよ!!」

「いや、亜里去も慌ててゐるところはかわいいもんだな、と思つてさ」寝顔を見られたことと、思いがけなかつたのであろう一言を浴びせられて、亜里去の顔が真っ赤に染まる。来琥の笑いは収まらない。

「べつにかわいいと言われても、これっぽっちも嬉しくないんだからね!!!」

亜里去が右手の人差し指と親指で隙間を作つて来琥に抗議してくるが、来琥は軽く受け答えすることとなつた。

「それくらいは嬉しいんだな」

「な・・・さ、三ミリくらいよ。そ、そんなの、嬉しいうちに入らないんだから!!」

「はいはい」

来琥の笑いは更に大きくなつたものになり、亜里去はそれに比例して顔を赤くするしかなかった。

夏休みに入る前、亜里去と戦闘を行い、亜里去に二度目の雷を浴びせようとした対駕の前に立ち塞がった力ナは、その時に殺陣椿を持つことの理由を問いただした。対駕はそれに対し、仕方なく、その理由を力ナに話し始めた。

十年近く前、対駕は磁力車との事故に巻き込まれた。正確には、巻き込まれかけた。磁力車がこちらに向かつて突き進むのを遠くに見ていた対駕は、道路を渡ろうとしたのだが、そこで自身の足にまずいて転倒した。だが、そうして転んでしまったタイミングが悪かつた。磁力車のドライバーは自動運転に任せて自分は車内で眠つてゐたのだ。自動運転ならば、あらかじめ地図に記載されている障

害物や路地、信号などを記憶し、それに沿って動くことができるが、元々地図データに含まれていない。道路通行者は感知することはできない。手動運転ならば、ドライバーの判断で止まることもできるので、それによる事故の可能性は激減するのだが、当時（現在もだが）、日本で起きていた事故の過半数は磁力車、その自動運転中のものであった。

成す術もなく、そこに座り込んでいた対駕を、何者かが押し出した。対駕は転がりながら磁力車の真交通路から外れる。しかし、そこで轢かれる可能性があるのはその押し出した人だった。

対駕を押し出したのは、一人の少女だった。それも、見た目だけでいえば、まだ子供である自分よりもいくらか年齢が低い。多分、見た目だけでなく、実際に年下だろう。

対駕がその少女の危機を目の当たりにして、自分にも何かできないかと立ち上がろうとしたが、先ほど押し出された時にすりむいた膝の痛みとほんの僅かにできた不安で、動くことはできなかった。そこに、いつからそこにいたのかは分からなかった少年が現れ、

少女の名を叫びながら、少女を引き寄せようと手を伸ばした。少女がその手を掴み、少年がぐつ、と引く。しかし、完全に引き込む前に、少女の足が磁力車の頭部にぶつかり、足から飛ばされる。少年はどうにかそれ以上轢かれぬような位置になるくらいまでは少女の手を掴んでいたが、大きくとんだ少女を無理に引き寄せることもできず、少女は二、三メートルの距離とはいえ、地面を転がった。少年が手を離れた後に勢いに負けて倒れるのと、磁力車が異常を感じて強制停止したのは、ほぼ同時に起こったことだった。

結局、三人は奇跡的に軽傷で済み、運転手は運転責任不十分として刑罰を受けた。三人とも、医学上軽傷、というにも、少女は一度は意識を失っていた。幸い、その失っていた時間も短く、一番傷が酷かった足も、現代医学でも十分に治療可能な範囲、損傷だったために、報道では「軽傷」と言われた。

対駕が自分を助けてくれたその少女の名を知ったのはそれからそ

う遠くはなかった。

「暴走を制御する!？」

来琥と亜里去の二人きりの幕間劇が終わり、来琥は笑いを完全に抑えたところで、本題に入った。その内容は、五神斬が三つ以上揃った時に起きる暴走を、意識的に制御し、理性のうちに行動できるようにする、というものだった。五神斬としての能力を最大限に生かせる環境を作りながら、それに吞まれないだけの力を手に入れる。人によっては、雲を掴むような話だと、持ち上げたサジをそのままゴミ箱へと持っていていきそうだが、亜里去や来琥、当人達にとっては、それを行うことで今までよりも戦闘がずっと有利になるのだから、これを逃す機会はなかった。

「まだ暴走の回数が一回しかない。あの違和感の後に体を襲う様々な内部的苦痛を和らげるなり、耐えるなりすれば、理性を保ちつつ、五神斬の力を十二分に発揮できる」

もちろん来琥には、そうするための理由があった。これからも五神斬との戦いは続いていく。それは、オリジナルとだけでなく、疑似タイプの五神斬とも、という意味である。オリジナルの五神斬と戦うようなことになれば、来琥と亜里去で向かった際には暴走は免れない。その時に制御することができれば、少なくとも理性を失って力任せに攻撃してくる相手よりも冷静な戦い方で追い詰めることができる。そして、これは希望の範疇に過ぎないのだが、この暴走の制御を利用して、最終的には、五神斬を三つ以上揃えずに、五神斬の力を解放させることを目指す。平常時にも疑似品を大きく上回る攻撃を行うことができれば、もうどんな相手が来たとしても、怖いものはない。

「で、その方法はどうすんのよ？」

「暴走は何度も行った上でその耐久性を上げるしかない。疑似タイプの五神斬が流通しかけている今、オリジナルを持つやつを一人、俺は知っている」

「ま、それを言うなら私も一人は知ってる。多分、私の提示するやつとやった方がいいと思う」

「まさか、殺陣椿か？」

「逆に誰がいるのよ。運が良ければ、暴走状態であつたとしても殺陣椿を撃破できるでしょ」

それでは暴走の制御を目的とする意味がない気がするが、亜里去の目的は元々殺陣椿に復讐することだ。復讐が決まっていることだとは思わないが、どうしてもそうしなければならないというのなら、本人の意思を尊重するしかないだろう。もっとも、復讐しようとして、前回は失敗したのだから、そう簡単に事が進むとは思えないのだが。「まあいい。じゃあ、殺陣椿の位置は確認できるか？」

「呼び出せば、来る可能性はある」

あくまで可能性の範囲。それでも、亜里去はその可能性に賭けるだろう。亜里去が過去のどういう経緯に基づいて殺陣椿に復讐しようとするのかは分からないが、それでも、自分は亜里去を今まで振り回してきたのだ（先ほども会話の中で相当振り回したと自覚している）。ここは少しでも亜里去に協力するべきだ、と来琥は心の中でそう決めた。

一人の女性は、貨物物資に紛れ、^{カウンターズ}対抗者達の南部メキシコ基地へと到着したところだった。メキシコ内では、数十年前から無法地帯となつている一帯があり、その中に対抗者達の^{カウンターズ}基地が紛れ込んでいるのだ。こうした隠れて活動するはずの組織は、人気のない場所に基地を立てるのが基本だ。だが、無法地帯に建てられたこの基地は、周囲もそうであるように、企業審査というものがない。メキシコ警察やWUSUの調査員が送り込まれたことは何度かあったが、無事に帰って来た者はほとんどいない。そのほとんどは、専用の拷問室において、何十年にも渡っていたがられ続けている。ここでは、仲間以外は全て敵という考えがむしろ一般的なのだ。だからこそ、地元住民ですらない女性は、身を隠しながら進むほかなかった。指

定されていた基地まで自分の足で歩いてきたのである。女性は、入口に置かれている指紋認証装置に自分の右手の人差し指を乗せた。装置のセンサーがタッチに反応し、指紋をスキャンする。そして、たった今読み取った指紋と、対抗者達のデータベースを参照し、指紋が一致しそうな候補をいくらか選び出す。その上がった候補を順番に調べていき、どれか一つでも当てはまれば、先に進めるが、もし一つもなければ、そこで終わり。先には進めない。

指紋認証装置は、データベースの中に全く同一の指紋を見つけ出し、認証した。女性は奥に進み、被っていたフードを脱いだ。頑丈な扉に開けられた隙間から、いかつい目つきの男が、女性を日本人だと確認すると、日本語で質問、というよりは、合言葉を求めてきた。

「回復十年？」

「破壊一年」

その質問に何の思慮も躊躇もなく、女性は全くの正答である合言葉を放った。その顔には、得意げな笑みも、不安げな顔も見当たらなかった。

隙間の向こうの男がその回答が正答であると確認すると無表情に頷きながら扉のロックを外し、開いた。

扉の向こうでは、主に原住民を中心としたコミュニティが形成され、雑談や世間話、次のミッションや状況説明をそれぞれ行っていた。ただ、さすがにWUSU加盟国であるメキシコの中に建てられた基地であるゆえに、その緊張感には日本のそれとは全く違う。雑談や世間話を行っていても、それに対して無駄に盛大な笑い声を挙げようとする者はいなかった。

女性は、そうした人を避けながら進み、人とすれ違いながらも基地の通路を一人、無言で進んでいった。そして、入室の許可を得るためにインターホンで確認を取り、その許可が下りたところでスライド式の扉に手をかざし、自動的にその扉が開く。その中に一人座っていた基地の支部長に向かって敬礼し、女性は自らの名と身分、

そして目的を伝えた。その様子は、形容するならば、
「日本支部より、核兵器攻撃阻止のために派遣された、木嶋相子で
あります」

WUSUの作戦開始日まで、後三日。

20、浜比良祭、開催

二週間ほどの準備期間を経て、浜比良祭はついに開催の日を迎えた。とは言っても、どうせ今日一日しか行わないので、閉会も今日のうちに行われるのだが。

浜比良祭を前にして山積みになっていた来琥の仕事も、無事に終了し、今頃は奈美が、作ったケーキを販売しているだろう。各クラスの出し物、及び催し物は自由に決められる。ただ、商法の場合、学校側の審査で認められる質と値段が求められる。物を売り出す時、質が悪くては学校としての評判が落ちる。逆に高級品をふんだんに使って高額なものを提供することは、学校側が「品性に欠ける」の一言で切り捨てる。だから、安価な材料で質が高く、その上で利益がぎりぎり発生する程度の売値。それを決めるのは、全員が一番悩んだことだった。

「来琥君、あそこ行ってみようよ!!」

「あ、ああ……」

来琥と実穂は、校内を歩き回って、各クラスの催し物を見て回っていた。それだけならば、別に何の問題もなかった。来琥の中で問題となっていたのはたった一つ。なぜか実穂が、来琥の左腕に自分の腕を回してきていたのだ。そこにどういう意図が隠されているのかは分からないが、来琥は敢えてそのことについては聞かないようにしよう、と一人勝手に決めていた。来琥と実穂の校内巡りは続き、一周して教室まで戻ってきたところで、ちょうど係りの交代の時間となり、来琥、実穂は店前に立って接客を始めた。元々一周してある程度遊び歩いた頃に順番になるような時間だったので、それを計算に入れての巡回だったのだが。

店番をして十数分。予想の斜め上に行く売上にテンションを挙げ、奈美を始めとする調理グループが、追加分のケーキのデコレーションを行っている時、来琥は教室の人ごみの中に他の人とは明らかに

雰囲気の違う人物がいることに気が付いた。見たことがある、あるいは会ったことがある人物ではない。その顔立ちが、来琥の脳裏で警報が掻き立てさせる。来琥は注文に来る客がいなくなったところで、来琥はすぐに隣にいた実穂に小声で伝えた。

「実穂。アメリカ人だ」

先日からずっと念を押されていたために来琥はすっかり、実穂への呼称を『針現』から『実穂』へと変更していた。その呼び方が、自分でも思っていた以上にしっくりと来たことに、来琥自身が驚いたことは、今日一日中感じていたことだ。

実穂もどうやらその存在に気づいていたようで、無言のうちに首を縦に一回振った。しかし、それでもやってくる客への対応は欠かさない。頼まれた注文にそって、ケーキを低温ショーケースの中から取り出し、皿に乗せ、フォークをつけて客に渡す。客はそれを笑顔で受け取り、来琥や実穂もそれに対して笑顔で応対する。それでも、必ず二人のうちどちらかは、アメリカ人の方を捉えていた。相手にこちらの視線が気づかれないように、時折、話を織り交ぜながら、その存在を明確なものにしていく。

時間が少しずつ過ぎる中、次の当番が来琥達のところにやってきた。それはつまり、来琥達に少なからず時間が与えられたということだ。実穂が監視、来琥がいつでも緊急事態の放送を流させられるように職員室にほど近い場所で待機することになった。

実穂は来琥と別れた後、同じようにこの事態見越して潜伏させている二人に連絡を入れた。送り相手は未久と未奈。アリスは今、一個小隊で浜比良全体をを巡回警備している。ここまで用意周到なのは、二日前に對抗者達南部メキシコ支部から送られてきた情報カウンターが、そこにいた全員に少なからぬ衝撃を与えたからである。

それは、今日、おそらく五神斬全てが揃っている場所という意味で、浜比良に大量のWUSU兵が送られ、それと同時に日本列島の二か所を同時に核兵器で殲滅する、というものだった。今、浜比良

に集っている五神斬——刃薔薇、鈴嵐、殺陣椿、桃斧槍、桜鎚——を破壊するために、大量の歩兵を送り込む気なのだろう。何故、浜比良に核兵器を撃ちこまないのか、それはやはり、切り札となっているナルク兄弟が浜比良基地にいるというのが一番の大きな理由だろう。末っ子であるベイブが疑似型とはいえ桃斧槍を持っていたということとは、残る二人のどちらか——おそらくは、階級的な面においてアルナスが持っている可能性が高いのだが——が、オリジナルの桃斧槍を持っている可能性がある。つまり、本命は数で攻め、元々の建前である『超能力者掃討』は、完全撤廃である核兵器によって行う。

少なくとも今現在、アメリカの統治体制は一本の大きな柱を失って混乱の渦中にある。少なくともこれで、アメリカが中心となった軍を動かしていないということが証明された。南米は完全にWUSUを掌握しただろう。核兵器の所在も南米であることが分かっている以上、もう言い逃れはできないだろう。

未久と未奈それぞれから了解という返事が返ってくる。任務とはいえはしゃいでいた二人は、これから浜比良校内の警備を個々に動いて強化するだろう。来琥にはまだ、未久や未奈が対抗者達カウンターズにいることは言っていない。だから、もし緊急事態である証拠の映像メモリなどが入手できた場合、未久、未奈からのものは実穂経由で来琥に送る必要がある。かなり面倒な作業ではあるが、一番確実な方法だった。

実穂は端末を閉じると、再びアメリカ人に対する警備を人知れず再開した。

対駕は、浜比良祭に顔を出していた。対駕自身は、アメリカ人が来ていることも、WUSUの作戦の存在も知らなかったが、それでも、目的があつてここに来ていた。殺陣椿も、縮小させて隠し持っている。いざという時のために、持っておいて損はないだろう。

過去に、対駕を身を挺して救った少女は、今この高校に通ってい

る。それが何処にいるのかも把握している。だからこそ対駕は他者から怪しまれない程度の位置から、少女がいるであろう教室の近くで端末をいじっていた。

だが、先ほどから妙な感覚がしていた。それは一瞬のうちに消えたのだが、体のどこかが言うことを利かなくなりそうな感覚がした。その正体は何なのかは分からない。だが、今のが極度に進行していれば、自分が我を失うほどに何か大きな力に呑みこまれてしまいそうになっていたことだけは明らかなことだった。

そして対駕は、その少し後に妙な視線を感じていた。気配を故意に消しているのが感じられるが、それ以上に大きな感情を、対駕はどこからか受け止めていた。

それは、明らかな殺気。他の者はどうなのかは分からないが、少なくとも自分に向けられているのは確かだった。

（また鈴嵐じゃなければいいがな・・・）

そんな対駕の予測は間もなく、悪い意味で裏切られることとなることを、対駕自身は予測の範疇として考えてはいなかった。

来琥は実穂と別れた後、とりあえず話かけられない程度に動き回り、職員室にほど近い場所で連絡を待った。連絡とそれに見合った証明写真があれば、緊急事態放送を行うことができる。だが、その担当をする教師が非常に頑固であるために、口だけでは幾ら言っても帰れ帰れと払われるだけだ。だからこそその証拠写真。画像メモリは絶対的な証拠となるものの一つだ。また、合成写真であるかどうかは、画像を一度専用のスキャナかコンピュータ内の検証ソフトによって証明することができる。これによって、偽造写真であるかどうかも徹底的に調べられる。もちろん、そんな時間に余裕がある時点で、緊急事態なんてほざいている暇はないのでは、と思ったのは、来琥だけではないだろう。

来琥は、周囲の警戒を行い、アメリカ人がいないかどうかを確かめていた。少なくとも来琥の周辺にそれらしい者はいない。来琥が

職員室方面にゆっくり歩き出すのとはぼ時を同じくして、校内に銃声が響き渡った。先ほど実穂と回った出し物の中には、バーチャルによるシューティングゲームを行ったクラスがあったが、あれだつてかなりの防音を施したものであるうえに、銃声も特殊なもので、一般に（といつても裏ルートだが）流通している銃の銃声とは聞き比べる必要もなく、その違いが顕著に表れている。

直後、実穂から送られてきた画像メモリを開く。黒く光る銃口、その銃を握る、日本人とは到底思えない顔立ち。それは少なくとも遊戯の類ではないことが分かるだろう。

「先生、緊急事態放送の許可をください」

「証明物品がなければ許可は認められん」

相変わらず頑固なものだ、と思いながら来琥は端末に送られてきたメモリを見せた。はつきりと映っている銃身を見れば、さすがに信じるだろう。

「ふむ、証拠写真の検証を行う。五分ほど待て」

「五分！？ そんな時間、待つてられません！ 今すぐ許可を出してください！！」

「検証に出されて困るものなら、最初から見せるな」

「被害が拡大する前に、まだ何も知らない人に呼び掛けるためでしょう！？」

「だあから、確定的な証拠がなければ認められん。帰れ帰れ」

お決まりの台詞。こちらの話にまるで耳を貸そうとしない。こうしている間にも犠牲者が出ているかもしれないというのに。

「先生！！」

そう言つてこちらに走ってきたのは、一人の女生徒。同じクラスの者だった。その形相は、必死に死から逃れようとしているのが目に見えて分かつていた。その女生徒の呼び声に振り向いたその教師は、たいそう面倒くさそうな表情だった。

「銃を持ったアメリカの人が、いろんな人を殺し……くはつ！！」

その瞬間、その女生徒は一発の銃声とうめき声と共に一瞬のうちに絶命した。間違いなく、銃弾は心臓を貫いていった。彼女の死を、無駄にするわけにはいかない。

「先生、早く許可を！」

「だつ、だから、しょ、証拠を……」

完全にその教師は目の前の出来事に顔面蒼白になってしまっていた。目の前で起きたことが信じられないのか、もうパニック状態になってしまっている。来琥はその教師の襟元を掴んで、先ほどまでのような下手に出るような言葉の一切を翻した。

「目の前で死んだぞ！！ 早く許可出せって言つてんだよ！！」
来琥の口調は、普段目上の者に対して使うそれではなくなっていた。ただひたすらに、自身の主張を押し通す。傲慢と言われようが、どんな処分を受けようが、被害をこれ以上広げないために、厳しい罰を代価にしても、この腑抜けた教師の顔面を一発くらいは殴りたかった。しかし、それは予想内の乱入によって阻止される。

「超能力者、確認！！」

WUSU兵、その手に握られているのは銃。おそらく、この後このWUSU兵は十中八九、こちらに銃弾を叩きこんでくる。来琥は掴んでいた襟を突き離し、自分は壁に隠れる。それと同時に銃弾が放たれ、紙一重で教師と来琥の間に銃弾が走る。教師の悲鳴と来琥の舌打ちが重なる。来琥の予想は正しかった。来琥はもうなりふり構っていない暇はなかった。職員室に強引に押し入り、そのまま緊急事態放送室へと走る。緊急事態放送室に行くためには、職員室を通るほかない。放送に許可が必要なのはこのためだ。

通常必要なのは学内専用の端末で配信されるのだが、それでは見たいときに見れる、逆を言えば、見たくない時は別にみる必要がなくなってしまう。その時のための緊急事態放送だ。その部屋からのみ、緊急通信という形で校内全ての端末に呼び掛けることができる。

「おい、明日未、何をして……」

そんな制止の声を今の来琥が聞くはずもなかった。教師はこれだから信頼におけない。今の自分たちがどういう状況に陥っているのか、危機感が全くない。少なくとも職員室にいるこの教師たちは、先ほど来琥の目の前で起きた出来事を知らない。そして、先ほどの銃声は何を意味するのかさえ。

来琥は緊急事態放送室のすぐ近くにいた教師の手首を捕まえると、放送室の指紋認証装置をそれでパスする。そして、緊急事態放送の設定を手元のキーボードで入力していく。来琥の指と目は忙しなく動き回っていた。そして、全ての端末へのアクセスが完了すると同時に、背後の扉が開く。そこにいたのはWUSU兵。すでに銃口はこちらを標準の中に収めている。放送室は広いわけではない。少なくとも、今の状態から場所を広く使って立ち回る、等ということとはできない。

ここまでか、と来琥が感じた時、WUSU兵は横合いからの刃に切り裂かれる。

「全く、ちよつと様子を見に来たらこれなんだから」

その後に愚痴を零しながら現れたのは、亜里去が現れた。

「心配してくれたのか？」

「し、心配なんかしてないわよ、ただちよつと気になってきただけよ！」

それはつまり心配ということだったんだろう、とこんな状況でなければ言っているだろうが、今は素直に感謝することにして、緊急事態放送システムの全てを立ち上げる。

「ありがとな、亜里去」

来琥は一度、そう呟くと、校内の全端末へ向かって画面を表示させた。

「浜比良高校内にいる、全ての皆様に報告させていただきます」
ついに、緊急事態放送は開始された。

21、暴走制御

桃斧槍との契約を、強制的に切断された新紅は、桃斧槍を含め、五神斬に関する記憶だけを全て失っていた。倉庫内において、自室で何をするともなく、ただただ呆けきっていた。何か大きなものが自分の中から抜け落ちたような感覚。自分の中の欲求を最大限に満たしていた何かが。

暇を持て余すことだけに時間を潰していた新紅は、何かが床に突き刺さる音を聞いて、ようやく自室から顔を出した。眼下にあるのは、斧槍と、斧部分の先に刺さった紙。少なくとも、その紙は故意に刺されたものであることは、新紅でなくても分かったことだろう。その斧槍の柄を握った時、失われた記憶の断片が一瞬のうちに垣間見えた。自分は、これを知っている。全てなのか一部なのかは分からない。だが、確かに自分はこの武器の存在を知っている。

紙には、『本物はWUSUにある』とだけ記されていた。しかし、新紅はその文に興味は示さなかった。ただただ目の前の物の正体を確かめたかった。そして、自分がどういう存在なのか、ということも。新紅はその柄を強く握り、床に突き刺さったままの得物を引き抜いた。

そこにあつたのは、先端を鋭く尖らせた槍。そして、その刃の根本に巨大な斧を装備させた、古来に使われていた斧槍刃。ハルバート新紅は失われた記憶の断片を脳内で拾い集め、一瞬のうちにその断片を組み合わせた。斧槍刃、桃斧槍。自分が五神斬生誕事件こあくまたちのよるにおいて契約を結んだ五神斬。全てを破壊し、貫通し、切断する。どんな五神斬をも凌駕する、最強の五神斬。

「WUSUが持つてゐるってんなら……」
その記憶を取り戻した新紅は、その口元を戦いへの喜びを表現すべく歪ませた。自分が求め続けた力、それを十二分に発散させるに足る破壊力を秘めた武器。

「ぶつ潰して取り返すまでよ!!」

未久は端末に流れ出した放送の発信者が来琥だということをして、複雑な思いを抱いていた。向こうはこちらの顔が見えるわけではないが、それでも未久や未奈にとっては長い年月を置いての再会であった。来琥と未久、未奈が十年もの間別々に育っていったのは、親の問題がある。両親が離婚する際、父が自分たち娘二人を、母が来琥をもらって別れたからだ。しかし、父はWUSUへの工作員として潜入中に戦闘となり、そのまま戦死。母はそれを追ってか、その数年後に事故で亡くなっている。そんなわけで、親がいない自分たちはそれぞれがそれぞれの場所で育っていった。

とりあえず、避難命令を出しておけば、まだアメリカ人の攻撃を受けてはいない人達を安全に避難させることができるだろう。だが、自分が表だって先導すれば、自分たちの存在がばれてしまうために、自分から動けないのが辛いところなのだが。未久や未奈に与えられているのは、WUSU兵を殲滅することであり、一般人の避難、護衛ではない。

しかし、その放送をまじまじと見ているにも関わらず、全く動じない者達があちこちに見られた。それどころか、その放送を片手間に、世間話をしている者達がいる。ざわついている者がいないわけではない。それでも、そのざわつきには現実感が感じられない。さすがに未久は痺れ切らして、その放送を見ながらも笑っている男に向かって話しかけた。

「あの、逃げないんですか？」

何重にも連なるオブラートに包んだ言葉で話しかけたが、その要旨は、つまり早く逃げろという意味だ。だが、その男から帰ってきた答えは、未久には全くの予想外の答えだった。

「え？ これも何かの催し物でしょう？ いや、最近のは凝ってますなあ」

どうやら、この男のように笑っている者達（未久の視界内のほぼ全

部）は、何かしらの学校側の催し物か何かだと思っている者がほとんどだった。W U S U の超能力者掃討作戦を知らないわけではないだろうに、何を悠長なことを言っているのだろうか。長年の平和ボケもここまでくれば、未久に言わせれば、ただのバカだ。

男の答えに半ば絶句しながら、引きつった笑顔で後ずさりするところしか、その時の未久にはできなかった。だが、その引きつった笑顔も、遠くから聞こえた銃声によってすぐに真顔に戻す。銃声のした方を睨み付けると、W U S U 兵がちょうど一人の超能力者を殺したところだった。しかし、それでも先ほどの男たちは、「見事な演出だ」などと賛辞と共に拍手を送っている。今のW U S U ならば、一般人をも巻き込みかねない。何せ、核を撃ちこもうとすらしているのだ。そんなやつらが、「一般人は絶対に殺さない」などというプライドを持っているとはとても思えない。

「こちら明日未久。W U S U 兵を発見。排除を開始する」

カムフラージュ用のギターケースに紛れ込ませていた未久愛用のスナイパーライフルを取り出すと、すぐにその場から離れる。スナイパーは接近戦では甚だ不利なのは、周知の事実だ。その理由は、アサルトライフルやサブマシンガンといった中距離戦の銃のように連射もできなければ、近距離戦でのハンドガンのように発射時の低反動性や携帯性に乏しいところにある。銃弾自体は、元々遠距離から放つためにかなりの速さを持つ高威力のものであるが、それゆえに反動が大きい。平地で立った状態では、体への負担を無駄に大きくするだけであるのだ。

未久が去った後、先ほどまで笑っていた男はW U S U 兵の癪に障ったのか、眉間を銃弾で貫かれてあっさりとその命を失った。

来琥と亜里去は、走りながら校内で暴れ始めているW U S U 兵を探し回っていた。亜里去にとっては浜比良高校を探索するのは初めてであったために、来琥の後ろをついてくることしかできなかった。来琥は刃薔薇を、亜里去は鈴嵐を構えながら、校内を探索する。だ

が、その途中、外窓に映った光景に来琥は目を奪われた。

浜比良高校の校門の前には、桃斧槍を持った男たち三人が浜比良高校を見上げていたからである。ここからでは人相を確認することはできないが、三人ともその体格は、同じWUSUにおいてもアメリカ人のそれとは一線を引くだけのものであることは、この距離からでも十分に確認することはできた。

「亜里去、あいつらを止めないと、面倒なことになりそうだぞ」

「全く、止めること自体面倒ね」

そう言いながら窓を開けると、片足を窓の淵に掛けながら、亜里去はそっぽを向きながら左手を出してきた。

「・・・・・・今回は特別に許してあげる」

来琥は亜里去が差し出したその手を握った。優しく、しかし、絶対に離さないように、強く。

「――行くよ！」

その一言と共に、亜里去と来琥は空中に飛び出した。亜里去が空中で空調操作機構を操作し、二人にかかる空気抵抗の量を増やすと同時に、下から上へと吹き上げる暴風を巻き起こす。それによって落下速度が極端に減少し、二人は何の不自由もなく地面に着地した。数十メートル先には、桃斧槍の三人が見える。ここまで近づいたことで、その人相が南米の人間のものであると認識するまでそう時間は掛からなかった。

「亜里去」

「・・・・・・何よ」

来琥が亜里去に呟くように呼び掛けると、亜里去もまた、呟くように反応した。

「たとえ暴走しても、お前だけは傷つけない」

それは、対五神斬の前に来琥が言える、唯一のことだった。亜里去に言葉を向けながら、来琥の目は、こちらに一步步寄り寄ってくる三人のWUSU兵に向けられていた。おそらく、あの中の一つは本物だろう。来琥が隠した桃斧槍を探り当てたということだろう。

やはり、隠すだけでは駄目だったらしい。予想内の事象とはいえ、一か月も経たないうちに見つけられては、来琥の努力も無駄であったのだが、過ぎたことを悔やんでも、どうにもならない。今は、目の前の事を片付ける。

相手との距離が二十メートルほどになったところで、来琥達の体に違和感が生じ始める。渦を巻き始める違和感は、男たちがその歩みを一歩進めることに大きくなっていく。だが、来琥も亜里去も、あの時と同じように暴走に呑みこまれるような失態を冒すつもりはなかった。暴走が体に与える負担は大きい。時にその精神を呑みこむほどに。だが、もし制御できれば、その精神だけでも、呑みこませずに戦うことができれば。数日前、暴走を制御するために訓練を行うなどと高をくくっていたが、そんなことをしている暇んど、本当はなかったのだ。向こうは本気で掛かってくる。例え一人が暴走しても、残る二人が上手くフォローに回るだろう。だが、こちらはそうもいかない。自分たちの力で、襲いくる巨大な力の波を受け止め、それを自分のものにする。簡単なことではないと分かっている。だが、それでも、今は。

「自分自身に勝つ……それは、お前たちを凌駕することと、同義だあつ……！」

来琥を包み込んでいた違和感は、激しい吐息と保たれた理性と引き換えに消え去った。それは、隣にいた亜里去も同じだった。来琥と亜里去は、この時暴走の制御に成功したのである。

「暴走を制御するとはな……こちらも、桃斧槍の力とやらを試させてもらおうか」

オリジナルを持つWUSU兵——アルナスは、不敵に口元に笑みを作って見せた。

来琥達の戦闘が開始されたところ、対駕は自身の周囲に集まって来たWUSU兵を殺陣椿で両断していた。切っても切っても、次から次へとWUSU兵が押し寄せてくる。まず間違はなく、WUSUが

狙っているのは殺陣椿——五神斬だろう。向こうがどれだけの戦力を用意しているのかは知らないが、向かってきただけ払い落とせばいい話だ。しかし、対駕は大きなハンデを背負わされていた。それは自身の超能力者としての能力である放電攻撃を行うことができない、という点にある。不用意に雷を放てば、無関係な者にも被害を与える可能性がある。殺陣椿だけで、全ての敵を一掃する。それがどれほどの苦行かは心得ている。だが、殺らねば殺られる、そんな当たり前な自然物理の法則に則って、対駕は殺陣椿を振う。

幸いなことに、向こうは銃撃戦を挑んでくるものはいなかった。それはこちらが雷の能力によって味方もろともやられる可能性がある、と感じているからである。そう考えてくれているのは、対駕にとって非常に都合がよかった。

ナイフで斬りかかってくるWUSU兵の斬撃を盾で受け止め、その状態で斬りかかってきたWUSU兵の腹部に、雷を纏わせた蹴りを食らわせる。放電はできずとも、この方法ならば確実にダメージを与えることができる。翳していた殺陣椿をそのままスライドさせる形で別のWUSU兵へと突き刺す。背後から斬りかかってきたWUSU兵へと刃を翳して受け止める。別方向から突進してきたWUSU兵を軽いステップでかわすと、左手に雷を纏わせる。背中を回転しながら左手で追いかけて、拳を突き刺す。そして、その回転を利用し、先ほどまで刃で応戦していたWUSU兵の腹部へと滑らせる。更にその回転の余力で、対駕の四時方向に位置していたWUSU兵に殺陣椿を袈裟懸けに振り下ろす。

「いい加減、俺には数で敵わないと悟ったらどうだ？」

対駕がWUSU兵に対して言うことはそれだけだった。傲慢だとは思わない。現に、WUSU兵達は未だ対駕にまともに触れる事すらできていないのだ。そして、それを相手にしている対駕自身、全く疲弊している感覚はなかった。だからこそ、きつい言い方ではあるが、撤退するよう諭したのだ。もちろん、それを聞き入れるかどうかは別だが。

聞き入れるならそれでよし。聞き入れずに向かってくるなら、斬る。

すでに周辺に一般人の姿はなかった。今なら使っても問題はないだろう。

対駕は殺陣椿に雷を纏わせる。WUSU兵の一人が、それを阻止しようとして対駕へと突っ込んできたが、殺陣椿の刃先を向けられてその動きを止める。その刃先を向けられたWUSU兵はなす術もなく、ゆっくりと後ずさりを始めた。対駕は、今一度WUSU兵へと言い放った。

「さあ、終わりにするか、続けるか――！」

よほどの忠誠心の上に戦っているのである。WUSU兵達は、対駕が与えた二つの選択肢のうちの後者を選んだ。WUSU兵が数に任せて迫ってくる。

来るならば仕方がない、と対駕は一度息を整えた。

終わりにするか、続けるか。

しかし、続けるというのは、それすなわち、向こうにとって最悪の形による終わりを意味するものだった。

「お前たちの行動は、終わりを選んだ、それだけだ」

対駕は、その刃先、そして、空いていた左手の指先から同時に雷を放った。二つの雷は、次々とWUSU兵の体を貫いていき、床に倒れる数を増やしていく。ちょうど駆けつけて、その光景を目の当たりにした援軍のWUSU兵も、対駕の鋭い目つきに恐れをなして逃げ出した。

対駕を中心とした円状に、WUSU兵の死体が並んだ様を拝めたのは、それから数秒後のことである。

22、現れた狂人

実穂は、屋上へと続く階段で戦闘となっていた。実穂の今現在の任務は、屋上から狙撃を行っている未久と未奈のところへ敵を送り込ませないことだ。近距離戦に不向きであるスナイパーだが、それ以上に、目標に対して集中している未久や未奈は、ほぼ完全に無防備な状態にある。幸いなことに自分は、WUSUから見れば完全なる裏切り者である。桜鎚を持っていることも相まって、WUSU兵達は実穂を狙うべき敵だと認識して向かってくる。一対大多数という圧倒的数の不利があるが、それは桜鎚と、ネイティブ純粹種としての自分でカバーできるはずだ、と実穂は自負していた。少なくとも、自分はここで倒れるわけにはいかない。自分が負ける、それは、未久、未奈が負けることであり、カウンターズ対抗者達が負けることとなるのだ。

実穂は、桜鎚を強く握りなおした。

実、カナ、価帆の三人は、元々価帆が使用していた研究所を奪還するため、彼女の研究所を訪れていた。研究所は今現在、カウンターズ対抗者達が占拠している。内部には無数のサポロイドと監視カメラが警備の目を光らせている。これは突破するには、一発のうちに大ダメージを与える必要がある。三人は、ある作戦を立案していた。その作戦に沿ってそれぞれが動き出す。

「価帆、準備はいいか？」

「待つて………うん、大丈夫だよ、お兄ちゃん」

価帆は今、この三人の中で一番集中力を必要とする役目を任されている。で、あるはずなのに、カナと話す余裕も若干はあるようだ。

「実？」

「どうした？」

カナの呼びかけに、実は振り向いた。カナは首を傾げながら質問をぶつけてきた。

「私もお兄ちゃんって呼んだ方がいい？」

この局面にきて全く予想外の質問だったが、実は完全無視を決め込もうとした。だが、そのカナの質問に即答する形で価帆が答えた。

「カナあ、その呼び方は私だけの特権だよ？」

「ま、べつに呼びたいわけじゃないし」

その答えを聞いてカナがそう諦めの言葉を返して、二人の小さな闘争は収まった。

価帆の準備が整えば、次は実の順番である。手元に火球を発生させると、それを少しずつ膨張させる。その最大の大きさは、ちょうど研究所の入口にぎりぎり入る大きさ。実はそれを片手で調整しながら、もう片方の手では新たな火球を少しずつ膨張させている。

「行くぞ、価帆」

「うん」

実は、最大に膨張させた火球を研究所へと投げ込んだ。カナの指示で価帆が研究所内に反射防壁を作り出して火球の方向を変えていく。実際のところ、研究所そのものに被害がいかないように、価帆は研究所の内壁全てに反射防壁を展開している。火球は通路を警備しているサポロイドを巻き込みながら進む。目的地は研究所の中心部。そこにいるはずの終間帝、ただ一人。実と価帆にとっては、両親を殺された組織のトップに立つ男だ。

「中心部に到達！！」

「火球、爆破！！」

研究所内部において、実が放った火球を爆発させ、研究所内部に潜む敵を一掃する。そして、研究所自体をその爆発から守るため、決して狭くないこの研究所の通路、部屋の全てに反射防壁を展開させる。何十回にも渡って反射を行うために、反射防壁の展開者である価帆への負担は大きい。

価帆の体には、各所の爆発をほぼ同時に連続で受け止めることになったために、その衝撃、反動が襲いかかってきている。実にはどうにもできないことだった。この作戦が成功するかどうかは、この

爆発に価帆が耐えられるかどうかガギになっている。

「くあつ……！！！」

価帆がその痛みにつめき声を挙げる。しかし、実には手の出しようがなかった。ただ傍にいることしかできないのだ。

「爆発、小さくなってきた……」

長い爆発がようやく終息し始めた。実は安堵の息を漏らしていたが、それでもまだ気を抜くことはできない。爆発が完全に収まるまでは反射防壁を展開し続けなければならない。

そして、爆発の規模が小さくなり始めてから一分後、爆発は完全に収まった。カナがその確認を完了し、実と価帆に告げた瞬間、価帆は足元から崩れ落ちた。実は回り込んで正面から抱き留める。研究所のどこかが爆発した、もしくは火災が発生している、などということはなかった。

だが、三人にとって予想外のことが一つ発生した。

「こんな作戦を展開させるとは、中々大胆なものだな」

「な……まさか……」

研究所と全く反対方向から現れたのは、終間帝だった。

来琥、亜里去は、桃斧槍を持つ三人のWUSU兵との戦闘に突入していた。来琥は刃薔薇を開いて銃弾を放って先制攻撃を行おうとするが、向こうのうちの一人が桃斧槍を投げつけてきたために適わなかった。刃薔薇を剣形態に戻して桃斧槍に対抗するが、その勢いに圧される。体勢こそ崩さなかったものの、相手がこちらにつける隙を与えるには十分だった。

こちらに桃斧槍を振り下ろしてきた者の斧部分へと、鞭が入った。その鞭は風を纏っている。

「亜里去！」

「早くしなさい、バカ！」

来琥の目の前に繰り出された鈴嵐は、その周囲に風を纏わせることによって、桃斧槍と互角に渡り合えるだけの刃を作り出している。

これが暴走した時の鈴嵐の力、ということだろう。空調操作機構の能力が存分に生かされているものだ、と、来琥は感じた。

「うおおおおつ！！！」

来琥は刃薔薇を振り抜くが、その攻撃を察知した相手が鈴嵐から桃斧槍を離して距離を取り、その斬撃を回避する。来琥はそれでもしつこくもう一撃を加えにいく。しかし、向こうのもう一人がそれを阻止する。来琥と亜里去は一度飛び退いて距離を取る。

「一応名乗っておこうか、俺はアルナス・ナルクだ。そして、姉のメリアと、弟のベイブだ」

「覚えておこう！！！」

来琥はそう言いながら再び走り出す。しかし、向こうは兄弟というわけあって、かなりの連携を取ってきている。波状攻撃。ベイブが真上から振り下ろし、それをかわしたところにメリアの槍が迫ってくる。それを刃薔薇でいなしたところに、アルナスの斧が振り下ろされる。それを刃薔薇をかざして受け止めるが、明らかな力の差があった。一度は桃斧槍に勝利している来琥とはいえ、三人一気に掛かってくるのは捌き切れない。

「くそ………どうすれば………」

アルナスの傍らにいる二人に向かって暴風が吹きつける。それが亜里去が行ったものであることは、想像に難くない。来琥はアルナスの腹を蹴りつけて自分も数歩後ろに下がる。

勝負は再びふりだしに戻った。と、思われた時、戦局は思わぬ方向へ動き始めた。

「てめえらか、俺の桃斧槍を持つてるつーのは」

来琥達はその声の方に視界を向けた時、その中心にいたのは、磯城革新紅だった。

アリスは、浜比良内を巡回しながら、遭遇したWUSU兵への攻撃を行っていた。その中にはかつて言葉を交わしたものもいる。だが、それで攻撃を躊躇すれば、自分がWUSUを裏切ってまで実穂

を守ろうとする意味がなくなってしまう。アリスは背後から銃弾を放って数人のWUSU兵をまとめて倒す。先ほども、WUSU兵達の行動は集団的だ。最初のうちは、多くても四、五人程度で行動していて、町全体のおちこちで埋め尽くされていた。アリスはある程度の人数を殺戮していたが、それはおそらく送られてきた人数に比べれば何十分の一にも満たないほどの人数であつてもおかしくない。だが今は、先ほどのように、道という道にWUSU兵がいるわけではなく、数十人ずつに集まって行動している。まるで何かにまとまって進行していくかのよう。

「何が始まるの……一体……」

アリスは殲滅行動を一端引き上げ、固まって移動していくWUSU兵達の尾行を開始した。もちろん、その間の周辺警戒は怠らない。常に左右と背後を気にしながら、尚且つ目標を見失わないように。

十数分が経過したころ、アリスはその行先を確認した。

「浜比良高校……!？」

WUSU兵達は、固まった上で、浜比良高校を目指していたのだ。今、浜比良高校は学園祭の真っ最中であり、来琥や実穂がいる。二人に共通することは五神斬を持っているということだ。やはり、超能力者の掃討という名目のもとでWUSUが目標としているのは、五神斬。圧倒的な強さを持つその武器を、WUSUはまだ欲するということだろう。先日までは桜鎚の使い手たる実穂がWUSUにいたが、実穂が脱走するのと入れ違うように桃斧槍を手に入れた。さらにWUSUには疑似タイプの桃斧槍もある。現段階で運用されている疑似型はメリア、ベイブが使っている二つだけだが、今後、量産される可能性はある。もっとも、その疑似型の設計構築図や内部構造図が入っていたデータコンピュータは脱走時に実穂が破壊したために、バックアップデータが無い限り、かなり時間はかかりそうではあるが。

「私が食い止めないと……」

自分がどこまでできるのかは分からない。でも、やれるだけはやる

つもりだ。自分の限界でも構わない。自分が食い止めなければ、実穂を、皆を守ることとはできない。

アリスは、浜比良高校前で突入のチャンス伺っていたWUSU兵達へと銃弾の雨を真横から降らせた。

新紅が乱入してきたことにより、戦局は混乱を極めた。新紅にとつての敵は、オリジナルの桃斧槍を持つているアルナス、ベイブ、メリアの三人。対して来琥と亜里去の敵もまた、WUSUの三人。無駄な立ち回りをしなければ、来琥達と新紅は、それぞれ敵の数を増やす必要はなくなる。予想外の来客ではあるが、上手く立ち回らせば、こちらにも勝機が見えてくるはずだ。

「亜里去、俺達の目標はWUSUだからな」
ターゲット

「分かってるわよ」

新紅に手出ししなければ、この勝負には勝てる。新紅は完全に自身の目的のために動いている。おそらく今新紅が持っているのは疑似型の桃斧槍だろう。暴走の感覚を全く感じさせないところが、それを思わせる要因となっている。誰が疑似型の桃斧槍を新紅に与えたのかは分からないが、おそらく、それによって五神斬に関する記憶は取り戻したのだろう。そうでなければ、わざわざこんなところまで新紅が出てくるはずがない。どう考えても新紅には、一日中動かないまま一日を終えているようなイメージしか湧かない。

「さあ始めようぜえ………」

新紅は、その口元に笑みを浮かべている。人が見たなら、それは狂者の歪んだ笑み。戦いだけを生きがいとするような人間が見せるような笑みだ。

「物資奪還戦つてやつをよお！！ WUSUのてめえらを全員ぶつ殺してなあ！！！」

「何故………お前は研究所の中に………」

「君たちがいない間、若干ではあるが、研究所の内部構造を変えて、

地下通路を作らせてもらった」

帝はそう言いながら、勝ち誇ったような笑みを見せた。地下通路、たしかに価帆が使っていたころまでは、そんなものは存在しなかった。この一か月の間に、このような襲撃を予測して作った、ということなのだろうか。実は、齒噛みした。完全に一手先を読まれて先手を打たれてしまった。この一撃に賭けていたために、こちらには次なるまともな手立てがなかった。価帆は研究所全体に張っていた反射防壁のために、しばらくの間は戦えそうにない。カナはエネルギー系の反射能力。帝は能力を持たないが、自身が持つ圧倒的体術によってこちらを追い詰めてくるだろう。今まともに戦うことができるのは、自分一人しかない、と実は覚悟を決める他なかった。

「お前が俺達の親に何をしてきたのか、その真実はもう知っている・
・・・・」

実は、自身の拳を握りしめる。だが、その目は帝から全くぶれることはない。

「だからこそ、俺はその真実を受け止め、そして焼き尽くす。お前の存在と共にな！！！」

そういいながら実は両手それぞれに火球を作り出してそれを振り抜いた。それと同時に、帝もまた、地を蹴って実へと迫った。

「望むところだと言わせてもらおう！」

23、運命、未変更

相子は、WUSUの核発射施設の制御室において、工作人員として潜入していた。核ミサイルはつい先ほど発射された。だが、それは相子の任務失敗を意味するものではなかった。相子の任務は、核兵器攻撃の阻止であり、核発射阻止ではない。それはつまり、核ミサイルの軌道を空中において変更させることで、太平洋上に着弾させる。そうなれば、犠牲となる生物こそ出てくるだろうが、犠牲者はよほど運が悪くはない限り、一人も出ないはずだ。

相子の用意は周到なものだった。監視カメラへの映像には、予めダミー映像を流し、制御室へ入るための指紋認証には、指を乗せれば必ず開くようにセットしてある。つまりは、指紋認証装置としての役割は全く果たせておらず、ただの開口ボタンと同じものとなっているのだが。そして、制御室内のWUSU兵達は鈴嵐で一気に殲滅した。軌道修正プログラムを核ミサイルに対して書き換えるには、百行近くあるプログラムを構築する必要がある。タイムリミットは五分。それまでに、このプログラムを書き換える。書き換えて見せる。

相子の指は、忙しく動き回っていた。

実穂は周辺のWUSU兵の数が少なくなってきたのを確認すると、桜鎚を振って残っているWUSU兵を一掃する。すでにまともにその意識を保っている者はいなかった。実穂は未久と未奈の様子を見るために屋上まで駆け上がる。屋上では、狙撃を終えた二人がこちらに歩いてくるところだった。二人とも、特に狙われたような形跡はなかった。そのことに安堵しながら実穂は、次の段階に進むことにした。

「二人は校内に残っているWUSU兵を探して。私は校外の警備に向かう」

「分かった」

「了解！」

二人はそれぞれが返事をする、腰に掛けられたハンドガンを握った。今はもう九割以上の一般人は校内には残っていない。さすがに人が次々に死んでいくのを見て、逃げ出そうとしない者はよほどの事情がなければ、バカとしか形容のしようがない。

実穂は未久、未奈と別れた後、階段を飛ばしながら下りて行った。

来琥と亜里去の目の前では、新紅が異常なまでの戦闘力においてWUSUの三人を圧倒していた。その目は、獲物を追い求める獣のそれである。先ほどの狂者の歪んだ顔はどこにも見当たらない。ただひたすらに目的の物を手にしようと暴れる猛獣さながらのその戦闘の中、新紅がアルナスの桃斧槍を弾き飛ばす。新紅は自分の持っていた桃斧槍を振り捨てると、その桃斧槍にジャンプして飛びつく。地面に対して演算反射を行うことによって生じる反発力を利用して飛び出した新紅は、その桃斧槍がオリジナルの物であると確認すると、プログラムコードを入力して桃斧槍とアルナスの間に契約系を出現させると、そのオリジナルによってその系を切断すると、そのまま自身との契約を結ばせる。おそらく、今この瞬間、新紅には暴走の危機が迫っているだろう。しかし、新紅は不敵に笑いながら地上へと降り立った。

「俺が……そう何度も吞まれるわけねえだろおおっ！！」

新紅は暴走を制御し、自分の力へと変えていた。その顔は悦びと自信に満ちている。

しかし、そこで来琥達、特に来琥にとって予想外の人物が校内から現れた。

「ラッコ……？」

校内から現れたのは、奈美だった。

実は帝へと火球を飛ばして攻撃を行っていた。しかし、帝の方はそれらの火球をかわすなり、実へと刃薔薇を振う。実はその斬撃を屈んでかわすと右掌の中に炎を溢れさせ、それを帝へと突き出す。帝は、その炎を殺陣椿で受け止めるとその時に実にできた隙につけいつて刃薔薇を突き出す。しかし、実の体に刃薔薇は当たらなかった。実がかわしたのではない。実と刃薔薇の間に発生した防壁が刃薔薇を弾いたのである。

「まだそんな力が残っているとはな……」

価帆が発生させた反射防壁。実は価帆に振り返った。先ほど崩れ落ちた価帆は今、自分の足で立って反射防壁を展開させていた。その息は荒い。このままの状態は、そう長くは続かないだろう。ならば、続いている間に終わらせるしかない。価帆がここまで力を発揮しようとしているのだ。自分がやらねば何の意味もない。

「実、私を忘れないでよ!!」

そう言いながらカナが実とは反対方向に位置し、作戦の前に吸収させておいた火球を放つ。帝がカナが放った火球の対応に追われている間に、実も火球を放つ。その火球を紙一重で帝はかわしてみせる。もちろん、それで終わりではない。帝がかわした火球はカナが吸収し、再び帝へと放たれる。実も火球による攻撃を行う。帝がかわした火球がカナに再び吸収されると、実は後方で待機していた価帆の名を叫んだ。

「価帆、行け!!」

「うん!」

それと同時に、実とカナは火球を放ち、帝はそれを回避してみせる。だが、攻撃はこれでは終わらない。直後、帝の周囲を反射防壁が取り囲む。そして、防壁に当たった火球は跳ね返って再び帝へと襲い掛かる。

反射防壁は自身の周りに展開することで自分に襲い掛かる脅威を跳ね返すものだが、その反射防壁を内側に展開すれば、当然エネルギー物質やら銃弾やは、反射されてその内側を駆け巡る。反射防

壁はその名称通り、本来の用途は防御であるが、逆転の発想によって、こうした攻撃に転じることが可能となったのである。

「なるほど、考えたものだな……」

帝は達観したような言葉を吐いてこそいたが、その顔に余裕は感じられなかった。

価帆の反射防壁は徐々に小さくなっていつている。それはゆっくりと出力を抑えていると同時に、帝の逃げ場を少なくしていくことを同時に行っていることを意味していた。

実は、この戦いの行く末が見え始めていた。

来琥は、突如現れた奈美に驚愕を禁じ得なかった。確かに自分は奈美を置いたままにWUSUの存在を感じ、行動をしていた。だが、奈美はすぐに逃げ出そうとはしなかった。少なくとも、来琥が行った緊急事態放送は聞いていたはずだ。

「奈美、何をしてる？」

「ラッコモ……そんなところで、そんな物を持って、何してるの……」

しかし、そこで新たに予想外の別の乱入者が現れた。奈美の前に立ち塞がり、奈美を庇うような形で現れた男の右手には根本に巨大な盾を装備した剣が握られている。

「羅絶対駕っ……」

来琥の横で、亜里去の感情が高ぶる。感情を制御できなければ、せっかく制御した暴走に呑みこまれる可能性がある。来琥は慌てて亜里去の気持ちを鎮めようと声を張り上げる。

「亜里去！ 落ち着け！！」

その来琥の声がどうにか届いたのか、亜里去は深呼吸を一つしてその高ぶった感情をゆっくりと落ち着かせる。

「お前たちと敵対する気はない。俺は護るべき対象を守っているに過ぎない」

そう言いながら、対駕は殺陣椿を大剣型に変え、こちらの様子を見

続けている三人のWUSU兵へと走り出した。その速さは、能力を併用して行われているものではない。以前亜里去が言っていたことであるが、対駕が持っている能力は雷。少なくとも、それを自己加速に応用することはできない。つまり、この速さは対駕が生来持っているものということだ。来琥も足の速さには自信があるほうだが、その来琥をうならせるだけの速さを、対駕は見せつけていた。

気づけば、対駕は暴走を起こしていない。走り出す少し前、僅かに呼吸が乱れていたのは、起こりかけた暴走を自力で制御したということだろう。

そして、対駕が走り始めると同時に、実穂も駆けつけた。その手には桜鎚が握られている。しかし、来琥は実穂の存在に気づくことができなかった。それは、対駕の圧倒的なスピードに目を奪われたからであるのだが、来琥にとって、そんな気の緩みが、全てを無意味の領域へと追い込むことになる。

浜比良高校の正面校庭に、一発の銃声が響き渡った。少なくとも、来琥が刃薔薇によって放ったものではなかった。

銃声と共に、対駕の体がその銃声に反応して止まる。

だが、撃たれたのは対駕ではなかった。

銃声の発生源は、WUSUの三人のうちのアルナスが握っていた銃からのものだ。

来琥の脳裏に、今まで考えたくもなかった一つの可能性が過つて、来琥は振り向いた。

来琥の視界に映ったのは、銃弾を受けて前のめりの状態で極短時間とはいえ、空中を舞っている奈美の姿だった。それに気を取られて無防備になった来琥にも銃弾が送られてきたが、それは実穂が咄嗟のうちに展開した反射防壁によって防がれる。その直後に、実穂は、自分と、来琥、亜里去、対駕、新紅、そして奈美の体を全て覆う反射防壁を展開した。

「奈美！！」

「代々木奈美！」

「奈美ちゃん！！」

亜里去、対駕、実穂がそれぞれ奈美の名を叫んだ。来琥は奈美に誰よりも早く駆け寄ると、その首筋に手を当てた。一発の銃弾によって、脈はもうなかった。来琥は、その瞬間には、叫ぶ以外のことはできなかった。

「——奈美いいいいっ！！！！！！」

来琥の悲しみは、その時に頂点に達した。だが、不思議とそれが爆発する感覚はなかった。ただ、その悲しみがほんの僅かずつ小さくなるにつれて、別の感情が大きくなっていった。だが、それでも何故だか心の中心はからっぽのような、そんな気がした。そして、それは来琥だけではなかった。亜里去も実穂も対駕も、心の中はそんな状態であった。唯一、新紅だけはそうはなっていなかったが、それでも、いつものようにけらけらと笑うようなことはしていなかった。来琥は、無言のうちに立ち上がった。WUSUの三人の下に、正面校門から大量のWUSU兵が流れるように押し寄せてきた。来琥以外の者もまた、無言のうちに立ち上がる。来琥の左隣に対駕、更にその横に実穂が並ぶ。来琥の右隣には亜里去がつき、その隣には新紅がついた。

アルナスは、その光景に目を見張ることしかできなかった。驚きに吞まれていたわけではない。このようなことが起こるのか、と、目の前で起こった事実を、事実と受け止めていないのである。来琥、亜里去、実穂、対駕、新紅。WUSUの兵達の真正面に並んだその五人に共通することは、誰の目から見ても明らかだった。

新紅の右手には、槍を基調としたフォーム。そしてその槍の根本部分に巨大な斧を装備させた斧槍刃ハルバード。

対駕の手には、鋭利なその刃先、そしてその根本に巨大な盾が装備されている鋭矛盾えいむじゆん。

実穂の手には、古来中国などでの戦闘に使われていた棒、そしてその両端に全てを破壊させる恐怖さえ抱かせる鎚が取り付けられた

両鉋棒。りょうこうぼう

亜里去の手には、鞭型の武器、そしてその各所から、独自に持つ空調操作機構による風の刃が形成されている烈風鞭。れつふうべん

そして、来琥の手には、一本の短剣。その刃の中心部は仮溶接されたように一本の筋が通り、その中に銃口を煌めかせている暗銃剣。あんじゅうけん

今、ここに全ての五神斬が、五神斬生誕事件以来に揃ったのである。こあくまたちのよる

24、五神斬

核ミサイルの軌道修正を行っていた相子は、軌道変更のプログラムソースを完成させた。外から独自にプログラムを持ち込めれば、ここまで苦労することもないのだが、残念ながら、ここには外からのプログラムを読み込むための装置がない。これは外部からのウイルスプログラムを流し込ませないための細工である。二十二世紀には、ウイルスプログラムも、それに対する抗体ウイルスプログラムも複雑になった。元のウイルスプログラムを、流し込ませたい媒体に直接入力する必要があるために、現代において、プログラムという概念自体が、古の産物となりつつある。だが、そこそが近代プログラムセキュリティの欠点である。内部に複雑なプログラムを埋め込んだ端的、大雑把なソースコードに切り替えられたために、その細部までを細かくチューニングすることは素人には難しくなってしまう。だからこそ、旧式のプログラムの細部を変更させてその中にウイルスコードを忍び込ませることで、現代のソースコードに対抗することができる。利便性の追求が、旧式に劣る隠密性を生み出したのである。

「これで、いける……」

完成したプログラムを流し込む。一つ一つ、確実に元のソースコードを侵食していき、急速に核兵器の軌道を修正していく。何の問題も発生しなかった。軌道修正は全て正常に作動し、核ミサイルは軌道を修正して太平洋上への着弾ルートに変更された。これから核ミサイルは、上昇後の水平飛行の段階をすつとばして下降動作に突入する。地球をほぼ半周させるミサイルだ。水平飛行なしでは届くはずもない。

「ミッション、サードフェイズを終了、ファイナルフェイズに移行する」

厳密に言えば、サードフェイズはファイナルフェイズと断言して

もおかしくはない。だが、ミッション中に気が抜けないようにと、
カウンターズ 対抗者達のミッションは、必ず脱出という名のファイナルフェイズ
が存在する。誰もそれに異議を唱えないし、それに合わせて行動し
ている。

「死ななければそれでいいけどな」

相子は一度口元に小さく笑みを零すと、WUSU基地からの脱出を
開始した。

五神斬が五つ揃うこと、そして、その全員が、思惑は微妙に違う
とはいえ、共闘関係に並ぶなどということ、一体だれが予測でき
ただろうか。今、五神斬を持つ者達の視線はWUSUへと向けられ
ていた。反WUSU勢力である対抗者達が作り上げた、神の武器。
それぞれがそれぞれの目的でバラバラに動いていたとはいえ、最終
的に全員がWUSUに正面切って戦いを挑む形となっているのである。

「五神斬の役目が仮にも果たされるわけだ」

来琥は自虐的にそう呟いた後、刃薔薇を強く握りしめた。WUSU
兵達は、来琥達が一步步を進めるのに呼応するように、ゆっ
くりと後ずさりしていた。傍から見れば、五神斬全てが並列状態を
保ったままに自分たちの方へと詰め寄ってくるのだ。恐怖、もしく
は感情をかき乱されない者は、よっぽど強靱な精神を持っているか、
ただの命知らずだろう。

そして、それに属する者は無謀にもたった一人で突っ込んでくる。

来琥は刃薔薇を銃形態に変形させ、その銃口から銃弾を発射し、
無謀に突っ込んできたWUSU兵の頭部を撃ち抜く。

「怯むな！！ 敵は五人だ！！」

アルナスがWUSU兵達にそう言うて喝を入れる。その言葉によっ
て覚悟を決めたWUSU兵達は、来琥達に向かって走り出す。来琥
達はその光景を見て、それぞれが構えた。と同時に、一気に突っ込
んできたWUSU兵達を吹き飛ばす。圧倒的な力を兼ね備えた五神

斬は、敵を全く寄せ付けようとはしなかった。

「てめえらよお……革新を遂げた俺に、敵うと思ってんのかあ……!?」

新紅がそう言いながら桃斧槍を振り抜き、その軌道上にいたWUS兵達を一気に薙ぎ払う。新紅は地面を蹴ってWUSU兵の頭上を飛び越え、アルナス達の前へと現れる。そして、アルナスと桃斧槍同士の戦いを始める。

「今の俺達は、お前たちなどには屈しない！ 絶対にだ!!」

その間に、対駕が刃先に雷を纏わせ、それをWUSU兵達へと放つ。その雷を諸に受けたWUSU兵達はその場に倒れこむ。実穂もまた、桜鎚を振り、そこにいるWUSU兵達に次々と端にある鎚を叩きつける。

「私は、奈美ちゃんが死んだこの現実を受け止めて、前に進んで見せる!」

主に実穂と対駕の攻撃によって、アルナス、メリア、ベイブへの道が開ける。来琥と亜里去は、そのできた隙間へと突っ込んでいく。

アルナスと新紅が激しい攻防を繰り返すうちに、来琥と亜里去も加勢する形で入っていく。

「てめえだけが敵じゃねえんだよ!!」

そう言いながら新紅は、斧部分をメリアへと振り抜く。メリアは自身の持っていた桃斧槍でその攻撃を防いでみせるが、そのまま反撃することは適わなかった。新紅の猛攻に迂闊に手を出そうものなら、来琥達でさえ、とばっちりを受けない、という保証はできないのだ。

亜里去はベイブとの戦闘に突入していた。亜里去にとって、桃斧槍とともに戦闘するのは初めてのことであったが、新紅が行うような、力に任せての攻撃ではないために、こちらにしても、基本的に忠実な動きを行って対処することができる。振られた桃斧槍に對抗して鈴嵐を振う。風の刃を纏った鈴嵐と桃斧槍の斧がぶつかる。

「お前たちは、ここで未来なくして死ぬ! そうすりゃ、全てが丸

く収まるんだよ！！ WUSUが世界を統治する、その世界のために、おめえら日本人は邪魔なんだよ！！」

「うっさい！！」

亜里去は鈴嵐を振り抜きながらベイブの言葉を遮った。そして、そこから亜里去の反撃が始まる。連続で別方向から刃を叩きつけ、こちらに付け入る隙を与えさせない。それはつまり、戦いを支配することと同じことである。

「俺らを殺せば、積み上げてきた過去も消えれば、輝かしい未来も消えんだよ！！」

「それは違っつ！」

亜里去は鈴嵐による攻撃を中断しないままに反論する。

「もう私の過去は何度も積み上げては崩された！！ けど、未来を掴むためには、今までの自分がなければできない！！ 私が今まで歩いてきた道、それが過去！！」

ベイブが遂に反撃を行ってきた。大きく振られた桃斧槍をかわした時、亜里去の脳裏に、ベイブが槍を突き出した後、そのまま斧部分をこちらに振ってくるのが見えた。この現象が何故起こったのか、大体の見当はついていた。亜里去が持つ、未来予知の能力。その余波が、敵の攻撃を予測できる形となって現れたのである。

「らあああ！！」

槍が突き出される。亜里去はその突きをかわすと、そのまま振り抜かれた斧もしゃがみこんでかわす。そして、その時にベイブにできた隙を、亜里去は見逃さなかった。ベイブの周囲の空調を乱していき、その行動範囲を極端に狭くしていく。ベイブの周囲を吹き付ける風は、圧倒的切れ味を誇る真空刃。ベイブの体を少しずつ、だが確実に切り裂いていく。

亜里去は、圧倒的な力の差を見せつけて、ベイブに勝利した。

実とカナ、価帆の攻撃によって、帝の攻撃はほぼ完璧に沈黙していた。反射防壁を解放した価帆は、そのまま実の体に密着させる形

で反射防壁を張る。

「俺達は真実を見つけ、知ることによって強くなる!!」

実の両手だけ反射防壁の展開を行わず、実は走る。帝が刃薔薇を振ってきたが、それは反射防壁によって容易に弾く。そして、背後から帝の両腕をそれぞれ掴む。

「それが私たちの進化であり、真価!!」

価帆の言葉と共に、実の両手から炎が溢れ出し、帝の両腕を焼切る。そして、抵抗不可能になった帝の正面に、カナが立つ。カナは自分の胸の前で掌を向けあうと、その間から雷を発生させる。

一か月前に、亜里去を守るために吸収した対駕の雷。カナの能力はエネルギー系の物質を吸収、膨張させて発射する能力。長い時間を掛けて膨張を続けていた雷は、ある程度の物質を貫く程度の能力は持ち合わせていた。

「行け！ カナ!!」

そう言いながら実は帝を押し出し、自分はその雷の余波を受けない場所まで下がる。

「いっけええええええっ!!!!!!」

カナから放たれた雷は、帝の心臓を貫いて、更に空の彼方まで伸びていった。

来琥とメリアが戦闘を開始した横で、新紅はアルナスに絶対的な能力差を見せつけていた。振られてきた桃斧槍は足裏で跳ね返し、その直後に桃斧槍の槍を突き出して再び行われる反撃を阻止している。アルナスはその攻撃をいなすことに神経を割かれているために、反撃の糸口を掴めずにいたアルナスに今までの中で一番の力で叩きつけると、アルナスに桃斧槍の斧部分を向けたままに、槍をメリアへと向け、そのまま突進させた。メリアの方は、来琥との戦闘に気を取られて、突進してくる槍の存在に気付けずにいた。

アルナスが動いた。

アルナスは桃斧槍を振り捨てると、全速力で新紅とメリアの間に

割り込んだ。新紅はこんなところで慈悲を働かせるような男ではなかった。元々残忍な性格であるということは、周知の事実であったために、その後の結果は、ある意味当然のものだと、少なくとも来琥は思っていた。

アルナスの心臓に、新紅の桃斧槍の槍が突き刺さる。

新紅は、実際のところはこれを狙っていた。本人は何のオブライトにも包むつもりはないだろうが、簡単にいえば、人の心を弄んでいるといってもおかしくはなかった。ただ、それが磯城革新紅という人間であり、そうした人間の心理を読み取って戦うのが磯城革新紅のやり方であることを知っていた。

「アルナス！！！」

「姉さん……………」

アルナスは、その一言だけ言うと、そのまま目を閉じ、仰向けに倒れた。新紅の顔には、表情という表情がなかった。さすがに高らかに笑い上げるのはこの場の雰囲気になわないと感じたのだろう。そういう意味では（かなり上から目線で言わせてもらえば）、新紅も十分に成長しているだろう。

「さあて、雑魚をぶっ飛ばさせてもらおうかあ！！」

新紅が来琥の後方へと走り去っていくと、来琥は失意の中にあるメリアに向かって刃薔薇を振り抜く。メリアはその刃薔薇を桃斧槍の柄で受け止めると、回し蹴りをしてくる。来琥はその回し蹴りをのけ反ってかわし、その反動を利用して右足を一気に踏み込み、その後、左足を同様に踏み込むと同時に、右足を宙に浮かせ、一気に飛び出す。その勢いに乗せて、刃薔薇を振り抜く。メリアはその斬撃を桃斧槍でいなして攻撃を免れ、すぐに反撃を行ってくる。来琥は刃薔薇を持って斧を受け止める。

「私たちは、生まれた時にはもう両親もおらず、周囲からは冷たくされて育ってきた！！ WUSU^{こじ}に来て同じ！ 確証のない切り札として使われ続けた。私は、この世界が憎い！！」

メリアが刃薔薇を押し込んでくる。だが、来琥はそれに屈するつも

りはなかった。押し込んでくる桃斧槍に対抗して、刃薔薇で逆に押し込んでいく。

「そうして世界を殺して、人を殺すことで、お前の兄弟は報われるのか！！ 自分の未来を誰かに委ねれば、積み上げてきたものは全て壊れる！！ そうなれば、お前が守ろうとしてきたものはどうなる！！ お前を守ろうとした人はどうなる！！」

メリアがはっとして目を丸くする。だが、こちらを押そうとする力は緩まらない。

「自分が作り、歩いていく道……それが未来だ！！！」

来琥はついにメリアの桃斧槍を弾き、攻撃に移った。連続で刃薔薇を叩きつけ、メリアの余裕をなくしていく。そして、一瞬のうちにできた隙について、メリアの右手を切り裂き、その手から桃斧槍を取り落とす。来琥は地面に音を立てて落ちた桃斧槍を足で滑らせてメリアから遠ざけると、メリアの背後に一瞬のうちに回り込んだ。

「だが、お前たちは、奈美の未来を奪った！！」

来琥は刃薔薇を開く。その中で銃口が煌めく。メリアが振り返ると共に、その喉元に銃口を突きつける。

「その代償、払ってもらうぞ、お前たちの命で！！！！」

来琥の刃薔薇の銃口が臨界し、メリアの喉元において爆発する。

偶然なのかどうかは分からなかったが、それと同時に、来琥の後ろで展開されていた戦闘も終わりを告げた。

25、過去と未来

メリア、アルナス、ベイブの三人が戦死した。それは、WUSUが絶望のうちにわずかでも勝ちを見ることを諦めるという選択肢を決めるためには十分な判断材料だった。また、核ミサイルの発射後の軌道が中途に変更されたことによって太平洋上に着弾したことによって、完全に攻撃手段を絶たれた、ということも理由の一つだろう。そして、WUSU所属の国々を何よりも落胆させる理由となつたのは、五神斬が一拳に集結したということだろう。それぞれがばらばらに動き、互いに敵対している状態ならば、各個撃破を行って対WUSU勢力を削っていくこともできたかもしれない、というのはほとんどの人が分かっていたことである。

また、アメリカのクラウト大統領が死亡したことによって加速した南米のWUSU制圧の画策もまた公にされ、今回の掃討作戦にはアメリカは全く関係していないことを自白した。今回の事件を機に、WUSUの体勢が見直され始めていたのは明白だった。世間からは南米諸国をWUSUの所属から離すことも考えられた。さらに、核兵器の使用が確認されたために、その風潮は更に大きなものとなったのである。

浜比良祭での騒動も収束したが、学校側の二週間ほどの臨時休校を決め込んだ。さすがに生徒に校内で死亡した人や散らかった教室の処理をさせるわけにもいかずに、教師陣だけで行っているようだが、その教師の方が人の死体を長らく見ていなかったために、精神的な意味で体調を崩す者が続出した。

その急遽できた休みの中、来琥達は一箇所に集まっていた。その中で目先だけとはいえ、敵意の視線を向けたのは亜里去だった。復讐の対象である対駕を睨みつけていた。来琥を含めた五人の間に妙

な空気が流れていたが、最初に動き出したのは対駕だった。握っていた殺陣椿を自分の前に放り捨てたのだ。

「まあ、目的はこのためだが……」

「彼女を守るためのものだったからな。もう必要ない」

来琥が驚いたのは、まさか対駕が最初に五神斬、殺陣椿を捨てるとは思わなかったためだ。それを見た亜里去もまた、きつく握っていた鈴嵐を殺陣椿に重ねる形で投げ捨てた。来琥は亜里去が頑なに鈴嵐を手放すことを拒否するかと思っていたために、意外だった。

「私の復讐は殺陣椿なんだから、持っていないやつ斬ったらただの犯罪者じゃない」

亜里去はそう言いながらそっぽをむいたが、来琥はそれを微笑みで受け流すだけの耐性をすでに身につけていた。続くように実穂も桜鎚を手放す。来琥は新紅の方に視線を向けた。新紅は来琥の視線に気づかないふりをしていたが、途切れることない視線を不快に感じたのか、持っていた桃斧槍を投げ捨てる。他の五神斬にぶつかって、ガシャリという金属音を立てる。

「まったく、捨てりやいんだろ、捨てりや」

来琥は、何の抵抗もせずに桃斧槍を捨てた新紅の姿を見て安堵した後、刃薔薇を五神斬の山へと投げ込んだ。

「準備はできた？」

タイミングよく価帆は現れた。価帆は五人がそれぞれ持っていた五神斬を手放している光景は、価帆にとってある意味救われたものであり、ある意味で無念の残るものだった。五神斬は両親が残した最凶で最高の形見。形見を壊すことは、両親を否定するも同じだ。それは分かっている。だが、これは認め、尊敬の上での否定だと自分に言い聞かせて、解約作業を開始した。

五神斬の分解コードの入力による解約は、五神斬が修復不可能なまでに分散する以外にリスクやデメリットはない。契約の糸を切るのではなく、解くのだ。五神斬側からゆっくりと解かれる糸によつ

て、五神斬と契約者との間の因果は完全に消える。それは限界まで伸ばしたゴム素材をゆっくりと戻していくように。一触即発の空気が、少しずつ落ち着きを取り戻していくように。

地面の上、価帆の手元で、コードを認識した五神斬が一つ一つ壊されていく。殺陣椿、桃斧槍、桜鎚、鈴嵐、そして、刃薔薇。

五神斬が壊れた後に残されたのは、どれが何処のどういう役割を果たす部品なのか全く分からなくなった金属片の山だった。来琥は安心と共に虚しさを感じていた。五神斬が分解したからといって、契約者であつた自分たちの五神斬に関する記憶が消えるわけではない。だが、これで全てを失つたような気がしたのは、来琥だけではなかつただろう。

「もう会うことはないだろうが、元気でな」

それだけ言つて、対駕はその場を立ち去つた。新紅もまた、無言のうちにガレキの山を背にした。

「来琥君、今度、未久と未奈に会つてあげてね」

カウンターズ

休みに入つた直後、実穂からは、未久と未奈は対抗者達の一員として活動している、ということは聞いていた。来琥はその口元に笑みを作り、無言で頷いた。十年近く顔を合わせてないのだ。来琥は、自分自身がどんな反応をするのか楽しみであり、不安でもあつた。

「さ、来琥、行くわよ」

「・・・・・・ああ」

何かの感情を押し殺して、亜里去は歩き出す。来琥もそれに釣られるように歩き出す。振り返つた来琥の視界に入つたのは、物理的な意味でばらばらになつた五神斬の前で手を合わせている価帆の姿だった。来琥は、敢えて声をかけずに立ち去ることにした。

研究所の中には、実とカナがいた。価帆が戻ってくるまで、自分たちがこの警備に努めることになっていた。さすがに、WUSUカウンターズも対抗者達も押し寄せてくるようなことはなかったが、本当に警備

ただだったために、むしろ暇を持て余していた。

「どうした、カナ」

実は、カナが何か言いたそうに下を向いたままだったのを気にして、声をかけた。カナはしばらく下を向いたままだったが、実が正面に視線を戻したところにようやく口を開いた。

「実……」

カナは、ようやくその一言を口に出した後、実に視線を向け、微笑みながら言った。

「世界って、狭いね」

実がその微笑みを正面から受け止める。その微笑みには、慈しみや悦びといった感情は見られなかった。ただ、どこか呆けきったような、虚しさを湛えたものだった。

口下手である実だったが、その中で一番に掛けるべき言葉は、すぐに出てきた。

「……そうだな」

カウンターズ

対抗者達の中では、未久、未奈、アリスが、メキシコ支部から帰還した相子を出迎えていた。

「お帰りなさい、姐さん！」

未久のそんな言葉も、相子は柔らかく受け止めた。未奈やアリスもまた、尊敬のまなざしを相子へと向けていた。

「大手柄ですよ、相子姉さん！」

核ミサイルの軌道変更のミッションの前に、殺陣椿の下についてたのは、帝が命令された殺陣椿の経過観察によつてだったのだが、殺陣椿も手放し、帝も死んだ今になっては何の意味も持たないミッションであった。

「木嶋相子、核攻撃阻止、及び殺陣椿経過観察のミッションを、無事に終えました」

相子はそう言いながら、につこりとその顔に笑みを作った。

来琥と共に歩いていた亜里去は、大きく背伸びを一つした。帰り道は亜里去と来琥の二人だけだった。まわりに人影は見当たらない。亜里去はよっぽど何か言おうと思ったが、言葉が見つからなかった。来琥と過ごした時間、そのほとんどはWUSUのことや五神斬のことばかりだった。ちよつとした幕間劇こそあったが、それもまた、本当に数えるほどしかなかった。自分は、本当はもつと普通の話がしたかったのかもしれない。あの時鈴嵐を手にし、復讐のためにひたすら戦ってきた。そのせいで学校にもまともに行けなかった。今思えば、自分は自分で人生を滅茶苦茶にしまっていた。ここから、自分はやり直すことができるのだろうか。何も知らず、ただ平和の中にいた自分を取り戻し、あるはずだった自分の姿へ。

「亜里去」

その声が鼓膜に入ってきたとき、亜里去はビクリと体を震わせる。来琥の声を聞いただけで、自分の意識が現実に戻され、それに驚いてしまった自分が恥ずかしくなって、顔が赤くなってしまふ。亜里去は来琥の顔をなるべく見ないように外の風景へと視線を送った。

「俺、思ってたんだ。五神斬を持って、力を手に入れて、自分はまけることはないと思いがっていた。けど、それは間違いだと気づいた。結局、大切な幼馴染一人守れないほどに、自分は無力なんだって、今回のことで気づいた。人は独りじゃ、何もできないって分かった。かけがえのない仲間。自分に足りなかったものが、この戦いの中で分かった。俺は何も知らなかった。大人になったと思っていたけど、本当は無知な子供と同じだった。俺はこれからも、一人じや何もできない」

亜里去は来琥の方を見ていたわけではなかったため、その表情は知るよしもなかったが、その口調と言葉だけは、真剣なものであると、よく分かった。

「だから亜里去。これからも、俺と一緒にいてくれないか」

その言葉に、思わず亜里去はその足を止めた。それを見た来琥もま

た、歩みを止めた。

来琥は何気なく放った言葉だっただろうが、その言葉は、亜里去でなくても、勘違いするには強すぎる効力を持ち合わせたものだった。

「もつと、かつこいい言葉選んだら？　どこの教師の台詞よ」

「・・・・・・ごめん」

亜里去が咄嗟に放った批判の言葉は先ほどの来琥の最後の言葉の印象が強すぎたために慌てて出したものであった。だから亜里去は、その来琥の言葉に対しての答えを返すことにした。

亜里去は来琥の方に振り返り、その胸に飛び込んだ。来琥が驚きながら亜里去の体を抱き留める。亜里去で自分で動いておきながら、高ぶる感情を抑えることはできなかった。

「あんた前に、私を絶対に傷つけないって言ったじゃない。ちゃんと、その責任取りなさいよね・・・・・・！」

来琥は、両腕で亜里去の体を優しく抱きしめた。

来琥のぬくもりが、直に感じられた。亜里去は目を瞑ったまま、その両目から涙を溢れさせていた。

亜里去の言葉に対して来琥が返した言葉は、とても単純なものであつた。

だが、そのシンプルな言葉は、亜里去が一番求めていたものだった。

「——ああ、もちろんだ」

25、過去と未来（後書き）

本作は空想科学祭2011参加作品となっております。

他の作家の皆様の作品にも、是非目を通してみてください。

また、本作はBLUE部門登録となっておりますが、辛口評価、感想は大歓迎でございます。気兼ねなく暴言をたたきつけてください
^^;

皆様、ここまで長く拙い文章におつきあいいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5083v/>

双視者 ~ Past&Future ~

2011年9月4日13時28分発行